

東京大学立花隆ゼミ '08駒場祭企画

今語られる 東大，学生，全共闘

2008.11.23



東京大学立花隆ゼミ '08 駒場祭企画 今語られる 東大，学生，全共闘

参考資料

もくじ

巻頭言	1
1 東大ゲバルト壁語録	3
2 駒場祭に向けての事前対談	13
3 全共闘運動 ～興隆と，その終息～	19
4 インタビュー集	21
4.1 最首悟氏	22
4.2 干場革治氏	31
4.3 若松孝二氏	37
4.4 三浦聡雄氏	45
5 用語集	59
6 いま，東大生にきく	69
7 叫びと反響の記録	73
8 山本義隆のアクチュアリティ	81
9 今，表現することとは	87
ゼミ生から	97
文献一覧	103

巻頭言

「KEN BUN DEN」は「見聞伝」

立花 隆

第一次立花ゼミ（'96年）のタイトルは「調べて書く」だった。調べて書いたものは、インターネットのページを通じてどんどん発信した。調べて書くだけでは自己満足に終わってしまうが、読者にメッセージが伝わり共感してもらえれば、書いたものが生きてくる。そこで、翌年ゼミのタイトルを「調べて書く、発信する」に変えた。

第二次立花ゼミ（'06年）も、基本的にやっていることは同じである。「調べて書く、発信する」を続けているわけだ。発信するメディアとして、インターネットに科学メディアサイト「サイ」を構築した。一昨年から私は駒場に新しく生まれた大学院総合文化研究科の「科学技術インタープリター養成プログラム」の特任教授というポジションについたので、発信する内容も科学と技術に絞ったわけだ。

今の日本では科学技術の現状と未来を一般社会に伝えるメディアがあまりに弱体化している。OECDの調査でも日本は科学技術に対する関心も理解も世界で一番低いグループに属するという結果が出ている。

そういう状況を少しでも変えられないかということで、学生たちが関心を持ったさまざまな研究現場を片っ端から訪問しては、そこで見聞したことを伝えるページを作っていたわけだ。「サイ」のページは私がNHKで作ったドキュメンタリー番組「サイボーグ技術が人類を変える」と連動させたので、最初の1ヶ月で100万ヒット、その後半年間で累計1000万ヒットを記録するという大ブレイクを果たした。

その後私は、大学院総合文化研究科から大学院情報学環に身を移したが、駒場の全学自由ゼミナールはそのまま継続した。

しかし、今度は、コンテンツを科学技術に限らないことにした。どんなものでも、学生が興味を持つもの全体を対象とすることにした。そこで、インターネットの発信サイトの名前も「KEN BUN DEN（見聞伝）」とした。「見聞伝」とは、「見たい聞きたい伝えたい」の略で、要するに、「調べて書く、発信する」と同じ意味なのだ。

とにかく、参加する学生たちが、知的好奇心のおもむくままに、あらゆる対象に迫って、質問攻めにする。そしてそこで見たこと聞いたこと、取材しながら考えたことをどしどし発表していこうというページである。

若い世代の知的エネルギーとみずみずしい感性があふれたページを作っていきたい。

1

東大ゲバルト壁語録

“戦場”に残された落書きに見る夢

立花 隆

文藝春秋 1969 年 3 月号より

中核派の学生 150 余人がたてこもり、6 時間もの間激しい抵抗をした法学部研究室に入って、私は小さな落書きを発見した。

「ムー、会いたい／死んでもいいからもう一度だけ……／新宿西口でのお別れ／最後の tel／夢の中／……／さようなら／軽井沢／四月のスケートリンク／こけもも荘／小諸」

鉛筆の走り書きである。そのわきに、同じ筆跡で戦闘記録が残されていた。

「十八日 AM 六・四二，無事。正門前機動隊出現／八・三〇，無事。安田講堂催涙弾投下さる／八・三十八，無事／九・十七も無事／十一・二十五，バリケード一部隊破る ML（註・向かい側の列品館の部隊）／十二・一〇バリケードあやうし」

そしてもう一度、走り書きで、

「ムー、会いたい」

私は、ついさっきカメラの放列の中を、両手錠をはめられ、両側から機動隊に肩をつかまれて、法学部研究室から一人一人引きずり出された中核派の学生たちの顔を思い出していた。

彼がその中の誰であつたかは知りうべくもない。あるいは、鼻血をしたらせながら、傲然とカメラをにらんでいたジャンパー姿の男だったのだろうか？ あるいは、放水で濡れねずみになった身体を、いつまでも小きざみにブルブルふるわせながら、じっと下を向いていたまだあどけなさを残す少年だったのだろうか？

アッ、死相が見える

私たちは政治を類によって語ることに慣れすぎてしまっている。類によって語りうるのはロゴスだけである。しかし、行動はパトスの所産であり、パトスは個別的にのみ語りうる。

私は彼らのロゴスにも、彼らに対立するロゴスにも聞きあきていた。政治のロゴスは、いつも紋切り型で退屈だ。私が知りたいのはむしろ彼らの肉体であり、彼らのパトスだ。その時発見したのが壁だった。外に向かつては類として語る彼らも、壁に向かつては個として語っていた。

私はメモ帳をとりだして、催涙ガスに泣きながら、落書きを写しつづけた。法学部研究室から列品館、安田講堂と、みるみる二冊のメモ帳が埋めつくされた。ロゴスではあれほど単調なモノクロームに見えた彼らも、パトスにおいては、驚くほど色彩豊かだった。

そこには、苦悩と誇り、懐疑と確信、自嘲と侮蔑とが、ごった煮のまま残されていた。まず、彼らが、いかに色濃く死の影に染められていたかを知らねばなるまい。

「貴女とのお約束、とうとう守れませんでした。これも全く機動隊のせいなのです。心に少々の悔いはありますけれど、闘って死ぬのも（この後五文字判読不能）」

「全世界の“飢え”たる者の叫びを、この東大に我が命とともに埋めん……（死のみが我に残されし唯一の再生であった——レオン・トロツキー）。昭和四十四年一月十七日、子の刻。機動隊討入のとき。ゲバラへの道を思い、孤独なるアナキスト記す」

「君もまた覚えておけ／藁のようにではなく／ふるえながら死ぬのだ／一月はこんなにも寒い／唯一の無関心で通過を企てるものを／俺が許しておくものか」

これを単に、彼らが「死」というヒロイズムの最高形態に酔っての言葉と解釈するならば誤りだろう。事実、死者はでなかった。しかしそれは、あの状況を考えれば、むしろ僥倖だったといえる。一人、二人の死者が出て不思議ではなかった。そのことは、いくら確率が小さいとはいえ、一人一人に死の可能性を突きつけていたのである。だからだろう。死を予期しているのか、生を予期しているのかわからないものもある。

「ユーチャン、渋谷でまた会う日まで……もう一度会ってから死にたかった」

「僕の遺書／さよなら／愛する女性よ／あの夜の楽しさに一時お別れます／（恋人の似顔絵）／素敵な彼女は僕の帰りを待ちつづけている／でも僕は帰れない／S44・1・17／キ動隊がやって来る！」

死の影は肉体にも刻み込まれていた。

「若杉&久野／それは幽霊みたいな少年だった」

安田講堂のフロントが立てこもった部屋の鏡には、黒いユーモアがあった。鏡面に、

「アッ、死相が見える」

よし肉体の死に見舞われずとも、彼らの全員が逮捕、拘留になることはまちがいがなかった。別れのことばがいたる所書きつらねられていた。

「京子／俺が帰るまで浮気するな／ジロー」

「けいこ／ぼくはあなたを少年が少女を愛するように愛している」

「マリコ／この最後の瞬間の気持ちに後悔など全くなし」

「彼女へ／僕は最後まで日和らなかった／君がこの世にいる限り未練はあるが／革命のために生命をささげる」

多くが恋人にあてられている中であって、ただ一つだけ、

「いつも（一字不明）にする／お母さん／お父さん／いままでありがとう／MT」

あまりにも予期しない落書きに、写しとつても、しばらく目が離れなかった。緑色のチョークで、急いで壁に書きなぐったらしい。署名はMTともMJとも読めた。ML派がたてこもった列品館の二階である。恐らく機動隊がすぐ近くまで迫ったときに、これを書いて屋上に逃れ、階段に火を点けたのだろう。

毛沢東主義を奉ずるML派の落書きは、ほとんどが「毛沢東万歳」「造反有理」と毛沢東語録の引用だった。その中でこの落書きはあまりにも異質である。MTがこれを書くのは、相当気恥ずかしいことだったにちがいない。両親がこれを読んでくれる可能性はまったくない。それにもかかわらず、MTは切迫した危機の瞬間にチョークを走らせずにはいられなかったのだ。両親のためというよりは、むしろ自分のために。

客観的有效性よりは、主観的願望をとげるという意味で、MTの落書きを書くという行為は、この闘争全体を象徴している。

どうせおいらは挫折者

安田講堂攻防戦において、戦術的勝利の可能性はまったくなかった。物理的な力関係からみて、敗北は最初から明らかだった。それにもかかわらず彼らは、血を流して闘った。なぜか？ もちろん、戦略的勝利を信じてである。

「かけ値なしに東大闘争の勝利は世界階級闘争の巨大な一歩前進である」

「帝国大学東大を頂点として、全国学園闘争を勝ち抜き、七十年安保へと日本階級闘争の駒を進めよ」

「中核の部隊は最後まで勇敢に戦い抜くであろう。だが我々は玉砕の道を選んだのではない。我々の後に必ずや我々以上の勇気ある若者たちが、東大において、いや全日本全世界において、怒涛の進撃を開始するであろうことを固く信じているからこそこの道を選んだのだ。そうだ、我々はみずから創造的人生を選んだのだ／中核第二軍団第五小隊」

この確信が、彼らに生命を賭ける論理を与える。

「ぼくらにとって死とは、働く階級の全体的な歴史の中におけるものであり、そのことによって個としての存在が全体性を獲得し、自ら存在が生きるものとしての死である」

彼らは彼らの信ずる歴史に自分を賭ける。歴史が自分の味方であることを疑わない。

「ここにこのように歴史は我々の正義を証する！」

しかしどうだろう？ このドグマティックな信念だけが彼らを支配していたのだろうか？ 現実の歴史が、彼らの歴史観の正当性を検証するのは、気が遠くなるほど先の話だ。人はたかだか百年しか生きられない。一つの思想を検証するのに百年は短すぎる。とすれば、人と思想の間の可能な関係は、信仰だけである。

今書きとられた落書きは、その信仰のドグマの部分である。類としての信仰である。しかし、信仰も個別化され肉体化されるとき、さまざまな変容を生む。ドグマへの疑惑が、不安と苦悩にないまぜにされる。

「S44・1・18日、6・30／自分はなぜ学生運動をしているのだろうか？／革命、そんな事起るわけないよ！／もうすぐ留置所へ行く／二度目はいやだ！」

破れかぶれになるものもいる。

「昨日『前衛』……／今日『自立』……／どうせおいらは挫折者さ／もう暴れるだけだよ」

そして、おおい難い孤立感。

「連帯を求めて孤立を恐れず／力及ばずして倒れることを辞さないが／力尽くさずして挫折することを拒否する」

とはいふものの、

「人間を最も欲している者が／何故最も非人間的に見られるのだろう（革命までが んばろう）」

と自問し、

「我々は人にいやがられる“にわとり”であってはならない。夜明けを告げる美しい声の“にわとり”なのだ」

と自らにいいきかせ、

「労働者諸君／学生はここまでしかできない／後は君達の出番だ」

と悲痛な叫びをあげる。

祭り遊び

「闘争の中から生まれ育った天下の詩を欲しいよ！／闘争の中から生まれた人間の奥底の呻き／極限の民族の血／俺の魂がわかってたまるか！／たのむ！／詩を

くれ！」

それに応えるかのように、幾編かの詩が壁に残されていたが、あまり秀れたものはない。芸術の季節は行動の季節が終わってから始まるものなのだろう。中で、幾つか拾ってみる。

「遠い朝を歩く／それは僕にとって／一つの苦痛な現実だから／一人で歩く」

「冷たい風が吹き荒れるとき／世はかぎりなくかわき／人の住む街は燃えあがる時を待つ／風の中にふるえる小さな炎よ／風の冷たさは」

「遠くまでゆく君のために／遠くまでゆくぼくのために／遠くまでゆく人達のために／樹樹の木の葉を吹きちらす／冬の嵐の中で」

「君よ、最愛なる君よ／いつの間にか愛していた／——（中略）——タバコの煙りの消えない今日は／ナイフの輝きを追えるだろうか／愛する君、この屋上（註・安田講堂の）からげ界を眺める日がいつかあるだろうか／遠い日よ、私を置いて去らないでくれ／戦いの昨日よ、私の前に立っていてくれ／星空よ私を振り向いて微笑んでくれ／暗闇の下に、いまツバキの花咲こうとしている／JY」

火炎ビンを投げた学生が、すべてドラスティックだったわけではない。こんな少女趣味も混在していたのである。

孤立感と孤独意識はやがてニヒルへの傾斜をたどる。

「Nihilist とは無意識的自意識過剰者に与えられた絶望的呼称。悲しき露西亜テロリストへの虚ろなる呼称。全ての自意識過剰者よ、自身自らの命を絶ちて、神の唯一の遊戯に初めて矢を放て——悲しき学生より」

“神の唯一の遊戯”とは、現存しているこの世界、あるいは個別的には人生と解していだろう。ニヒルとは、あらゆる意味での神の否定である。

「天空を支配する神よ、おまえたちは我々人間を裏切ったのだ。真の言葉を奮い、はかり知れない人間の深淵に神人となった人間に残された唯一の真理は意志とリアリティ。神々よ恐れるがいい。今我々はおまえ達のくさりから離れ、反逆の旗をあげたのだ」

ニヒルはとめどなく深化する。

「絶望せよ。もっと深く絶望せよ」

「青年は廃墟をめざす」

そしてその極限にいたりつく。

「みんな死んじまえ」

「全部遊びだ……」

ニヒルの一方の頂点は殺意である。

「殺意なき者は戦列より去れ」

「俺が死ぬときゃ、機動隊も殺す！」

「修コロ、民コロ、ブッ殺す！ 全共闘」（註・修コロは修正主義者、民コロは民青）

「やるぞ、どこまでも！ /それが男の生きる道/男全共闘/角材手にし今日もいく
/民コロ、機動隊殺しに勇みいく」

ニヒルのもう一方の頂点は、すべての価値の否定から結果する遊びの意識である。

ニヒルのこの形態は、すでに我々現代人のすべての心をひそかに蝕んでいるのではないだろうか。安田講堂攻防戦のテレビ実況はオリンピックなみの視聴率をあげたという。口では「ケンカラン」といいながらも、心の底ではショーカページェントでも見る思いで、攻防戦の推移そのものを楽しんでいたことを否定できる人は少いだろう。

「Wie wenn am Feiertage? (アタカモ祭りノ日ノゴトク)」

「あたかも祭りの朝に/雷鳴の輝き（註・ガス銃、ヘリコプターの音のことだろう）」

祭りを感じていた人間が少なくとも二人はいるのである。祭りと遊び——その余裕が生んだことばの遊び。

「ローザの心は革命の心/おせばパトスの泉わく」（註・「指圧の心は母心……」のパロディ）

「昨日東大/明日日大/つづくゲバルト命をかけて/可愛いあの娘と訣別をして/
男命を革命にかける」

自嘲も含めて、

「とめて下さいおっかさん/背中の銀杏も笑ってる/女々しき東大どこへもいけない」

「全狂頭の大バカ」

女革マルは闘わず

価値の否定から、あらゆるものに侮蔑と嘲笑が浴びせかけられる。まず戦列を去った仲間に、

「(プラカードを持ったアヒルのイラスト。そのプラカードに) トウチャン、カア
チャンドウスル? オレ、オウチニカエツチャウ」

家庭の事情を口実に、機動隊導入の前に安田講堂から逃げだした者もいたのだろう。

「国際主義派全国委※名/ここに骨を埋めるぞ! /闘うぞ闘うぞ闘うぞシュー
ン……沈黙」

とりわけ革マル派への反撥は大きい。大部隊を擁している革マルは、法文二号館を守るはずだった。

ところが当日になってみると、たった十三名を残して、他は雲隠れ。その十三名も、大量の武器を蓄えていたのに、投石一つせず、アッという間に降伏した。

「男東大は闘った／女革マルは闘わず／古田、加藤は政府ブルの足／あなつかしき革命のない国」

「革マル粉碎／ことばの中に何があるのか！／常に初期マルクスから脱出せず／望みなし！」

民青、共産党への嘲罵が激しいのはもちろんのことである。

「民青バカ機動隊アホ／両方とも日本一のバカ／民青うじ虫粉碎」

「民コロ、機動隊の諸君頑張ろう／加藤代行」

「宮ケン官ケン粉碎（註・宮ケンは宮本顕治共産党書記長）」

「帝国主義を民主化すれば共産主義になる——日共（日共の民族民主路線への皮肉）」

機動隊には、

「（鏡に映る機動隊の顔の絵）猿が鏡をのぞきこんでも、そこにソクラテスはうつらない。うつるのはマヌケなサル顔だけである」

転じて自分たちを規定するとなると、

「蛤御門の変／久坂玄瑞死す！／赤門の変／新撰組—民青／幕府軍—機動隊／開国倒幕派＝／全共闘」

「我等遠方よりきて遠方に行く／蔵六は最後まで死ななかった／影丸！！／カゲマル Bund」

白土三平の「忍者武芸帳」には、影丸にひきいられる影一族という反権力者集団が出てくる。影丸は何度も死ぬ。死ぬたびに影一族から新しい影丸が生まれるのだ。その影一族で最後まで死ななかったのが蔵六である。Bund とは社会学のこと。

ハンマーもったドンキホーテ

さて、最も激しく嘲笑の対象となったのは法学部の教授連中である。加藤総長代进行を筆頭に、次々にやり玉にあげられる。

まず、加藤代行、

「義兄弟／日大古田＝東大加藤」

「加藤さん、この部屋に限り徹底的に破壊させていただきます。理由は最早いう必要はないと思います。あなたはとうとう右翼の本質を表わしましたね。日大の古田でもできないことを、よくやってくれた。マッ殺す（以上全文の上に赤インクのシ

ブキ)」

「加藤先生万歳／日本愛国党／加藤先生の弾圧に感謝の気持／『まんまんちゃん！／あっん！』（意味不明)」

近くの鏡に、

「加藤、お前の顔をこの鏡でよく見ろ。そうだ打倒される帝国主義者の顔だ」

平野竜一教授、

「日共の御用学者。スターリン主義のインチキゲンチャ」

辻清明教授、

「安全地帯のこちら側から横目でものをいう。中間主義でもなおかつ文句たらたらの御用学者」

坂本義和教授、

「朝日ジャーナルでめしを食う」

丸山真男教授、

「人気絶頂／かつこいい」

「三バカ大将／丸山真男／佐藤栄作／ルーキー新一」

「あんさんには縁もうらみもおまへんが、渡世の義理というやつで（破壊するの意か）」

「私の考える社会主義への移行というものはその社会の価値体系、信念体系の質的転換がなければ社会革命とはいえない——丸山真男の発言」

質的転換に傍点が打たれているのは、彼らこそその質的転換をはかっているのだという自負のあらわれだろう。丸山教授は、破壊された研究室を見て、

これを文化の破壊といわずして、何を文化の破壊というのだろうか

といったと伝えられる。まさにその通りだろう。しかし、文化とは価値体系のことであるから、丸山氏のロジックに従えば、彼ら“革命家”は当然のことをしたまでだということになる。

体系全体はともかく、少くとも、暴力の価値という点に関しては質的転換が見られる。

「豈有暴力屈理性寧使理性屈暴力（アニ暴力ノ理性ニ屈スル有ランヤ、ムシロ理性ヲシテ暴力ニ屈セシメヨ）」

「悪魔もよりつかぬ静寂の中で／ドンキホーテは夢を見ていた／しかしぼくらは自己を主張するに不可欠な／ハンマーを見ている／反革命分子よ気をつけるがいい／血と肉をもった存在が今や／鉄槌なしには主張されえないのだ」

ドンキホーテがハンマーを持てば、ドンキホーテではなくなるというのだろうか。

反逆こそ生なのだ

「バリケードを守れ／革命は今ここで胎動している」

私にはハンマーを持ったドンキホーテの姿が目に見え、もう少し彼らの論理を理解しようと努めてみよう。彼らにとって、革命とは何なのか？

「革命は愛だ」

それは結構。だが、いかなる愛なのか？

「革命とは男が女を強姦するがごときのものである」

女も嫌いなことではない（民衆に善をもたらす）のだから、暴力ではじまってもいいではないかということか。

「La charité serait-elle sœur de la mort pour moi

——ランボー（＋マルクス）——慈愛モ俺ニトッテハ死の姉妹ナノダロウカ」

ランボー「地獄の一季節」の一節である。（＋マルクス）となっているところが面白い。もとより革命の大義名分も charité（慈愛）にあるにちがいない。その慈愛も革命では“死の姉妹”だということだ。私には強姦の相手を殺してしまうと、屍姦にしなければならないのではないかと思えるのだが。“革命とは何か？”に対するもう一つの答え、

「僕らは生を渴望する、だから革命をするのだ」

これまた結構。だがいかなる生をなのか？

「『生か死か』闘いの必然性はここ以外発生のしようがないじゃないか！ K・I よ！問題は如何なる生かだ！」

と彼ら自身問いかけをくり返し、ある者がこう答えている。

「正に現代に於ては、“反逆”こそ生なのだ」

あるいは、

「存在の苦しさの中で真に生きるということは、闘いを通してのみ得ることができる」

なるほど、“反逆”と“闘い”が生で、それを求めることが革命なら、

「共産主義とは日々の否定である」

ということになるわけだ。ここからまたニヒルへの傾斜がはじまりそうな気がするが、まあ、そこまで信じているなら、もはやもう闘うことしか残っていまい。だが、*langer strebt*

「Es irrt der Mensch, so langer strebt（人ハ努力スル限り迷ウ）」

彼らにも迷いが生じた。闘いの前には、

「真黒に汚れた手の中に／ごそごそもぐりこむベッドの上に／ぼくたちは革命の夢
を見る／××××年／国会突入の後直ちに革命委員会結成」

といていたのに、電気を止められた暗黒の中で、一晩中放水をつづけられると、

「赤い氷のような／つめたいぼくの手の中で／革命が黒く沈黙した朝／酷寒の中の
白い息が／ぼくらの中に睡魔のベールをかぶせた」

もう疲れきっていたのだろう。

「我々は何も欲しない、ここにこうしているだけだ」

「何事の起こりしやは明らかならず」

ということばがでてくるのも、無理はない。

それにしても、と私は思うのである。

「いちまいの花卉からいくつの恋が占えるか、ためしてみたことがおありですか」

ということばを前にするとき、私はまだ彼らのパトスを数分の一も理解していないのでは
ないかという危惧から抜けでることはできない。

2

駒場祭に向けての事前対談

駒場祭での全共闘企画に向けて、東大生として壇上に上がるゼミ生で対談を行った。

参加者

学生S: 関 翔 平 (教養学部文科Ⅲ類2年)

学生H: 畠 山 暖 央 (教養学部理科Ⅱ類1年)

学生K: 近 藤 伸 郎 (教養学部文科Ⅰ類1年)

K 学生運動って一口に言っても、60年代付近に限っても60年ごろの第一次安保闘争としての運動と、それが一度衰退した後、再び盛り上がった68年、69年のいわゆる「全共闘」運動がある。60年安保の運動というのは、大勢の人がやった。10割の学生のうち9割くらいが参加したと一説には言われている。一方、68年、69年の方はだいたい1割か2割くらいだね。逆にいうと、8〜9割の学生は運動をしていなかった。という感じかな。

S 僕は60年安保と、60年代末の学生運動とではずいぶん性質上の違いがあったのだと思っている。立花先生はそこを両方とも体験しているから、学生運動がどう変化しているかという部分を個人史的な観点から語ってもらえるんじゃないかと思う。

第一部は立花先生の視点から見た東大のあり方、学生、そして学生運動の変化。第二部では、運動に直接参加した方々と、運動については何も知らない僕らのような今の学生との対談。運動に参加した人たちは当時何を思い、そして今何を考えているのか。僕ら学生がそうした人達に対して感じるギャップ。そして世代を超えて、何が変わらないものとしてそこにあるのかを探りたい。

K 60年安保の方は学生運動というよりは国民運動という感じもある。

S 60年代末の学生運動に参加したある人は、「60年安保の方は国民運動だったけれど、68年の運動から、70年安保までは革命運動だった」というようなことを言っている人もいたりする。

K もちろん、世代も違うし、運動の性質も違うし、参加している人のメンタリティーも違うんだよね。そこがどう違うのかということを探り出すことが面白い。例えば、70年以降は運動の一部が過激化していった、爆弾とかが使われていくのだけれども。どんどん少人数になっていった、そして少人数になればなるほど過激になる。その一つのなれの果てが、浅間山荘、あの連合赤軍の事件だね。その辺りも、世代、年代で運動の性質が全然違ってくる。

S 今はもうほとんど昔のような形での運動をする学生がいないということを考えると、運動することそのものがだんだん先細っていったという見方もできるよね。一人の人が運動全体を包括して、「あれはこうだった」と語ることがは出来ない。

K やっぱ、全共闘世代といわれる世代よりは少し下だけど、運動についての対談に参加していたりする 教授 が、「僕は語るべきじゃない」と言ったように、そういうのはあるんですね。実際に運動に参加したものじゃないと語れない何かというのがあって、それは言葉にはたぶん言い表せるものじゃない。肉体を直接動かすことによって、体験のレベルで得るものだと。

それをした人と、しなかった人との間で明確な質的違いがある。実際に体を動かせというのが、60年代の動きだったのだし。その点からしても「語る」ということの意味は非常に大きいですね。一方、東大全共闘の議長だった山本義隆は、実際に運動をやった人だった。やったけれども、彼は彼なりの信念があつて語らない。運動をやったけれども語らないという人と、やっていないけれども語るという人と、やっていないから語れないという人と、色々いるのですね。

S 一つ面白いと思ったテーマとして、実は全共闘に関してはいろいろな本も出ていれば、写真集も出ている。形は様々だけれど、色々な方法で語られている。しかし未だに、「全共闘」というものについて「語られないもの」として語られている気がする。

K ウィトゲンシュタインになって来ましたね（笑）。

S だからこそ、ある面としてはしこりのようにずっと解決されない問題として扱われているのかな、と思う。体験談を聞くだけでは懐古話になってしまう。何を聞けば、どこにあの時代の経験を投射すればいいのか。具体的な質問のレベルが難しい。

K 少なくとも言えることは。我々は体験していない。それだけは言える。「僕たちは知らないです。教えてください」と言って、問いをぶつけるというのは正しい姿勢だと思うし、立花先生もどンドンやれといっている。それは本当に、僕たちが素朴に不思議だと思う事を問いとして立てられたらいい、と思いますけどね。

H 今の我々学生からみて、あなたたちの行動は不思議だ、と。我々とは何か違った文化的背景があるだろう、と。

K その文化的背景を探っていく。

H だから、運動は現代の学生から見たら不思議な行為である、と？

K 不思議だと思わない？

H うん、不思議だ。

K なぜ不思議なのか、ということを素直に語りたい。それこそ、今運動しているやつらばバカだ、とそんなことをそのまま言ってもいいわけだと思う。けど、バカだと言うからには、なぜバカなのかとか、そういうことを掘り下げていく責任があるよね。

H こちらが不思議だ思うように、向こうから見ても現代の学生は不思議だと思っているかもしれないよね。

K 分からないよね。もしかしたら、必然だと思っているかもしれないし。だけど、皆言うわけなんです、何かが足りないと。五月祭のイベント（東京大学新聞が行った全共闘企画）で船曳建夫さん（東大教養学部教授、文化人類学専攻）が言ったように、「確かに現代の学生は優秀で、少なくとも僕のゼミの子は勉強もよくしているけれども、もうちょっと何か熱いものを求めてもいいのではないか」みたいな。そういうことは、鈴木邦男さん（民族派団体一水会顧問）も言っていたし。『怒りをうたえ』の上映会に参加したり、

内海信彦さん（美学校・河合塾等講師）との対談のイベントをやった御厨 貴さん（東京大学先端研教授）もきっとそう思っているだろうし。けっこう皆思っているんだよね。

H 「何が足りないか」ということをもう少し言語化するとどうなる？

K 何が足りないか……うーん。

S 客観的に見ると、「熱さ」とか「エネルギー」とか「団結する力」という言葉になるのだろうけれども、僕のような側からすると、「必要がない」となるのだよね。

K この前行なった内海信彦さんの教え子たちとの対談で面白かったのは、今の若者で芸術系のことをしている人たちってというのは、逆に「今の若者ほど運動をしている連中はいない」と言うんだよね。確かにそれは学生運動という形ではないのだけれども、自分なりのサークルならサークル、表現なら表現、芸術なら芸術ということに特化して、自分ができることを精一杯やっている。エネルギーを注ぎ込んでいる、と。そう言うのですよね。今の世代ほど熱い世代はない、と。だから、「熱さ」という抽象的な言葉で言い表すならば、今の世代は「熱い」んだと。その辺が難しいですね。

H 今の学生は選択肢が増えた、と。自分なりのサークル活動、表現手段を持っているから、より自分の欲求をストレートに満たせてしまう。だから、フラストレーションが溜まらない。

K それはどうかと思う。やっぱり、生きづらい時代って言われているよね。どっかでフラストレーションが溜まっているよね。

S けれど必ずしも、それが政治とか、社会の問題意識として発現しないという。

K だから、彼らと学生運動についても話したのだけれど、やっぱり彼らがそろって言うのは、当時の運動は「自意識回収装置」であったと。そのことは、運動が最終的に内ゲバになった時点でバレちゃったじゃん、と。同じことを繰り返してどうするの、ソ連ももう減んだじゃん、だから運動しないんだよ、という、極めて明確な論理だよね。それは、まさしくそうだと思う。

60年代と今との違いについて言うと、やっぱり学生が「体制」を明確に感じるかどうか、「反体制」を意識するかどうかということに一つの違いがあるのだと思うのですよね。左翼というのは体制を無理矢理に仮想敵として作り出してきたというところはあったと思う。まあ、「体制」が何なのか、というのは非常に難しい問題なんですけど。ただ、果たして制度なり何なりに疑問を全く抱かない学生でいいのだろうか、という問いはありますよね。それは、今の僕でも思っていることだし。だから、そういうことに意識を抱かない東大生が嫌い。

確かに、制度にうまく適合した方が生きやすい。けれど、それにはある種の危険性があって、批判をする者がいなくなると、全体の体系がおかしくなった時にどうするんだという問題が出てくる。それは立花先生が『東大生はバカになったか』（文藝春秋、2001年）でも言っているように大学に行く意味というのは、批判力をつけることだと。制度を批判的に見る力だと。全体の体系がおかしくなった時にそこに解決の手段を見出していけるインテリであること。そういうことですよ。それができなかったから、ファシズムになって、戦争になって、という言い方もできるわけで、今、実はまさしくそうなっているのかもしれない。プチナショナリズムの台頭もあって、今まさにその危険性があるというのは言えますよね。

S きっと団塊の世代の人々は、自分たちが生まれる前に、国家としての日本が通過した第二次世界大戦という経験を生かして、「自己批判する」という装置を自ら身につけたんじゃないか。戦後教育が、それにどの程度影響したのかははっきりとは分からないけれど。

それが、東大という組織、国家側の最高学府の中で機能していたというのは大事なことだったわけじゃん。それが、60年代末にああいう形で終わっちゃったから、今その機能がほとんど失われてしまった。これから、戦争に突っ走っていつっちゃうような大きな流れが生まれたとき、それに歯止めをかけるようなクサビが失われてしまっている、という危機意識を持たないといけないんじゃないかとも思う。

K 「体制」があるかないかは置いておいたとしても、何かしらの形でそれの中で踊らされている、と。その状況で一人一人は満足できる、エネルギーを上手く処理することができるのだけれども、果たしてそういう状態でいいのかということはあるよね。それでも悪くはないし、踊っていた方が楽ではあるのだけれども。あとは個人の問題になると思いますけどね。それで、その社会の仕組み、一人一人が自由に自己表現して、不自由なく生きていけるという仕組みが少数のエリートによって上手く築かれて、社会全体が上手く機能しているという状態だったら別に良いと思うのですよ。エリートはノーブレス・オブリッジで頑張ったら良いと。けれどどうも、それが理念通りに上手く行かないんですよね。内海信彦さんの教え子たちとの話の中でも出てきたわけですけど、それで、今の学生としては、現代を肯定する方向でいいんじゃないか、と。全共闘世代からすると、ひょっとすると「熱さが足りない」というそのギャップは残るわけなのですけども。

S そのレベルを突き詰められるような問いを立てられたら、そこが論争になるよね。

K 一つは「体制」があるのかないのか。あと、「熱さ」は何をもって熱さというのか。それと、何のために生きていけばいいのか、ということにもヒントを与えそうですね。若者なりの生き方の哲学。あとは上の世代に「足りないこと」を直接聞いてみるのがいいか。それから「革命」は何なのか、「革命」とは何のことを言っているのですか、と。今現役で運動をしている人でもそうなのですけど、何を目的としてやっているのですか、と。

S それは今やっている人に聞いた方がいいよね。お前らどこまで本気なのか、と。

K 果たして変わるのか、と。まあ、別に良いのですよ。学生の起業だってそうだし、東大を変えようという運動だってそうだし、変わらなくてもプロセスを楽しめるのなら、是非あったらいい。でも、果たしてそうなのか、と。変わらなくても、プロセスを楽しむために運動をできるのか、と。必ずしもそうじゃないと。皆に引かれながらも、苦しい思いでやっているわけなんで、苦しいのならやめちまえというところがありますよね。

H 論争としての形を作りたいならば、向こう側に若者批判をさせるべき。若者への批判としては、たとえば恋愛至上主義・無教養主義・刹那主義とがある。それをぶつけられる。こちら側としては、結局稼げていないだろうとか、そんなダサいこととして楽しいのか、とかある。

K お金の価値、就職はある意味で、全共闘の敵だよ。

H でも、今の多くの若者にとって就職とお金はきっと最高の価値でしょ？

K もちろん。

H これはいい。世代の違い。彼らはそれでも闘ってみようとしたわけだよね。ところが、今の東大生の多くはそうではない。最初から就職とお金にまっしぐらだよね。

S ネコまっしぐら。

H しかも、そうし続けると、自分だけ生き場所がなくなる。自分だけ損するのが嫌だと。自分一人だけ要領悪くやって、取り残される恐怖感が今の東大生にはあるよね。自分一人だけ就職に失敗するとか。

K それはあるよね。けれども、それが悪いとは言えない。

H 正直、全共闘世代の人たちだって皆でワーワーやっていたやつも、要領のいいやつはコロッと変わって官僚になったり、大企業に就職したりしているよね、それで一部の人たちは仲間に騙されたという感がマックス。今の若者が冷徹に彼らを裁いたら、「要領悪くて残念だったね」という一言に集約されてしまう。「大人になれなかったのだね、ドンマイ」って。

S でも、それは今の多くの東大生の意識に一番近いのかもしれない。

K それをそのまま向こうに言うとか、色んなフィードバックが返ってきて面白いと思う。

H やっていいのか？ 「今の学生からすると何と要領の悪い生き方してるの」と。

K いいんじゃないの。何も知らない若者を代弁して。けれど、論理で行くべきでしょう。それに、逆に僕らが論理で巻き返されたりすると面白いでしょう。

H 向こうの方が経験があるし、頭もいいから、巻き返してくるでしょう。どういう風に巻き返されるか楽しみだ。

3

全共闘運動 ～興隆と、その終息～

〔年表〕

1967 年（昭和 42 年）

1 月 26 日～3 月 27 日	東大医学部生，研修医による無期限ストライキ
10 月 8 日	佐藤首相ベトナム訪問阻止闘争（第一次羽田事件）
	京大生・山崎博昭が機動隊との衝突で死亡
12 月 19 日	東大文学部，「暴力事件」を巡り学生処分を発表

1968 年（昭和 43 年）

1 月 29 日	東大医学部，無期限ストライキに突入
2 月 19 日	春見医局事件
3 月 11 日	医学部教授会が春見事件の学生処分を発表
3 月 28 日	卒業式中止
4 月 15 日	東大医学部，新入生から青医連（OB）まで計 8 学年がストライキに突入
5 月 23 日	日大で初の 200 メートルデモ
5 月 27 日	日大全共闘の結成
6 月 15 日	医学部全共闘が安田講堂を占拠
6 月 17 日	東大・大河内総長が大学構内に機動隊を導入 占拠していた学生を排除
6 月 20 日	機動隊導入に抗議する全学集会が開かれる
6 月 26 日	東大文学部が無期限ストライキに突入
6 月 28 日	大河内総長，安田講堂で会見
7 月 2 日	安田講堂が再占拠される
7 月 5 日	東大全共闘の結成
7 月 15 日	全共闘，7 項目要求を決定
7 月 24 日	東大助手共闘の結成
8 月 10 日	東大が「8.10 告示」を発表
8 月 28 日	医学部全共闘，医学部本館を封鎖
8 月 29 日	読売新聞の記事について医学部生が抗議 読売事件に発展

9月10日	文学部学生の処分が解除される
9月19日	工学部無期限ストライキ突入
9月27日	経済学部無期限ストライキ突入
9月28日	教育学部無期限ストライキ突入
10月2日	理学部無期限ストライキ突入
10月4日	薬学部、農学部、無期限ストライキ突入
10月12日	法学部無期限スト突入で、全学ストライキへ
10月21日	国際反戦デー。新宿、防衛庁、国会周辺でデモ 新宿騒乱に騒乱罪の適用
11月1日	大河内総長とほとんどの評議員が辞任
11月4日	加藤一郎総長代行を選出 林健太郎文学部長がカンヅメ団交される (173時間軟禁。解放後、林文学部長は緊急入院)
11月12日	総合図書館封鎖を巡って全共闘と民青系が衝突
12月1日	駒場共闘、駒場第八本館を封鎖
12月2日	加藤代行、「学生諸君への提案（加藤提案）」を配布
12月6日	入学試験中止の可能性が報道される
12月25日	法学部スト解除
12月26日	経済学部スト解除
12月29日	文部省、東大入試中止の原則決定を発表

1969年（昭和44年）

1月9日	七学部集会を巡る学生衝突、機動隊再導入
1月10日	秩父宮ラグビー場で七学部集会 全共闘を除く学生が大学と確認書を交わす
1月11日～14日	医・文学部を除く八学部で相次ぎストライキ解除
1月18日～19日	安田講堂攻防戦
1月20日	政府が東大入試の中止を決定
1月21日	駒場第八本館の封鎖解除
2月3日	医学部ストライキ解除
3月4日	教養学部教授会カンヅメ団交により、駒場に機動隊導入 学生41名逮捕
3月10日	文学部ストライキ解除

4

インタビュー集

4.1 最首悟氏

(元・東大助手共闘)

東大闘争において、有志とともに「助手共闘」を結成し、研究者の立場から全共闘運動に参加した最首悟氏にインタビューを行った。東大の学生時代には60年の第一次安保闘争を体験され、助手時代に再び東大闘争に身を置いた最首氏は当時何を思い、そして今何を思うのか。話題は当時の体験から始まり、思想の持つ問題性や、個人論、近代論にまで及んだ。

世代的な感覚

——今日はよろしくお願ひいたします。まず僕らの問題意識としては、学生運動をやっていた時代の人たちと、今の学生である僕らのメンタリティーがそんなに違うのかな、という問いから発しました。しかし、「当時の人たちはなぜあれほど運動をしていたのか」という素朴な疑問があったんです。また「同じ学生運動でも、全学連運動と全共闘運動の質的な差はあるのではないか」ということにも気づき始めました。本日は、当時の学生のメンタリティーを探りながら、団塊の世代の方々や、学生運動の興隆期を複数回にわたって体験された最首さんのような方が今何を考えているのか、ということについてお伺いしたいと思います。

——当時の運動について、語りたがらない人が多いんですよね。「あの運動」を、歴史としてどういうふうに見たらいいのか——それが我々学生の側からの、すごく素朴な疑問なんですけど——よくわからなくて。「そもそもあの時代は何だったんだろう」というところから、この企画がスタートしているのです。

そうだねえ…。年代としては阿部知子たち、つまりあの当時の大学一年生が一番若いんだろうね。その後「高校全共闘」が出てきて、「中学全共闘」もあったかな。阿部知子って知っている？ 小児科医で社民党の衆議院議員。ぼくは今72歳だから、だいぶ年が違ふね。山本義隆が42年生まれ、67歳。もうそんなになっているのか…。

——山本義隆さんは、まだ予備校で元気に教えていらっしゃるんですよ。

まだ教えている。有名な坂間さんをのぞくと坂間さんは授業がないから、年齢的に現役ではぼくがトップなんだ。2番目が山本義隆。山本義隆は現役合格で、ぼくはちゃんと「駿台卒業」(笑)。

——なるほど、OBというわけですね(笑)。

——それでは、当時のお話を伺うところから始めたいと思います。当時、最首さんは東大の助手という立場だったんですよね？

そう、67年の6月に教養学部の生物教室助手になった。ドクターコース(博士課程)の1年、2ヶ月で中途退学。67年という、31歳です。1936年生まれなので、寺山修司とか、長嶋茂雄とかと同じ歳。

ぼくは、社会的年齢と生理的年齢が6年くらい違っている。小学校が9年かかって、それも1年はごまかしたんだ。予備校1年、駒場に行ってから3年、本郷に行くと「学校に来ちゃいけない」って言われて、3年。それで大学だけでも6年。ぼくは「34・S1・2組」

(昭和 34 年入学理科一類 2 組) で、今でも毎年同窓会をやっている、理科系の「国会突入クラス」なんだよ。

——1960 年の、^{かんば}樺美智子さんが亡くなった時の「突入」ですか？

そう、「6・15」。樺美智子さんはぼくより 1 つ下。そういうわけで、周りからずれていて、最初の「34・S1・2」をのぞくと、そのあと誰が同級生なのかわからないんだよね (笑)。

——当時は、「長く」学生をされていた方って結構いますよね。

いるいる。ぼくが駒場寮に入ったのは 1959 年の暮れ頃で、中寮の「くるみ会」。結核予後の学生の部屋で、「夜 9 時には寝なさい」とかいう規則があった。そういう部屋が 3 部屋 (1 部屋あたり 6 人) あり、3 部屋とも満員。そこへ入ると、年食った連中がいっぱいいた (笑)。ぼくの部屋にも「入学して即日退学」という厳しい目に遭った人がいた。合格発表後の結核検診で「退学」。翌年また東大を受験して入った、こんどは「『くるみ会』へ入れ」という条件付き。その人が「長老」だったね。

同部屋で、僕より 1 つ上の喘息の茅野寛志さん^{かやのひろし}という人がいたんだけど、60 年秋、喘息で死んだ。ぼくも喘息だから、辛かった。そんなふうに、結核がまだまだ残っている時代だった。

——そういう点からしても、「普通の人と違う」という感覚はありましたか？

小学校から同年齢の同級生がいなかったからね。そもそも大学に入りたかったのは、大学で初めて「年齢が問題にならなくなる」からだね。それまでは歳が違ったらまずだめ。小学校 6 年のときから、昭和 14 年生まれの弟のクラスに入れてもらった。昭和 12 年生まれのすぐ下の弟はもう中学生。その同じクラスの弟から情報をもらって、あんまり学校には行かなかった。

——そうした体験は、最首さんの後の人生にも影響を及ぼしたとお思いになりますか？

そうだね…一つには「人恋しい」かな。集団行動に憧れる。運動会と修学旅行がキラキラしていた。両方とも縁がなかったから。そして人恋しいのと逆に、人が煩わしい。「人恋しい」思いと、「独りになりたい」思いが交互にやってくる。

——家にいる間は何かやっていたんですか？

いや、特に何も。ただおかしいことに、元気なときに小学校に風揚げに行ったりすると、以前クラスが一緒だったやつが出てきたりして、「お前いいよな、学校に来なくて風揚げてて」とか言われた (笑)。牧歌的だね。

そういうわけで、「社会常識」がないんじゃないかな。「みんな一緒に」っていう体験がないし、「いじめ」にあうとも違う。3 年も違っちゃあ、「いじめ」にはならない。

——それでは、そうした「人恋しい」感覚が、学生運動によって満たされたという部分はあるのですか？

「学生運動をやっている」という意識はあまりなかったね。1960 年の安保闘争の時はもう、人恋しいのもそうだけど、「お祭り騒ぎ」だから。それで、学生運動というよりはクラス単位で運動をやるという感じで、さっき言った「S1・2 組」もそういうクラスだった。先生の協力はどうしても必要で、担任が、久賀道郎^{くがみちお}さんという若手のすごい数学者だった——この人は悲劇的で、ニューヨークで死んだけど——その頃は 30 歳になるかならないかで、非線形幾何学のバリバリ。そのすごい先生の授業はデモに行くといえほとんど休講にしてくれた。後で、夏休みにその分の授業を全部やる、といわれてがっかりしちゃったけど (笑)。

——当時、駒場にそういう先生方はたくさんいらしたんですか？

結構いたね。

——それではもう、60年安保闘争は「学生だけ」というよりは「国民運動」というイメージだったんですか？

そうだね、「学生運動」というと、相当プロフェッショナルなんだよ。やっぱり「革命運動」だから。ただ学生運動が独立し始めたのが1958年。共産党から学生や相当数の文化人が飛び出した。共産党からすれば除名した。

それまでは左翼と言ったら共産党しかなかったんだけど、1956年から本家のスターリン主義共産党のスツクモンダで、日本ももちろんその波をかぶって、学生が共産党から飛び出して、「共産主義者同盟」をつくった。1920年あたりからの「東大新人会」の系譜からすれば画期的だった。新左翼の誕生です。

国会突入まで

——58年に発生した共産主義者同盟（ブント）の活動は、60年の安保闘争でわりと結実するわけですね。

そして潰れる。結実したと思ったら潰れて、革共同、そして中核派と革マル派とになっていく。共産主義者同盟の学生組織である社学同の中に中大の「セクト・ナンバー6」という自立派ができて、ぼくはどちらかといえばその辺りにいるというような感じだったけれども、あくまでも「ベリヘリ」（周辺部）で、組織ならざる組織に共感していただけかも知れない。

ぼくは1960年の頃は学友会が活動の場で、学友会は自治会と対立していた。学友会は学生と教師の親睦団体で、体育会系なんだね。駒場寮には寮委員会がある。それに自治会があって三つどもえ。学友会と自治会は犬猿の仲なんだ。そうした組織の垣根を取っ払って、動き出したのが、60年の直接民主主義的な国民的うねりだった。ぼくは学友会の方で、6・15の前辺り、4月の段階かな…「淡青旗」っていうのをつくった、生地を用意したんだ。——本来は運動会の旗なんだけど——それにクラスの名前を書き込んで、それが70本くらい翻った。これは自治会ではできないことなんだね。

——学友会と自治会を両方含めて、活動をしたということですか？

クラス選出自治委員だから。

——学友会が中立的な組織としてやった、ということなのですか？

そう。ぼくらは、自治会執行部と一線を画しながらも、文化連合でもあるし。「赤旗を立てる」意識ではない。「淡青旗」を立てたということは、自治会からみれば噴飯もの（笑）。——だって「淡青旗」なんて「一高」の旗みたいなものじゃないか——。もちろん、寮には一高時代の落書きはいっぱい残っているし、酒吞めば猥歌に決まっていたしね。

そしてぼくらはクラス決議で「国会に突入しよう」と決めた。国会の前でも「死ぬ危険がある」とか「やっぱり入らない」とかいろいろ議論したあげく、人数をしばって突っ込んで、全員が怪我した。ただ、クラスからは逮捕者は出なかった。ぼくら「駒場組」の5mくらい横が本郷の文学部で、そこで樺さんが死んでるんだ。人が押し合う圧力はそれは凄かった、転んだらおしまいのような。「国民的うねり」というか、「お祭り騒ぎ」というか…でも何より、「直接民主主義」を一番感じた。まとめて言葉にすれば、「直接民主主義なくしては間接民主主義は成熟しない」という気持ち。その後、自民党は、ことごと

「直接民主主義は民主主義ではなく衆愚政治だ、民主主義とは間接民主主義のことだ」というわけだけれど。それはその時の人々の流れに、真っ向から反するものだ。

ぼくらがその頃聞きかじっていたのは、ことあるごとに激しいデモに繰り出したり、街頭バリケードを組んだりするようなフランスの伝統。そういう状態を、ぼくらは「直接民主主義が息づいている」と思っていたわけ。ことあるごとに、何かしらの身体を張った「意思表示」をしなければいけない、と。

第1次安保闘争は、その機運が一番盛り上がったもの、その後——日本人はおとなしくなって、生来おとなしいのか——結局、そういう風習にはならなかった。マスコミの労働組合、全学連叩きもすごかったけれど。労働組合にストライキをやめさせるように徹底的に弾圧する、その一翼の大きな役割が新聞だった。もっとも表面的に出てくるのは交通事情、デモで渋滞になる、その辺りで街頭行動もなくなってくるね。それで直接民主主義としては、条例のような形で盛り返してきた。原発建設の計画を住民投票で否決した巻町^{まきちょう}（新潟県西蒲原郡）などそのはしり。自民党はあいかわらず「認めない、民主主義じゃない」と言う。

今のところ、日本の直接民主主義といえば住民投票、中間的なのがアンケート、世論調査。そういうのを直接民主主義と言うのはいかにもおとなしくて、「紳土的」。やっぱり直接民主主義というのは、敷石を掘り返して投げたりすることだと思うんだけど（笑）、その点は日本には根付かなかった。もっとも敷石をすぐアスファルトに代えられたり、対応も早い。石畳でできたパリの街なんかとは違うんだね。

——「神田カルティエ・ラタン闘争」の時は、投石に利用されないように警察が敷石を全部ひっぺがしたらしいですね。

そうなんだ。せこいよなあ（笑）。

——そういう警察の介入だとか、体制側の書いたシナリオがあって、それにうまくはまってしまったという意識はお持ちですか？ そうしたことが原因になって、日本における「直接民主主義」的活動が沈静化したのかな、と思うことがあるんですが。

でも、やっぱり日本人は穏和なんですよ。「刀狩り」が成立するんだから。百姓一揆は権力奪取ではないし、明治以降の暴動は被差別者に向けた暴動だから。もっとも状況によっておとなしい日本人は何するか分らない。「おとなしい叔父さん」という類型があって、お酒が入ると、中国戦線で何したか得々としゃべり出す。ふだんはものも言えないような善良そのもの。

学生運動の変質

——運動のことに話を戻しますと、60年と68年・69年で運動としての「断絶」があるように感じます。その2つの時期を比べると、参加者たちのメンタリティーの違いのようなものは大きかったのでしょうか？

そうだね、6・15は、インターネットでみると、デモをしたのは「800万人」って出てくる。ものすごい人数が動いたんだけど、続かない。

学生は62年の暮れまではまだ「燃えた」。僕が「大学に来ては行けない」と言われたのは、62年の安田講堂前の「11・30全都学生総決起集会」というものを開いて学部自治会の責任者が多く処分された頃。直接には「総長缶詰事件」、茅総長を安田講堂の総長室に

一晩軟禁したという罪。

ことは大学管理法案をめぐることで、安保闘争の名残であると同時に、「学生の自治は大学の自治ではない」という決定的なポイントを含んでいた。そこで「学生の生徒化」を決めたわけだ。つまり、古典的な大学像から、ドイツと日本の「富国強兵」の大学像へ、という流れの中でも生き残ってきた『学生の自治』は『大学の自治』の一番の要」という考え方、つまり「大学の自治は学生がどう動くかによっても決まる」という、イタリア以来の「伝統」が潰された。「学生の自治を大学の自治から切り離すから、大学管理法案を引っ込めてくれ」というのが、国立大学協会と自民党のボス交渉の場でも出された大学側の妥協案だった。

そもそも大学管理法案がなぜ出てきたかというところ、1960年の「滑り出し」のところで「科学技術10年計画」というのがあって、その布石のために57年、理工系の茅誠司^{かやせいじ}が東大総長になった。ところが、その茅総長が、樺美智子の死に対して抗議声明と受け取られるものを出したから、自民党はカチンときた。「蜂起した学生は大学から出撃してきた」ことを旗印に、なりふり構わぬ高度成長のために大学を管理しなければならぬという方針を打ち出した。

茅総長の前が矢内原忠雄^{やないはらただお}でしょう。さらにその前が、吉田茂が「曲学阿世」と罵った南原繁^{なんばらしげる}。二人とも内村鑑三の門下で無教会派のクリスチャン、太平洋戦争に抵抗し終結させようとした。しかし南原繁を「曲学阿世」と罵る吉田茂も凄い（笑）。「曲学阿世」とは「学を曲げて世に阿^{おもね}る」っていうことだけど、それとは逆の人だからね。ぼくらは茅誠司の方が親しみはあったんだけどね——理科一類は工学系だから。理学系にいくつていうのがちょっと「へそ曲がり」、ところがぼくみたいな「へそ曲がりの曲がり」は、動物学科へ行った（笑）。その頃、理一から動物科へ行くなんていうのはあり得ないことだった。

また話が脇にそれたけれども、1962年の大学管理法案のところまでは学生も持ちこたえたんだ。学生自治会が先導しながら、直接民主主義の「火照り」の名残のようにいろいろ大衆的に抗議していくんだが、その後、急速に冷え込んだりして、「三無主義」や、政治とは関係がないアパシー、「ノンポリ」という言葉が流行り出した。

「やっと『戦後復興』した」という高揚感のもとで、1960年は、安保条約改定、石炭産業の終結（大争議）、石油産業の勃興、農業基本法の制定、国民皆健保、科学技術立国がひしめく。農業基本法っていうのは「農業の切り捨て」「食糧は結局は輸入でやっていくしかない」ということを示した法案だった。防衛はアメリカに、エネルギー、食糧は輸入に頼って、すべてを精密工業製品、特に自動車の輸出に賭けた。

それで、石油産業の勃興に伴い、水俣病が広がっていたんだけど、当時のぼくらはそんなことを全然知らなかった。59年12月30日に水俣病の処理を終えて60年を迎え、チッソは大増産に転じるなど露知らなかった。政府は、片方では「貧乏人は麦を食え」なんて言いながら、片方では「理工系倍增」、理系のぼくなど、まさに「売り手市場」のなかにいた。大学院生はあっという間に助手になる。文系は今も昔も厳しいけれど（笑）、理工系は浮ついていた。もっとも、時代の移り変わりの中で東大工学部の鉱山学科がなくなる。土木も落ち込んで「華^{さんば}の三化け」、つまり応用化学・化学工業・工業化学が大変な人気だった。優秀なのはチッソに行くと行われた。電子部門と原子力もね。

「全共闘」の下地

——63年から66年頃までは、学生運動の一種の沈滞期が続くわけですね？

日本の混乱期・高度経済成長への離陸——朝鮮動乱を背景にしているから、ある程度は後ろめたさもあるんだけど——その時代に、日本の進路が決まったわけ。これは、昭和21年と比すべき時で、21年元日、天皇が人間宣言をして、産業の振興をいう。それから15年いよいよ建物づくりに入った。

そして、急速な生活転換が行われる。ちょうど、「初速から抜けて、やっとフィールドを駆け始めた」。オリンピックがあつて、新幹線が通って、一万円札が発行されて…という3つの出来事で象徴されるように、日本中が沸いてる。そこでは「革命」とか「変革の息吹」とかいうものは一旦落ち込んで、というか吸収されて深閑としていた。世界的には結構盛んなところもあったんだけど。

日本で再び運動が高まり始めたきっかけがアメリカのベトナム北爆。65年になると、ベ平連が結成される。これは日本の市民運動の先駆けだよ——。既に「日本の位置」が世界的に問題になり始めていた。なにしろ米軍機は沖縄から飛び立っていて——沖縄はまだ日本じゃなかったけれど——、「沖縄をどうするか」という問題もあった。朝鮮動乱もそうだったけれど、日本は占領されていたから、日本の基地から飛び立っていくのは仕方のないことのようにだったけれど（日本の独立は52年）、沖縄を見捨てての独立だから、そこから米軍機が飛び立ってゆくのは仕方がないでは済まされない。ただアメリカの「核の傘」のもとで、これだけ軍事費を抑えた国は他になくて、工業育成に（汚職まで含めて）お金をつぎ込めた。その辺りが問題になってきたのが65年で、そして、四日市問題のような公害の激化も兆していた。

——では、その時期は静かなようで、「70年安保」につながるような運動の下地もつくられていった、ということですか？

そう、ベトナム戦争でその下地がつくられていった。世界的には、62年のキューバ危機を乗り越えたところで、一応冷戦にまで事態をもどした。ケネディとフルシチョフが話し合えるまでは、「核戦争まで一触即発」という、恐るべき時だった。

——日本の、国家として抱える矛盾があったということなんですか？

それはもう、ねじれにねじれていたんだけど、その状況を冷戦構造の中で、それを保存したわけでしょう。ルース・ベネディクトの『菊と刀』、諮問を受けた相当に実行力のあつた政策提言書だったと思うけれども、それを受けた「天皇制の存続」とか、その代わりに「宗教教育を一切禁じる」とか、（同じく占領された）ドイツはキリスト教だったから、「宗教教育」はそのまま残されたんだけど、やっぱり、天皇制・日の丸・君が代を残したのは、一つの「ねじれ」の原因だろうね。ずるずると引きずって——それが日本らしいんだけど——けじめがつかない。65年辺りから、ベトナム戦争をきっかけにして、それまでうやむやにされてきた、朝鮮半島・中国・フィリピン・インドネシア・ニューギニアまで展開した日本の侵略に対する責任が問われてくる。65年の日韓会談では、日韓基本条約によって日本と韓国とは早々と国交正常化を果たすんだけど、その時も、「国民の責任」、つまり「国民は『無辜の民』か」という議論があつた。

——国民としてもそのことに自覚的になり始めた、ということでしょうか。

どうだろうね。自虐史観などという考え方が一定程度広まるような下地、それは忘れっぽさという下地なのだけれど（加藤周一はドイツには決して忘れないという下地があると言っている）、アメリカという大国がベトナム解放戦線に残忍に襲いかかるという構図の中で、「国民の責任」論を論客たちや、学生運動の中の少数派として、学生が主張せざるを得なかった状況があった。ぼくらはマイナーだけれど「ベトナム反戦会議」というのを65年につくった。理工系の学生が主体で、その中心が山本義隆。ベ平連が「非暴力の市民」を標榜していたのに反発して、ベトナム反戦会議では「人民の武器としての暴力」を捨てない、と言っていたわけ。もちろん、それは山口二矢（1960年11月浅沼稲次郎を刺殺、留置所で自殺、17歳）のような「一人一殺」につながりかねないけれど、直接民主主義にはその荒々しさが必要なんだ。

——68年・69年の学生運動の流れの中で、ベ平連も運動として続いていくわけですか？

そう。やっぱりベ平連は「中央集権型組織運動」とは違う日本初の「市民運動」として重要であり、個人の責任においてを前面に打ち出した。左翼は共産党から飛び出たにせよ、除名されたにせよ、みんな一党独裁の共産党と縁があるのだからね。ベ平連はノンセクトを活気づけた。ぼくらのベトナム反戦会議はノンセクト・ラジカルと後で呼ばれるようになる。

全共闘というのは「セクトのせめぎ合い」なんだけれども、それが成り立ったのはノンセクトがいるからなんだ。ノンセクトに入ってもらって（異なるセクトが）なんとか同じ席に着く、という「ノンセクト頼み」の状況。ノンセクトとしては、「セクトを噛み合わせ、戦わせ、潰し合わせるといいんじゃないか」とか思ったりしていて（笑）。

全共闘の政治的な場面というのはほとんどセクトの仕掛け。ノンセクトは、学友会が自治会に馬鹿にされたように、セクトから馬鹿にされていた。「ノンセクトには理論がない」。理論とは何だろう。ノンセクトが育ってきた背景は、言ってきたように1960年の安保闘争時の「直接民主主義」、それから、65年のベ平連ができていく流れの中にある。もちろんベ平連と言っても、吉川勇一（ベ平連2代目事務局長）のようにポポロ座事件——東大構内に私服警官が入った——の被告で、共産党だった人もいる。小田実とか、鶴見俊輔のような、共産党からみれば右翼みたいな人たち、他にも日高六郎とか、いわゆる進歩的文化人などいろいろいた。ベ平連というものがあるがゆえにノンセクトの組織ならざる組織も育っていった、とも言える。

「理論」と《トウ》

この前、土本典昭さんの弔辞を『図書新聞』に書いたんだ。土本さんは戦後の学生運動の立役者の一人で——一時は共産党の中央にもいた人で、そこから飛び出してくるわけだけれども——、現実の「党」に対して、幻滅するわけだね。でも、あくまでクリアーかつクリーンな、理想的な「党」を待ち続け、それを実現しようとする自分のことを「未党派（みとうは）」って呼んだ。

例えば、野間宏（1964年共産党除名）の『わが塔はそこに立つ』（1962）という時の《トウ》は、時計台の「塔」であり、巨人たちであり、共産党なんだ。大学の時計台の「塔」はシンボルで、安田講堂の「塔」もシンボル、神聖な大学のイメージと財閥のイメージを

合わせ持っている。倉橋由美子の『バルタイ (Partei)』(1960, 共産党神話崩壊の爆弾的小説)は「党 (Party)」という意味。全共闘が安田講堂の時計台を占拠したりするのには、そういう流れがある。「時計台を占拠する」というのはすごくシンボリックな行為。「経済外的強制」というんだけど、なんだかわからないけれど神秘的な権威を持つものをみんな「塔」と呼ぶわけだ。土本さんは終生、未党派…「未だに《トウ》が建てられないでいる——だけど《トウ》はそこにある」と言っていた人。

それに対してぼくらは、自分で言うのもなんだけど「無党派」とか、ノンセクト・ラジカル——これはマスコミがつけた名前なんだけれども——とか言ったりして、既に《トウ》がない。そうすると途端に、「見取り図」はどうする、理論はどうする、という話になる。結局、組織を背景にしないで政治や社会は語れないだろう、ということになる。「個人のレベル」から一步踏み出さないとどうしようもない。つまり、無党派というのは「非政治派」なんだ。でも、「非政治派」の学生運動といえども、それが大衆的闘争の担い手であるとすれば、「権力奪取」と関係があるだろうということになる。そして無党派には「権力奪取」の思想がない。

——最首さんの意識の中では、どこを目指していたんですか？ 全共闘時代のゴールとしては。

ある意味では文化運動…いや、「個人論」のこねくりまわしにすぎない。「《個人》」というイデオロギーがない、受け入れる下地がない。じゃあ個人に代わるものを何というのか」というのが一番の問題。それはずっと今でも続いている問題。それどころか、もっと強くなってしまった。「個人」という枠づけに異議申し立てをする、縛られたくない、抜け出したい。「個人」が持ち出されてくる文脈に入りたくない、取り込まれたくない。それを身をもって示すにはどうしたらいいか。

明治以来の「和魂洋才」の問題をどう解決したらいいか、ということだね。日本の「個人」はみんな「和魂洋才」「精神なき《個人》」なんだ。「精神」というのは、キリスト教を土台とした近代ヨーロッパ——ウェーバーとヘーゲル——のイデオロギーで、キリスト教の国にはそういうイデオロギーがある。ウェーバーの『プロテスタンティズム』や、ヘーゲルの『『私』とは絶えざる現在の否定である』という思想だね。その辺りで、一応「個人」というイデオロギーは完成している。そんななが—い神学の歴史をもとにして、16・17・18世紀に培った《個人》というイデオロギーを日本人はどうみるか、という問題で、「進歩的文化人批判論」あるいは「大学批判」の一番の論点も、そこにある。みんなそれがわかったような顔をして「個人」に依拠して日本人批判をする。「そうやって批判する自分はどうかのよ」と問うと答えに窮してしまうことが日本の一番の病弊で、これを改めないといけない、この問題を自分は引き受けよう、というのがノンセクトラジカルだと言ってもいい。東大闘争での教授たちの権威のあまりに惨めな失墜はこの「個人」の化けの皮を剥がされたことにある。“individual”は難しいよ。

問いかけと「個人」

——個人という問題について言えば、全共闘が出した『果てしなき進撃』（東大闘争全学会議編、三一新書）を読むと、ある学生のセリフの中に「彼にとってその時、『主体』とは、この現実世界の『秩序』の中にかぎりなくギシギシときしみ続ける自らの存在のこと

であり、『自己否定』とは、もはや安らぐふところを失った自らの生命の道程——ジグザグの道のことである」というような一節がありました。これは、「常に個人として自分に問いかける」ということなののでしょうか？

うん。ぼくは「問学^{もんがく}」と言っているんだけど、「絶えざる否定」ということにおいては近代ヨーロッパの思想なんだ。その「否定」が前に向かっていくのと、後ろまで含んでしまうのでは少し違いが出てくる。ぼくの「否定」はけっこう後ろ向きの場合が多い…というより、『個人』といいながらの根無し草（デラシネ）としては、根を求めるためには後ろを振り向かざるを得ないんだ。その辺りはみんな曖昧にしたまま、進んでしまう。

その点からするとやっぱり、『個人』を継承しているのはネオリベ・ネオコンだと思う。例えば、フランシス・フクヤマです。フクヤマの「歴史の終わり」から「人間の終わりへ」だけど、「歴史の終わり」というのはベルリンの壁の崩壊によって「アメリカ型民主主義」が世界に浸透してしまうことへの憂鬱さが抑えられないこと。一方「人間の終わり」というのは、バイオテクノロジーが行き渡って、人間が死ななくなった世界に対して抱く、憂鬱を通り越した不安のことなんだ。その世界というのは、あくまで近代ヨーロッパの《個人》、「絶えざる前進」「抑制なき個人」というものの展開だね。そういう意味で、「個人」と言ったときには、それで成り立つ社会はやっぱりネオリベ・ネオコンなんです。

だから、ネオリベ・ネオコンの批判をやるからには「個人批判」をしなくてはいけないんだけど、日本のネオリベ・ネオコン批判にはそれがない。日本では「絶えず『個人』というものを実現しなくてはいけない」というふうになっている。その「個人」をどこかでゆがめているのがネオリベ・ネオコンだというけれども、それはちがう。やっぱり近代的個人の一番真つ当な展開というのがネオリベ・ネオコンだと思うね。そしてみんなが長生きして死ななくなったときにどうすべきか、というようなことで困っている。

——では、そうすると、今の時代は少なくとも西洋的・近代的な自我を問題にする場合、経済的な面でも環境的な面でも「ポスト」ネオリベ・ネオコンのようなものを考えなければいけない段階に入っているのではないかなと思うんですけど、そのパラダイム・シフトの先にある展望にはどういったものがあるのでしょうか？

ぼくは、『個人』ということを根拠にする限り、展望はないと思っている。ノンセクトラジカルとしては元に戻りながら、たとえばこの「日本列島」を考えざるを得ない。ヨーロッパにとっての森のような、日本列島にとっての「根」を回帰的に探っていかなければいけない。「学問」「科学」という限りは《個人》から出発しているからね…そこが、日本の場合はズレてしまう。

——ある意味では《個人》のあり方を問い直した全共闘運動から、最首さんのお感じになるそうした問題意識に対して何か手がかりのようなものは得られたのでしょうか？ 現代に生かしようような全共闘運動の要素というのは何でしょうか？ 一言で表すのは難しいと思うんですけども。

「自己否定」というのは大事だよ。でも、「自己否定」は「今在る自己を否定するのか」という問題ではない。それは「近代型」「ヘーゲル型」なんだよね。「前進が先か、否定が先か」みたいなことがあって…つまり「右肩上がり」があらかじめ設定された上で現在を否定しなければいけないのか…きっと、そうではないと思う。

——今日は長い間、本当にありがとうございました。

10月4日、「むくどりの家」にて
取材者：関翔平、近藤伸郎、山本遼

4.2 干場革治氏

(元・ML 派)

1966 年に東大に入学し、学生運動を駒場キャンパスで 7 年間続けた^{ほしぼかくじ}干場革治氏に取材をした。干場氏は東大闘争の中で ML 派の一員として活動をしていた。東大法学部を卒業したあと、氏は予備校教師や学習塾経営を経てコンサルティング会社を設立、経営している。40 年の時を経て語られる、干場革治氏の「全共闘体験、そして学生時代」。

東大入学、そして ML 派へ

——今の世代って、全共闘運動とは何だったのだろう、あんまりよく分かってなくて、僕らもやっぱり分かっていないのですけれども、漠然と興味を抱いている、ということがあるんです。「なんだったのだろうあの運動は、あの世代は」という素朴な感覚があって。あれから 40 年ということもあって、学生の側から全共闘運動を見てみよう、というのがこの企画なんです。

——干場さんにまず伺いたいのは、東大に入ってから何を思い、学生運動に参加したのでしょうか。

ぼくは 66 年に大学に入って、すぐに学生運動始めていたのだけれど……当時は少なくとも、貧しいっていう現実がまだあったんだよ。あるいは貧しい記憶があったから。

みんなが生まれた時はほら、とりあえず目の前の人間はどうか食べていけるでしょ。もちろん例外的にホームレスしたりとか、例外的って言うていいのかどうかは分からないけど、ぜんぜん少数でしょ。僕の実家は一応郵便局で、国家公務員だった。まあ子沢山だから大変ではあったけれど、食べていけないって事はないわけだよ。ただやっぱり周りにはね。うちに一升の米を借りに来たりする、いわば日雇い労働者みたいな、土地もない、畑もない、田んぼもない人がたくさんいるわけだ。それで、どっかの手伝いして食べていってる人間がいるわけだよね。銭湯もない小さな村なんだけれども、するとお風呂もない。すると僕のうちへたまに風呂貸してくれ、ってやってくる。それでも気を使って、湯船には入らないで体だけ流していくとかね。そういう貧しい現実が目の前にあったから。

やっぱり若者らしく、なんでそんな違いがあるのか、不平等があるのかという事を考えたのだと思う。

僕が東大に入った。しかも法学部だ。それで、法学部入ってどうするか。このままいくと、エリートコースを突っ走る。なんだ、向こう側に行ってしまうじゃないかと。貧しかった、今も貧しい魚民や農民とどういう関係になるんだと。搾取する側に回るのかと。どうしたらいいのか。それには搾取のない、階級のない社会を作るしかない、と。

——干場さんが共感したセクトというのは？

僕はどちらかといえばブント系で、ブントもいろいろと分かれていくから、その中で ML 派。東大闘争の時には、社学同系のマルクス・レーニン主義者同盟というのを選ぶわけ。

そしてちょうど文化大革命の時に、中国派になる。「文化大革命万歳」というわけ。僕らはいわばソ連の社会主義に対しても、中国に対しても、彼ら国家独占資本主義だ、社会

主義ではない、と批判するわけだよ。

そのときに僕らが批判してきた中国が、やはりカッコつきの「社会主義」になっても、革命は必要なんだと。理想としては世界革命ってのがああるわけだよ。世界全部同時に。

搾取される労働者が、今度は搾取のない、階級のない社会を作っていこうというわけ。それでいわば究極的には、「能力に応じて働いて、必要に応じて取る」という社会を作る。その前の段階で、「能力に応じて働いて、労働に応じて取る」という、狭い意味での社会主義を考えて、それを実現する。

大学に入るまでは僕、あまり社会に目を向けていなかった。だから、そこでやはり深刻に悩んでしまった。結局、階級を廃絶することによって彼ら（＝労働者）と一緒に社会的に上昇する必要があると考えたんだろうね。

そこでじゃあ自分はどうするんだ、と考えた時、最初は弁護士にでもなって、社会党辺りから国会に出て、社会を変えよう、なんて思ってたんだよね。でもそんなことして本当に世の中は変えられるのかなあ、と。それは無理だろう、という話で。

学生運動の高まり

——東大では、医学部インターン問題をめぐる学生への不当処分を発端として、大学当局に対する抗議活動が高まり、山本義隆を議長として東大全共闘が結成されました。最初の医学部の闘争から、もう運動にはコミットしていたのですか？

最初は医学部の内側だけの闘争だったから。それが全学的な運動になるときに、安田講堂に突っ込むとか、卒業式粉碎や入学式粉碎なんて叫んでね。卒業式がなくなったり入学式がなくなったりして。

——革命への意識で繋がっていたという感じですか、全共闘というのは？

いやもともと革命運動組織ではないから、全共闘は。あくまで大衆運動であってね。単純に大学に不満を持っている人間もいるわけだし。その中でやっぱりはっきりとした目的意識を持っているのが、まあ党派の人間なんだよね。だから主導権を取っていくわけだけれども。ある意味で社会の矛盾がいろんなところに現れてくる、と。それに対してははっきりとした分析をして、答えを与えることによって革命運動を組織していく、社会に対して影響力を行使していく、という。だからいろんなことに首を突っ込むわけだよ。大学のことも、ベトナムのことも、労働運動にも首を突っ込む。だから当時は、スパッと全部、マルクス主義で社会の問題は分析できて、割り切れて、解決策を出し得た、つもりでいたわけ。みんなね。なかなか本当はそうはいかないわけだけれども。そこでやっぱり労働者を説得できなかったから、組織できなかったわけ。するとやっぱり日本の高度経済成長によって労働者たちも失うものを持ってしまった、という。

——「怒りを歌え」という当時の映像記録を見たのですが、やはり人数の規模が違うな、と感じます。多くの学生が一体となってひとつのことをしている。1968年10月21日の新宿騒乱のときの映像などを見ると、ここが本当に新宿かという感覚すら覚えました。

新宿騒乱の時は、まさかあんな展開になるとは思っていなかったね。あの時はまだML派のヘルメットが一番多かったような気がするんだけど。なんでML派がこんなにいるんだ、どっから湧いてきたんだ、と思っちゃったよ。

——あの時に騒乱罪が適用されたんですよね？

そう、初めて。

あの時も捕まったよ。三鷹寮の若い一年生，43 入寮の連中とね，行って。おい，なんか破防法適用されたいぞ，じゃあ帰ろう，とか言ってね。タクシー拾って帰ったわけ。そしたら途中で警備線が張られていてね，そのままタクシーごとね，警察署入っていったわけ。だけど，どこの警察か分からないんだよね。それでみんな並んでね，すると僕以外みんなはじめて捕まった人間なわけだよ。すると僕が机叩いて「黙秘します！」というと，みんな合わせて「黙秘します！」なんて言ってね。最後はみんな，名前ぐらい言って，二泊三日で帰ったんだと思うんだけど。僕はあの時，何日ぐらい拘留されてたのかな。結局警察署出るまでずっと黙秘します，と言っていたから，どこの警察署に拘留されているのかすらわかんなかった。

——教えてもらえず？

そう（笑）。なんのことはない，武蔵野警察だったんだけど。

逮捕，全共闘の終息

——ところで，干場さんの，「革治」というお名前は，やはりご両親が革命なんかを意識して……

親父は戦後の混乱した世の中を見ていたから，「革命を治める」という思いを込めたんだだろうね。僕のほうは「革命して治める」と勝手に読み替えていたけど。

——当時の親の世代との，意識のギャップというのはやはり大きかったのですか？

やっぱりほら，僕らの親は戦争行ってるでしょ。満州というか，中国の東北のほう行ってるわけだね。それでやっぱり，チャンコロだとか，ロスケだといって，軽蔑してるわけだね。差別的な発言をして。そして戦争責任をちっとも反省しない。そう意味ではやはり意識の違いを肌で感じていた。

——最後の逮捕のきっかけというのは？

69 年の 11 月に，佐藤栄作総理が 70 年安保の改定でアメリカに行くと。それを物理的に阻止しようと。それでみんなで羽田に押しかけたわけ。69 年の 11・15，16 の時にね。それで羽田行こうと思って京浜急行の品川駅にいたんだけど，みんな京浜急行になだれ込んで，電車が止まっちゃったんだもん。しょうがないから国道一号線を走ったのかな。それで蒲田警察署の周りに阻止線が引かれてて，もうあの頃は火炎瓶も持ってなかったはずなんだけど，後ろから火炎瓶が飛んできて，燃えたりして。それでも一応機動隊の警戒線を突破したんだよ。阻止線も突破して，逃げるお巡りさんを追いかけて，パトカーの上に僕一人乗っかっちゃってさ。そしたら，気がついたら誰もついてきてなくてね。パトカーの中に引っ張り込まれて。そのまま蒲田警察署に連行されて。

——全共闘体験を持つある人が，68 年の 9 月ごろまでは大部分の学生が主体的に，自主的に運動に参加していたように思えたのが，12 月くらいになり卒業が間近になると，卒業したい人間は抜けちゃうし，運動自体が下り調子になってきた様に思えた，と語っていたのですが，干場さんはそういった印象は受けましたか？

駒場がストライキに入ったのが 68 年の夏休み前なんだよね。はじめはとりあえず一週間ぐらい。夏休みが終わってから確か，無期限のストライキに入っていくんだよね。結

局、全共闘が三分の一で、民青が三分の一で、残りがノンポリなわけだよ。そうするとこの三分の一の層をどっちが獲得するか、というね。だから最初は全共闘がストライキをやらなくちゃいけないんだ、ということを主張して、この三分の一を獲得して、多数派を形成していくわけだよ。だけどだんだん卒業が近づいてくると、え、なんだ、このまま行くと留年じゃないかとか、卒業できないんじゃないかとか、という風になって、もうストライキはやめようと。共産党のほうにこの三分の一が流れていくわけだよ。すると二対一が、一对二になるわけだよ。舛添だとか、町村だとか、ああいう連中も今度はなんかクラス連合、クラ連だとか作って、共産党と一緒にあって全学スト反対を主張するわけだよ。

——そういう状況の中でも現実と理想に揺れるというか、そういう感覚はなかったんですか？

それはやっぱりあったよ。それで学内だけではもう片がつかないと。もっとこれを全国化して、社会化していかなくちゃならない。だから全部の大学みんなオルグに行くわけ。九州行ってアジったり、ね。それとあと、労働者を巻き込まなくちゃいけない、と。まあ社会化ってことだよ。全国化、社会化。それで革命運動につなげていくんだ、ってわけ。

学生だけじゃ出来ないから、それを社会化していかなくちゃならない。やっぱり労働者を組織しなくちゃならない。それで労働者の中に、組合の中に入っていく人間も出てくるわけだよ。

じゃあどうやって組織していくんだ、と。そこでまた大きく分かれていくんだよね。現実的に今ある暴力を、機動隊の暴力を破るために、とりあえずは火炎瓶を用意した。それが爆弾まで行くわけだよ。じゃあ、そこから先、どうするんだと。どういった意味の暴力で突っ走っていくのか。大衆運動を盛り上げていく中で、あくまで大衆の力として組織していくのか、それとも先鋭的に、少数の人間が組織した暴力で突っ込んでいくのか。それで赤軍派なんていうのが生まれてくるわけだよ。

——干場さんが運動を続けていく中で、このままじゃあ革命は出来ないな、と明確に意識した瞬間というのは？

ええとね、東大闘争の時かなあ。図書館の前でね、全国全共闘の結成大会があったの。あの時僕ね、何回目かな、捕まっていた、全くその時、スポッと僕の体験の中からぬけちゃっているわけ。そのへんかな、最後まで僕、体感できなかった。

帰ってきたらみんな重っ苦しい雰囲気にいるわけ。革命家になるかならないか、ということで大衆運動に参加している人間に突きつけちゃっているようなところがあったんじゃないかな、と思うんだよね。

そうすると逆に、そこでついていけない人間がボロボロと脱落していく。やっている連中はどんどん過激になっていく、そして逆にこぼれていくやつを、批判する、みたいなね。まあ極端な形が連合赤軍の自己批判させて殺してしまう、リンチしちゃう、という。

——それでは連合赤軍に繋がる何かを感じ取ったというか？

うん、なにか、理解できないな、ついていけないな、という感覚があ那时的にはあったね。

あの運動はなんだったのか

——あの運動が大きな高まりを見せてから40年という時間が過ぎました。学生運動を振り返って、何が得られたとお感じになりますか。

何というかね、革命というものは遥か遠くにぼやけてしまったんだけど、まあ生きている間に起きそうもないしね。そうなるともた違う関係の仕方というのものもあるんじゃないかと考えるようになった。中国へ木を植えにいったりとかさ。

——それじゃあ今の仕事をされている、っていうのはまた違った形の社会貢献ができるんじゃないか、という意識からなのですか？

いやいやこれは生業で、ついつい顔が広がったもんだから。

——当時の体験が今の仕事をやる上で目に見えて役に立つ、ということは？

生業とはあんまり関係ないよね。

——でもやっぱり自分の中の支えと言うか？

ただやっぱり何というかね、人間はどういう存在なのか、やっぱり社会的な存在なんだ。人とつながりの中でしか生きていけない。人を助けて、自分も助けられて。それでどうやって人のために役に立つのか、っていうね。昔はただ革命、っていう形で世の中を全部ひっくり返そう、そうする事で世の中の役に立とうとした。けどもう自分一人のできるわけじゃない、そういう時代でもないから。じゃあ、というね。そういう意味で人の役に立つ、類的存在としての人間を考えるんだ。

全共闘の言葉で、「一人は万人のために、万人は一人のために」というような言葉があったね。そんなことばかり立て看やなんかにかきまわったわけだよ。やっぱりそういうのは生きてるよね。やっぱり他人の痛みを自分の痛みとする。それはずっと、脈々と流れている。自分の人格として形成されてきている。

今の社会、今の学生

——当時と比べて、今の学生が持つ意識というのは根本的に変わっていると思いますか？

いやどうなんだろうね。最近問題になっているワーキング・プアの、組織してやっている人間いるじゃないですか。あの、法学部出てね。多分彼らなんかは僕らの時代に生きていればやはり学生運動の先頭に立ってただろうな、という感じだよね。そういう意味では変わらない部分っていうのはあるんだな、と。それが世の中をどういう風に見るか、という事な訳だけれども。確かにこう、僕らの時みたいに、貧しい人が多数で、豊かな人が少数だ、っていう時と違うからね。今はまあみんな食べられて、その辺の問題だろうとは思っただけだね。それでも、小数であっても組織していく人間というのがいるわけでしょ。女の子でも仕事よこせ、とかいってね。やっぱり君たちよりもちょっと上の、30歳ぐらいの人間たちがやったりしているわけじゃないか。

——そういう熱さみたいなものは変わってないかもしれないですね。でもそういうものも、歴史的にみて…？

だいぶ薄くなっているよね。

——やっぱり全共闘世代の方々の活動というのをみていくと、それが正しい行動かどうかは別にして、とりあえず集まって、何かに立ち向かっている気がするんです。今は社会全体、あるいは学生全体が一体感を持って何かに取り組むというより、個別の問題に小規模で集まって、ちょこっとやっている程度の気がしてしまうのですが。

ただそういうのが幾つも集まっていくと、つながってくると言うよ。環境をどうする

か、労働問題をどうするか、といったようにね。

——現代では携帯電話やインターネットといった手段を介して、今までにはなかった人間同士のコミュニケーションが可能になっているわけですが、そういったものを介して、当時の学生が抱えていたような「熱さ」が繋がりあうこともひょっとしたらありえるかもしれませんね。

それはあり得るかもしれないよね。やっぱり技術が発達してくるとそういう問題も変わってくるからね。僕らの時代にはそれが非常にアナログな形であっただけであってね。

だけど、ビラなんかも…いつも同じようなステロタイプのものを書いてたな。毎日出すんだから、いつも違ったものなんて書けないもん。三鷹寮でオルグして、夜中にビラ書いて、朝方までかかって三鷹寮のタテ看書いて。それで寮バスに乗って。一限の前に駒場の駅前でビラ撒きして。

全共闘運動が社会を変えたか、と聞かれたら、それは分からない。でも社会や大学に対する異議申し立てとか、「自己批判」とか、割と風通しはよくなったんじゃないかな、とは思うね。ただ、運動がなかったらそうならなかったかという、それは本当に分からない。しかし自由な社会になったというようには感じる。風俗、文化なども含めてね。着るものや、音楽なんかもすごく変わったでしょ。

——ありがとうございました。

5月31日、渋谷にて

取材者：関翔平、近藤伸郎、山本遼

4.3 若松孝二氏

(映画監督)

反権力・エロスをテーマに 60 年代頃から人気映画を撮り続け、今回『実録・連合赤軍』を発表した若松孝二監督に「ご自身の体験や考え」「運動と映画について」「暴力ということ」「全共闘」についてインタビューをさせていただいた。若松監督の、一貫した姿勢・哲学を様々な角度からうかがうことが出来た。

映画と運動

——70 年安保闘争に向けた学生運動は、1968 年、69 年にひとつの大きな頂点を迎えました。そのころ若松監督は、運動に対してどのような立場をとっていたのですか。

もちろん当時も映画を撮っていたよ。別に僕は椅子を持って投げたわけじゃないし、ゲバ棒持って機動隊に突っ込んだわけじゃないからね。とにかく、自分の好きな映画を撮っていたというだけだよ。

——それでは、映画制作をする上での題材として、学生運動があったのでしょうか。

題材というよりも、僕の作った映画をそういう活動をやっている人たちが見て、やっぱり若松孝二の映画は面白い、と感じたんだろうね。だから必ずしも運動を見て映画を作っていたのではなくて、僕の作ったものに、彼ら自身が自分達を上手く重ね合わせたというかさ。例えば、権力に向かっていく映画、そして学生。その両者が上手く重ね合わさったのかもしれない。

——それでは、運動を支持するという形で映画を撮られたわけではないのですね。

僕は運動を支持するために映画を作ったことはなかったし、自分の作りたい映画しか作らなかった。その頃僕が作っていた映画が、学生たちのやっている事と上手いこと重なった。僕は、「権力」というものに腹が立つ。だから、「権力」をやっつける映画とか、お巡りを殺す映画とか、そういう映画をいっぱいやった。映画の上で色んなことをやる分には罪がないからね。本でもなんでも、それを書いて犯罪にはならない。人間の想像を法律で取り締まるというわけにはいかないじゃない。「権力」を殺したいと思ったら殺すような映画を撮ればいいし、抵抗したいと思えば抵抗するような映画を撮ればいい。僕自身がそう思って、そうした意識が、当時の若者達の意識と重なり合ったのじゃないかな。

——映画という手段を通して「権力」への抵抗を表現された、ということですね。

僕は若い頃、本当に逮捕されて拘置所に入ったことあるからね。牢屋に入るのがね、ものすごく嫌なんだよ。まあ、そういう経験があるから、映画を撮ろうと思ったわけ。

——しかし監督が意識なさなかったにしても、現実的には当時の若者をはじめ多くの人たちに影響を与えているわけですが、そのことについてはどうお考えですか。

それはよく分からないけど、僕自身が面白いと思うから撮る。でも皆が映画を見てくれないとメシが食えないからね。でもまあ映画を見てくれるってことが、影響を与えているといえるのかもしれないけれどね。

——当時の現実社会に影響を与えるということを、特には意識していなかったのですか。

僕は全然考えたことがない。自分がこういうものを作れば、みんなが喜んでくれるんだらうなって自分が思うから作るのであって、学生が喜ぶから作るんじゃないんだよ。

今の若者に向けて

——「腹が立つ」という感覚は、人のある行動に突き動かす一種の「熱さ」、「原動力」だと思うのですが、監督の場合その感覚はどこからきているのですか。

どこから来るというよりも、「権力」側が、「社会」がそうなってくると腹が立つじゃない、自分自身がね。「腹の立った」事をテーマにして映画を撮っちゃうとか、あるいはそれをドラマの裏側に上手く混ぜ込んで撮っちゃうとか。それをどうするかは、テクニックとして考えるだけだよ。だから、ものすごく分かりやすいいえば、今税金が高いと思ったら、なんでこんな税金が高いのか、官僚が悪いのか、誰が悪いのかってことをテーマにする。それは腹が立つからやるのであって、例えば総理が悪いと思えば、その役に「佐藤 浩作」なんて名前を付けたりさ（笑）。自分で自分を楽しんでいるっていうか、そういう部分がある。僕が面白くなかったら、人を見て面白くないと思うからね。

——それでは、今の世代の若者も「腹が立って」いる、あるいはある種の原動力を抱えて生きているとお感じになりますか。また、若い世代に向けてメッセージを下さい。

「勇気」を持ちなさいっていうことだね。『実録・連合赤軍あさま山荘への道程』の中で、あるキャラクターに「俺たちは勇気がなかった」と言わせたのは、半分は見ているお客さんに「勇気を持ちなさい」って言っているつもりなんだよ。だから、あの台詞がグサッとくるっていうのは何回か聞いたことがあるけど、要するに今の若い人はもうちょっと勇気を持って、嫌なものを嫌だと言える勇気を持ちなさい、と。だってみんな、なにも言わないだろ。かつての彼ら、かつての学生達はさ、みんな頭もいいし、ちゃんと卒業すれば就職も決まったわけじゃないか。だけれど私利私欲じゃなくて、世の中を、世界を、今の日本を少しでもいい方に変えようとしたからなんだよ。それがちょっと間違った方向にいつて、ああいう風になっちゃったけど。最初から人殺しとかそういうことやるつもりでやったわけじゃなくて、少しは変えよう、自分たちで少しでも改革しよう、人間らしく生きていこうと思っていたら、どうしてもああいう方向に行っちゃった。もちろん、人殺すのはいけないよ。いけないけれども。

——警察側からの視点であさま山荘事件を描いた『突入せよ！ あさま山荘事件』（注：原作：佐々淳行『連合赤軍「あさま山荘」事件』、監督：原田真人、2002年5月11日公開）という作品がありますが、この作品が製作の動機に影響しているのでしょうか。

僕が『実録・連合赤軍』という映画を作ろうと思ったのは、『突入せよ！』を見たからってことだけでなく、でもあの作品を見たから「これではいけない」と思って、僕を立ち上がらせた。僕はどちらかと言えば、半分感謝しているんだよ。あれを作ってくれたことによって、「そうじゃないんだろ」っていうための作品を作る勇気を僕に与えてくれたんだな。そうじゃないと、自分の別荘ぶちこわすなんて馬鹿なことやってまで、僕は映画作らないよ。

——当時の学生が「人間らしさ」というものを考えていたのなら、その点は今の学生との意識の違いがあるようにも感じます。そしてなぜ、若松監督は今の学生に「勇気」がないとお感じになるのですか。

それはもちろん、連合赤軍という事件で学生運動というものが完全に失速したわな。そうすると、社会に反対すること自体が全てダメなんだってことを、一般の人たちがみんな思ったんだよ。彼らは、自分の子供達——つまり君たちのような今の若者だよな——に、そんなことやっちゃいけないと言うようになる。ようするに、社会に反対するとか、学生運動をするだとか、そういったものの考え方や思考を全部大人が取り上げているんだよ。要するに、ゲームの社会の中で遊んでいなさいと。それで、秋葉原の事件（2008年6月8日に秋葉原で発生した、トラックとナイフによる連続無差別殺傷事件）が起こってくる。そういった事件がこれからもどんどん起き続けるって、俺はあれ以来ずっと言い続けているんだけど、もっともっと起きますよ。なぜかといえば、本当に自由に生きるってことがみんなできない。格差社会がこうやって深刻化してきたし。人材派遣からさ、明日クビになるかも分からない。もう来なくていいって言われる。よく俺に言うやつがいるんだよ、なんで大学も出ていない、農業高校しか出ていない若松が、映画を撮れるんだよって。それと同じようにさ、自分は頭がいいのに、なんでこれだけなんだってイライラする。人間にはスイッチがあると思うんだよ。そのスイッチがポンと入ったら、自分がどうしてそんなことやったか、分からなくなるんだよ。だからストレスをためちゃいけないって思うんだけどな。今の若者は皆ストレス持っているんじゃないかな。ようするに、周りはホリエモンみたいに一円でも稼げ、親はいい就職をしなさいって、そればかりだから。そうすると、やっぱり自由に人間らしく生きられないよな。人間らしく生きるってことは、小学校時代から勉強勉強ってやるもんじゃないだろ。ガキの頃は泥んこだらけになったり、虫追いかけたりさ、それが子供じゃん。それを小さい頃からみんな今みたいにやらされてくると、おかしくなるよ。何かすることができなくなる。そうすると、引きこもってさ、ゲームばかりやったらいいってなる。

——1960年代と同じような「熱さ」が、今の社会で復活し得るとお考えですか。

そりゃ、日本や世界がものすごく変な状況になって、自分自身にものすごい危険を感じたら起こるかもしれないけどさ。隣の国の韓国を見てみたらいい。李承晩の軍事政権を倒したの高校生だよ。この間の、牛肉の輸入問題なんかだって、まず学生から騒ぐんだよ。大人になるとさ、まず明日のメシのことを考え、女房子供のことを考えるんだよ。そうすると何にもできない。自分の思うように生きれば、あとはしょうがないんだよ。

——そういう部分を、日本の学生達に持ってほしいと。

君たちよりももっと小さい、中学生や高校生にもそう思ってほしいね。今度BS放送でやる25分ものの作品の原稿を、16歳の少女に書かせてみたんだよ。すると、素直に書くわけだよ。周りのプロデューサーは反対したけど、「自分の思うように書きなさい」って言ったら、なかなか面白いものを書いてきたよね。

——きっと「自分の感覚」に従ったのでしょうね。

勉強しろ、塾に行け行けって周りから言われている少女のね、もっともらしいこと言ってるように見せかけてる大人達に対する感覚だよな。

その彼女が書いた作品というのが、路線バスの運転手が、自分の走行経路を無視して、「黙ってろ」って言って、高速道路に乗って走って、東京まで少女を送ってくれるというあり得ないストーリー。好きなように書かせる。これが面白い。

それとおんなじ。もっと好きなようにね、若い人は自分の思うようにやればいいのと思う。変に社会が横から口を出すというのかな。これが一番ダメにする。

映画は人を考えさせる

——映画という手段はなんらかの「答え」を見つける糸口になる、とお思いになりますか。

答えというか、僕自身はね、映画はやっぱり人を考えさせるものだと思う。もう一度、自分達の今までの生き方、例えば連合赤軍だけど、それをね、もう一度振り返ることができる。若い人たちなら若い人で、そういう時代にそういうことがあったんだって、自分たちを考えさせるものがいっぱいある。やっぱりそう思わせることができるってことは、一つの手段として、影響があるんじゃないかな。

——運動を体験していない僕らのような世代が、映画を見ることでその時代の「空気」を感じることができる。

僕だって運動なんかやったことがないよ。ずっと、今日のおにぎり一個食うのが精一杯の人生だからね。今日食べるのがやっとというような状態で、そんな世間に反対する、しないなんて言っている騒ぎじゃない。だけど、どこか志だけは「これはひどいな」ということを感じる。僕の友達が昔、かりんとうを作る釜の中に落っこちて、やけどで死んじゃった。工場に住み込みで働いていた子だけれど。今だったら賠償金問題になるけど、当時はなかったからね。親が黙って引き取りにきて。そんなのを見ていて、もうこんな社会だったら太く短く生きよう、ヤクザにでもなって好きなように生きてやろうってさ。ぱっと咲いて散る八重桜、というわけではないけどもさ。

——生活の苦勞、底辺での生を感じた体験というのは大きいわけなんですね。

暴力について

——では次に映画の内容に話を戻して、「熱さ」や「目的」があった上で、手段の問題として「良い暴力」と「悪い暴力」があると考えてよいのでしょうか。

テロリズムと同じ問題だよな。侵略のためのテロっていうのがあるよな。アメリカはそうだよな。自分の国を守るため、抵抗するためのテロっていうのもあるよな。それも暴力だよな。信頼する人を殺すっていう、それも暴力だよな。僕は、暴力には良いも悪いもないって本当は思っているんだよ。それは戦争に良いも悪いもないというのと同じ。人間が殺しもするし、自分が死にもする。それが戦争だから。テロもそう。一概にテロが悪いってのもどうかとは思う。例えば、パレスチナが自爆テロでイスラエルをやってやろうというの、自分の国を取り戻すためにやろうとしている。そういったものもあれば、アメリカみたいに勝手に石油を使うために、自分の国じゃなくてよその国でポンポン戦争やるっていうものもある。日本はそれを間接的に助けてるわけじゃない。油とかを売って経済的に豊かになって、それが果たしていいのか。やっぱりそれは、誰が考えても良くないことであって。なぜなら、その前に体験があるわけだから。ベトナム戦争という。日本からどんどん武器弾薬を運んでさ、ベトナム人民を殺して。それを阻止しようって、列車を止めようとした、それで新宿騒乱（注：国際反戦デーにあたる1968年10月21日に、東京都新宿区で起きた新左翼を中心とした大規模な暴動事件。騒擾罪が適用された）があるわけだからね。あれは横須賀を通過して、弾薬がどんどんベトナムに行ったから、それを止め

るって起こった。それが新宿騒乱。もしかしたら、あれだって暴力。暴力によって汽車を止める。人を殴るだけが暴力じゃないから。

——監督は映画を通して暴力を表現することで、何を狙っているのでしょうか。

狙っているとか、何のためかとかじゃなくて、ドラマに必要なものとして使う。やたらめったりさ、ピストルバンバン打つのがかっこいいとか、香港映画真似するのがかっこいいとかさ、それは何にも考えてない馬鹿者のやること。俺はそう思うよ。やっぱり、必要だからこそ暴力を映すのであって、ただ単にやってるんじゃないよな。

——60年代もやはり「暴力」の時代だと……。

それはね、話し合いでできれば一番いいことだって。例えば60年代安保っていうのは、日本が戦争犯罪者が総理大臣になる国だったじゃない。今はその孫が総理大臣になったけどさ。そういう国だよな。そういうことを大衆は、本当は絶対に許しちゃいけないのにさ、ああやって許してしまったから、結局一つ国会を囲んでやる、ということが起こった。それから日本がアメリカと組んで軍事同盟結ぼうとしたわけじゃないか。それへの反対が60年安保。反対がはじまった。それで10万の人間がきた。もしあそこで、憲法改正の方針が変えられていなかったとしたら、ちょうど今頃君たちは徴兵制度にひっかかって軍事訓練させられているよ。そう思えば、60年安保闘争は良かった。自分のものとしてとらえ直して考えれば、いいほうに解釈した方がしっくりくる。そう思うような気がして仕方がないけどな。自分だったらどうなったか。自分が、連合赤軍のあの中にいたらどうなっていたか。おそらく一晩眠れなかった人ってのは結構いたと思うよ。特に女性なんかは。

——だけれどしかし、映画は、現実の代わりにはなれないと思うのですが。

別に現実でやろうということではなくて、映画を、この作品を見たらね、僕は石を投げろとか組織を作れとかそういうことを言っているのではなくて、個的な戦いなんだ。僕は皆と組んだりするのは嫌なんだよ。全部一人でやっているからね。一人一人がね、嫌なものを嫌だと言えるようにさ。だけど実際にはみんな、君が嫌なら僕もいやだって感じで、すぐ誰かをバッシングするじゃない。そうじゃなくて、ちょっと待てよ、という感覚を持ってくれるといいな、と思ってるわけだ。イジメも同じ問題だからね。イジメの問題があったときに、ちょっと待てよって、あの人をいじめてどうするんだ、ちょっと待てよ、ということを考えればさ、いじめなくてすむようになる。誰か一人がいじめようって言い始めて、リーダーシップをとりたがる。それで周りがくっついて、いじめようとする。その時に、自分一人一人が考えようという、そういう社会になればいいんじゃないかと思う。

——だから映画が現実の代わりになる必要は……

なんにもないんだよ。

全共闘に関して

——全共闘運動が後世に残したものは何かあるのでしょうか。

残した、ということじゃなくて、あの時の国家が、権力側がいいシナリオ書いたんじゃないのかな。

——総括に成功したのは「権力」、ということですか。

あれによって、運動を失速させた。あれによって、皆学校に戻ってしっかり勉強して、バブルというものを作っていった。日本はバブルで経済的に上昇していった、またそれを

潰したのも団塊の世代、全共闘世代だと言われるわけじゃん。それで、自分たちだけ年金をもらえる制度をある程度作って、俺たち死んだあとは関係ねえや、みたいなね。だから壊し屋っていう人もいるんだよな。そういう意味ではそれに気がつけばいいんだけども、結局そういう具合にして権力側に全部壊されたという感じがあるよな。

——運動期のある特定の時期、空間においてではあるかもしれませんが、一人一人が平等であった、という全共闘の原理はどうでしょうか。そういった点で全共闘の遺産はあるのでしょうか。

ほとんどの人は、浅間山荘事件を一人一人が総括しなかったということが間違いだったのではないかと。それをもう一度見直そうと。見直すという流れになったということは、良かったんじゃないかと思っているけどね。ようするに、これ以上変なことをしたら世の中騒ぐんじゃないかって。結局、運動全体が抑えられたばっかりにさ、官僚になった奴らが平気で悪いことするようになったちゃったわけだろう。今は参議院政権が変わっただけだけど、これだけボロボロと色んなことが出てくるわけじゃない。大衆が分からないことをやっている連中ってのが、全部団塊の連中だよ。要するに、悪いこともいっぱい覚えているよな。それはな、そういう意味では、権力側の間違いもあるかもしれない。運動なら運動でやらしておけばいいのに、全部ぶっ潰すっていうことをやっちゃったからな。爆弾も爆発力がすごいわけだろ。やっぱり少し余裕を与えないと。ある程度人間を自由にやらしておけば、政治ってのはいいんだけど、抑えれば抑えるほどおかしくなっていく。あんまりに抑え過ぎちゃって、親も世間もみんな、運動ってのは悪いことだって言って、それ以降は反対運動は一個も起きなくなっちゃった。本当言うと、大学だってどこだって、コストがはねあがってるわけじゃん。ガラス張りにして、あそこだけ上手くしてる。だから、今でも京都大学行って西部講堂があればホッとするもの。あの場所にはまだあるものな、ビラとか何とかがさ。今、君たち東大か。東大にはあんまり行ったことないけどさ。

——それでは、全共闘世代が残した課題というのは。

課題っていうのはホントにね、権力側の思うつぼになったんじゃないかっていうことだよ。そういった意味で逆宣伝が多かったんじゃないか。あれで良くなったって言う人はいないからね。反対に、運動とか社会が何か変わったかっていうと、何も変わっていないんだよ。それで、その頃の人たちはそんなことを言って、インテリぶって、何にもやらないくせに理屈だけ言ってさ。例えば、イラク反対って言ったらね、次の日コメンテーターになれないからね。けど、皆コメンテーターが言ってること正しいと思っているからね。

——『実録・連合赤軍』の中で、音楽にはロックが使われていますね。学生運動はロックですか。

（『連合赤軍』に関して）前半はロックで行こう、と。60年代はロックでイケイケだと。それからだんだん連合赤軍で来た時から、内部的な音楽でいこうかって。学生たちが組織が出てくる時は、ロックで行こうと。

——運動に参加した人の心情は、人によって全然違ってくるのでしょうか。

まあ、あの頃本気でやっていたという人はどれくらいいたのかっていうね。飲み屋で、俺はあの頃運動やっていたなんて大声で言ってるやつは、本当はやってないんだな。本当にやったやつはな、やっぱり黙ってるよ。そっと生きているか、負けたことが恥だと思ってやっていたという事を言わない。俺だって新宿騒乱の時は野次馬だったからね、後ろから石投げてやっていた。帰って飲み屋で酒飲んで、やっているってことはあるけど、そんなもんだよ。

——なぜ、本当に運動をやった人達は黙るのでしょうか。

そっと今でも何か機関誌を出したりはしているけども、正面向かって俺はやったなんて言っていないよな。自分たちが負けたという事と、それはやっぱり、どこか後ろめたさがあるんじゃないの。

——それを語っていくことが勇気なのではないでしょうか。

ああ、だから、あいつら勇気なかったんだよ。本当に良く分かるのが、この映画を撮るために前売り券制度をやった時だよ。やっぱり、運動をしていた連中を買ってくれって言ったんだけど、誰一人買うやつはいないよ。口だけだよ。口でワァワァいってるとき、いざお金となると、例えば、一口 15000 円、二口 30000 円で、カンパとしてじゃなくて、先に前売り券を買ってくれって言った。誰もいない。映画作るやつと、俺は映画監督やっとならわっていうやつと、俺は運動家だっていうやつと。皆無って言うくらいだ。本当に買ってくれた人は、何にも言わずに今はコツコツちゃんと仕事して、陰で色々な人達を支援したりしている人だよ。陰から今刑務所に入っている人間や、捕まった人間の弁護士を出したりなんかして、コツコツやっているよ。一切自分のことはやらない。デモとかそういうのにも行かないよ、そういう人は。

——60 年代という時代は、壇の上と下がひっくり返るような独特な空気がありますよね。

やっぱ学生がギャーギャー言ってる時、じゃあお前、壇の上に上がってこいって言うとか上がってくるやつがいたけどさ、今はまあ上がってくるやついないだろ。それと、僕は 60 年代っていうのは一番自由な時だったんじゃないかって思うんだよね。あれだけ、労働者も学生も嫌なものは嫌だって言えるという事が一番重要な、社会だったのじゃなかったかな。でもそれがあんまりになってきたというんで、カミソリ後藤田ってやつが上手くシナリオ書いてさ、どんどん一人一人潰していった。あれ、テレビは全局で放映させたんだから。最高視聴率が 98.7/

愛国心について

——ところで、愛国心という心情についてはどうお考えですか。また監督に、そういったものはありますか。

僕はね、自分を日本に住んでいる日本人、在日日本人だっていう言い方をしてる。愛国心はないよね。ただ、愛国であろうが何であろうが、国を想って死んで行った人間に対してはものすごい興味があるし、そういう映画を残して行きたいと思っている。浅沼稲次郎を刺して殺して行った山口二矢をどうしても撮りたいなって思った。17 歳でこの世を去って行って。良い悪いはまた別問題。俺は 72 歳で生きてる。17 歳で世のことを思い、自分がいいと思ったことをやった人間がいた。もちろん、そりゃ、悪いことだよ。けれども、命をかけてそこまでやった人間を歴史の中から消したくないんだよな。連合赤軍もそうなんだよ。歴史の中から、戦争と連合赤軍ほどすごいものはないと思う。やっぱり連合赤軍を描こうと思えば、東大闘争もあるしさ。学生運動の、過激な学生が生まれてきたのはあれが最初だからね。あそこから分裂が始まるわけだから。

——学生の立ち上がるエネルギーを歴史として伝えてゆきたい、ということですね。

歴史として、やっぱり正しく伝えていきたい。連合赤軍も『突入せよ！』みたいに警察

の側から見たあれだけを連合赤軍だと思ってさ、一般の人は「連合赤軍」っていうと鉄球が当たるやつ、警官があれだけ集まったやつ、ってさ。なんでそうなったかって事を描いたものはないわけ。だから、どうしても撮っておきたかった。例えば、山口二矢はテロをやった。彼の生き様とかさ、なんでテロをやったということは描かれてない。17歳だよ、一番遊びたい時だよ。でも昔、明治維新だったらね、17歳だったらね、運動に走って行った人もいっぱいいただろう。だから、できるんだよ。そして若いうちじゃないと絶対できないと思う。就職したらさ、上に絶対誰かいるしさ、首になっちゃうと困ると思うし、普通の社会だって同じなんだよ。

映画論

——『実録・連合赤軍』の冒頭には昔の映像が使われていて、その映像は白黒ですよ。カラーが一部だけというのはなぜでしょう。

カラーはなかった。ものすごいカラーはフィルムが高かったんだよ。だから、どの国に行ってもよく聞かれるんだよ。なんでカラーじゃないのかって。白黒にしてあるのは何か意味があるのか、って。違うんだよ。あれはカラーを少し入れてくれっていう配給会社のためにであってさ。でもそこで、どこにカラーを入れたらいいかっていう話。だから、ほとんどの作品にカラーは、ちょこっとは入っているんだよ。入れ方は、その監督の才能だよな。表現だよな。うまくカラーを入れることで映画が引き立つと思ったら、そのところにカラーを使ってやる。だから、馬鹿な監督はラブシーンのところにしか入れないのかな（笑）。みんな映画中に寝ていても、そのところだけ目が覚めるとかな。それじゃあ嫌だから、僕はなるべくそういうところじゃないところに使おうという。

——カラーと白黒のことで言えば、1967年の監督の作品・『犯された白衣』でも最後にカラーが出てきますね。

意味はないんだけど、そういうところで有効に使えば、やっぱりカラーは違うね。赤い色がはっきり出るし。例えば、『天使の恍惚』でも富士山だとかさ。富士山っていうものが日本の国家のイメージであって、僕は本当を言うと、その富士山を爆発させるっていう意味であそこでやるはずだったんだ。だけど車がもう一台スローモーションで撮っていて、そのカメラマンの助手が早く回しすぎて、フィルムが切れちゃったんだよ。だからワン・カメラになっちゃっているけど。まあ、予算の問題だね。

——今日は本当にありがとうございました。

6月23日、若松プロダクション事務所にて

取材者：関翔平、近藤伸郎、藤田研二郎

4.4 三浦聡雄氏

(元・東大民主化行動委員会議長)

東大民主化行動委員会議長として、民青（共産党系の青年組織）の側から、東大闘争の過激化に反対した三浦聡雄氏にインタビューをおこなった。代々木系（共産党系）の民青は、反代々木系の新左翼・全共闘と、闘争のあいだ、長きにわたって激しく対立していた。三浦氏は『東大闘争から地域医療へ志の持続を求めて』（三浦聡雄、増子忠道著、勁草書房）の著者であり、東大医学部を卒業後、みさと健和病院の建設など地域医療の発展に尽力してきた。全共闘運動の裏に隠された、「革命運動化への暴力的な転換」について、氏は語る。

エスカレートする暴力

——東大闘争の天王山は、1969年1月18日・19日の安田講堂攻防戦であるというのが一般的な認識だと思うのですが、三浦さんは『東大闘争から地域医療へ』の中で1968年11月12日・14日に大きく局面が変わったと仰っていますね。12日は全共闘の学生たちが本郷の中央図書館を封鎖しようとして民青と衝突、14日には駒場封鎖を巡って、同様の衝突が起きています。

——まずお聞きしたいのは、闘争の中でゲバ棒や鉄パイプが登場し、武装もだんだんと先鋭化していきます。内ゲバでは死者まで出るわけですが、エスカレートする暴力について、三浦さんはどのようにご覧になったのでしょうか。

全共闘の中心になっていた、社学同、中核派、革マル、社青同解放派などの過激派は、誤った「革命理論」にもとづいて、「非和解的実力闘争」、ゲバルトによる暴力的革命運動を進めようとしていた。1970年安保闘争が決戦の時だとあせっていたわけだ。そこに、1968年1月以来の医学部ストライキが起きた。卒後研修の要求や不当処分撤回、医学部のわずかな過激派が時計台を占拠したのに機動隊を導入したことの大学当局の自己批判などを求めて、全学の学生たちがストライキに立ち上がった。こうした、医学生や研修医、東大や全国の学生たちの現状への不満、改革へのエネルギーを、強引に自分たちの暴力革命路線に流し込もうとしていた。

学生たちの激しい怒りや混乱に乗じて一定の支持を得た秋頃になると、全共闘は「東大を破壊せよ。全学バリケード封鎖で解放区を」と、学生の真の要求とは無縁な過激な方針を提起する。こんな方針が学生たちに支持されるわけではない。そこで、本来は権力への抵抗手段のはずだったゲバルトが、彼らに反対する民青や一般学生に向けられるようになる。当時の東大全共闘の機関誌「進撃」は、「バリケードの向こう側に立つ者は敵だ。『敵は殺せ』…これは、権力の論理であり、僕たちの論理でもある」と書いています。自分たちの過激な戦術、「全学バリケード封鎖」に反対する者は、ゲバルトでやっつけろという公然たる宣言だ。自分たちの考えを暴力で押し通そうとした。

この段階で、全共闘が、急速に一般学生の支持を失い孤立していく。当初、全共闘に幻想を抱いて支持した人たちも含めて「クラス連合」、「有志連合」などのノンセクト学生の組織が各学部につくられ、僕たち民主化行動委員会（駒場では、東大闘争勝利全学連行動

委員会)と連帯していく。

こうして、11月12日には、ヘルメット、1メートル位の本や竹の棒など、正当防衛のための最小限の装備で本郷の中央図書館前に座り込んだ僕たちが、長い角材を持って突入してきた全共闘をはね返し、図書館封鎖を阻止することができた。14日には、僕たちと圧倒的な数の一般学生や教官たちが、非武装・ハチマキ姿で、駒場のバリケード封鎖に反対して座り込んだ。全学バリケード封鎖は、学生たちに支持されず、どこの学生大会でも決定されていない。封鎖に反対し、阻止する闘いには大義名分があった。全共闘は、長い角材を林立させて襲撃して来たが、まわりで見ていた学生たちも怒って一斉に取り囲んだ。お互いの身体が密着すると、角材は役に立たないんだ。「多勢に無勢」の全共闘は、ボコボコにされ、角材もヘルメットも取り上げられ、武装解除されて退散した。

それから後は、この民青・ノンセクト連合が東大闘争の主導権を握り、各学部で学生大会を成功させ、七学部代表团(+医学部代表はオブザーバー)をつくって東大当局と1月10日、秩父宮ラグビー場で全学集会(大衆団交)を行い、学生参加・大学民主化を認める歴史的な「十項目確認書」締結へと進んでいく。全共闘は、学生大会粉碎、大衆団交粉碎、「確認書」粉碎といって押しかけてくるが、相対的に少数なのでことごとくはね返されたというのが真実だ。

1月9日には、翌日の全学集会を妨害しようと、僕たちが本拠にしていた教育学部の建物に、全共闘の、それも日大全共闘などが中心で武器をエスカレートした激しい襲撃があり、第二次の機動隊導入があった。

1月18日・19日の安田講堂(時計台)攻防戦は、ほとんどが他大学の過激派によるもので、孤立した一部の東大生と共に、暴力革命の実験・演習を行い、最期の散り花を咲かせようとしたものだ。テレビ映像では安田講堂の正面中心に中核派の旗が目立つが、当時、東大内の過激派は、社学同、革マル、社青同が中心で、中核派はほとんどいなかった。彼らの派手な暴力、耳目衝動戦術にマスコミが乗り、政府権力・機動隊の大学自治へのさらなる介入、入試中止を呼んだ挑発行為で、全東大生の意志とは全く反するものだった。絵になるビデオが何度も報道され、多くの国民が、時計台攻防戦が東大闘争の頂点だと勘違いさせられてしまった。

あの頃、全共闘が派手に暴力的に騒ぐと、マスコミが大々的に取り上げ、政府自民党は「大学は自治能力が無いではないか」といって「大学法」など介入・管理を強めようとするという状況があった。実際、中曽根氏は、「暴力学生があばれると、反射的に、国民の支持が自民党にまわる」と言い、保利茂などの自民党幹部も、日本共産党への対策上、「三派系(過激派)は泳がせておいたほうがいい」などと本音を語っていた。

全共闘諸派は、孤立しても暴力で自分たちの方針を押し通す、運動内部でも、学生相手でも暴力を行使する、そして、やられればやりかえす。そうした考えでゲバルトをやるから、東大闘争の終盤では、武器がエスカレートし始めた。彼らが1月9日教育学部の建物を襲ってきたときには、鉄パイプだとか、建築現場の工具などいろんな危険な物を持ってくるようになった。そんなことをだんだんと進めてやっていくと、東大闘争では鉄砲や殺人まではいかなかったけど、そこまで行き着くこともあり得る。お互いにやりあっていれば、軍拡競争と同じで、武器も戦術もいつの間にかエスカレートしちゃう。

だから、そんな土俵に乗るとまずい…と考えて、僕たちの側は、戦略的な転換をした。そういう局面では武力で対峙するようなことはやらないと。その場は逃げてかまわないから、時間をかけて、とにかく圧倒的な多数の学生で包囲してやっつける。武器や暴力

の先鋭度で戦うんじゃなくて、大衆の支持で、政治的に封じ込める。そうすると、完全に孤立した方は、実際にはなかなか暴力を振るうことができなくなるから。だから、11月14日の駒場での戦い方がそういう方法論だったわけだ。その場でこちら側の頭数が多くても、やばい状態で来たときにはいったん逃げてもかまわないから…と。激しい、エスカレートした武器を持って来られたらやられちゃうっていうような、そういう喧嘩はしない方針に変えたんだ。そしてそれは正しかったと思う。事実、東大闘争以後のいわゆる内ゲバの拡大は、全共闘諸派の内部で行われ、われわれ共産党・民青系は巻き込まれることが無かった。

——その転換は民青側の学生たちが話し合う中で、ということでしょうか？

共産党や先輩活動家の助言も含めて、僕ら民青・ノンセクト連合の学生自身が話し合い、その方がいいっていう判断をしたんだね。暴力を先鋭化して行く路線に巻き込まれれば、そのうち際限のない内ゲバになっていくわけだよ。そんな闘い方だったら、別に人数が少なくても、より強力な武器を持っているほうが勝ってしまうからね。鉄パイプを持っている方がね。

事実、東大闘争の後では、彼ら全共闘系過激派の内部で、各セクト対セクト、また四分五裂するそれぞれのセクトの内部で、ひどい内ゲバが日常化し拡大していった。ヤクザの暴力よりひどい陰惨な殺し合いでたくさんの人が死んだ。ついには、1972年の連合赤軍事件のような凄惨なリンチ殺人・浅間山荘の銃撃戦に至ってしまったのは、周知の事実だ。その後の学生運動が沈滞することにもつながってしまった。全共闘や過激派の幹部、リーダーだった者たちには、重い責任がある。自分たちの運動が内包していた何がこうした事態を招いたのか、自分はその過程にどうかかわり、どう自己批判するのか、一人一人明確にしなければならない。実際は、ほとんどの人が無責任にほおかぶりして、自分に都合のいいことだけを語っている…許されないことだ。

ただ、東大闘争で過激派、全共闘とけんかしていろいろやったけれど、一面、彼らも、今井澄、鎌田実両氏がリーダーになった「諏訪中央病院」や「ゆきぐに大和総合病院」などの地域病院では、私たちと似たようなことをしている。また、かつての全共闘や全共闘シンパで、まじめな問題意識を持っていた人たちのなかには、南北問題のボランティアや格差社会を変える NGO 活動など、面白い生き方をしている人もいる。「諏訪中央病院」の「日本チェルノブイリ連帯基金」の活動なども優れた先進的な取り組みだ。

あの時代の空気と大衆的な高揚の中で、多くの学生が、当面の要求実現だけでなく、個々人の生き方、社会変革の理念や自分のかかわりといったことを、セクトの思惑をこえて、真剣に考えたことは間違いない。これは、民青系の運動でも、全共闘や小田実の「ベ平連」系の運動でも同じだ。全共闘運動は、武装・軍事行動のエスカレート、人間的退廃へとつながる危険な本質を内包していた。それでも、多くのノンセクトラジカルたちが、全共闘の呼びかけに触発され、その流れに加わりながら、視野を広げ誠実に自分の生き方を変えていったことも事実だ。〈かつての敵〉とも、志を持ってまじめに生きている者どうしなら連携協力していけるのではないかと思っている。かつての〈暴力〉についての誠実な総括の要求を譲る気はないけれどね。

——民青の中で、「ある程度は武器を持っても戦うべきだ」といったようなことを主張する人もいたのではないですか？

「武器をもって戦うべきだ」というと、ちょっとニュアンスがちがう。11月12日の図書館封鎖を阻止した時が典型的だ。こちらから先に武装や暴力は行使しない。しかし、相手

が武器を持って襲撃して来るのが明らかなとき、最小限の正当防衛は許されると考えた。ゲバ棒が登場した初めの頃は、こちらは素手の無抵抗で、彼らのゲバ棒でおどされ蹴散らされることが多かったのですね。暴力に屈してはならないと考えたんだ。とにかく、こちら側からは手を出さなくても、むこう側からゲバ棒で突っ込んでくるんだから…ヘルメットをかぶり、一番初めは1mくらいの竹の棒だったけれど、身につけた。それから木の棒、鍬の柄みたいなのですね。大体それくらいが僕たちの限度だったけど。後では、そんな物も使わない方針に転換した。

民青の一部やノンセクト一般学生たちの有志連合には、どんなときでも暴力は一切使っちゃいけないっていう、ガンジー主義者のような人、クリスチャンとか、非暴力・不服従主義者もいて議論した。今から考えると、ガンジー主義などは、運動の人間的な墮落を防ぎ、道徳的な輝きで人々を結集するので、そういう思想はなかなか正しいと思うのだけど。その頃の僕は正当防衛論者だった。とにかく、あの11・14 駒場封鎖阻止・全共闘の武装解除の闘いや、1月9日教育学部周辺での激しい闘いを総括し教訓にして、エスカレートする暴力の土俵に乗らないという正しい決断をした。本当に良かったと思っている。軍拡競争と一緒に、相互の恐怖と怨念をバネにした暴力は際限なくどんどん行ってしまうものだからね。

共産党について

——三浦さんは学生時代、20歳前後に共産党に入党されて、1967年春の「61日間スト」の頃に一度離党されている。それからまた復党され、かなり経ってから離党されている。その心理というか、やはり運動の中で共産党に対して違和感を覚えたのでしょうか？ また、今の世の中における共産党の存在意義についてもお聞かせいただきたいのですが。

当時の社学同や新左翼というのが、民青とは相容れない立場で、駒場では生協の牛乳を盗んで「革命のためには許される」と開き直ったりしていた。信用できないおかしい連中だと思った。しかし、本郷に来てみると、東大医学部の社学同なんかは、広汎な学生・研修医を結集して大衆的な、立派な運動を進めていた。人間的にも結構まともなんじゃないかと感じて、彼らのどこが本当に悪いのかよくわからなくなってきた。それで、1967年、「61日間スト」の頃に離党届けを出した。医学連や青医連の運動、「インターン制度廃止、卒後研修改革要求」のストライキなどを、彼らと一緒に、先頭に立って思い切りやるために共産党から離れたわけ。ただ、このときには、先輩党員が僕の届けを預かったままで待っていてくれたので、正式の離党にはなっていない。

「春の医学部61日間スト」が終わって、鹿児島県人寮の同学舎に引っ込み、寮委員長をやりながら冷静になってよくよく考えたら、やっぱり共産党は大切だと思い直した。しかも、1968年1～3月頃、東大闘争序章の医学部ストで過激派の本質が見えてきた。彼らの落とした内部文書に「非和解的実力闘争」、「70年安保決戦」（後には「武装行動隊の創出」）などといった言葉があっただけ。彼らの隠してきた本音が表れてきたわけだ。それまで迷い考え抜いてきたからピンときた。やっぱり誤った、観念的な革命理論による挑発者集団であると確信した時点で、彼らと闘う決意をして共産党と民青に復帰したわけだ。こうして僕も医学部の民青も、理論的政治的にしっかり団結して東大闘争を戦い勝ち抜くことができた。東大闘争後の医学部自治会の活動は活発で、文字通り広汎な学生が参加し、医学部の根本的改革や反戦・平和・民主主義の課題にも取り組む素晴らしいものだった。

た。全学連の中の拠点校として、大学法の問題などでストライキをやるとういうと、中心になってストライキを打つような強力な自治会になった。僕は、卒業前には、崩壊した医学連の再建に取り組み、一年間全学連の中央執行委員もやった。

卒業後は、相棒の同級生医師増子忠道君と一緒に足立区北千住の民医連の小さな柳原病院に就職して、住民と共に民主的な地域医療づくりを進めてきた。東大闘争でかかげた理想を実現しようと、共に闘った後輩の青年医師たちが次々と合流して、病院は拡大発展していった。そして、1983年に開院するみさと健和病院の建設を医療過疎地域の住民運動として進めた。三郷市80町会の過半数の町会長を含む、保守革新の広汎な層の人々が参加し、住民が多額の出資をする大きな運動になった。こうして「みんなでつくるみんなの病院」が誕生し、発展した。

ここで協力関係のできた自民党反主流派の幹部を市長選の統一候補としてかついだが惜敗した。その次の選挙で、この統一協定がうまくいかず分裂した。その混乱をひきずる中で、1994年7月、最終的に、私も共産党を離党したという経過だ。幕末、薩長連合をつくった坂本龍馬は、脱藩していたから、自由にあんな統一戦線工作ができた。自分も、そんな立場に身を置きたいという感じだったね。いつまでも国際共産主義運動の負の遺産を背負っていきたくはないという考えもあった…南方系の開放的な自由人だから、体質的にも、窮屈な組織は肌に合わないところもあったのに、よく30年も続いたものだ。それだけ、より良い世の中をつくりたい、困った人を助ける、人々の役に立つ人間になりたいという情熱はあったと思う。その後、僕自身が、保革の広汎な市民と共産党の推薦を受けて1998年10月の三郷市長選挙の候補になり、現職市長にわずかの差で敗れた。住民参加の市政・町づくりの市民運動を前進させるのに、一定の貢献はできたと思っている。

共産党については、今でも大事で、存在理由はあると思っている。自分の勤務する組織をほめるのはおこがましいが、民医連（全日本民主医療機関連合会）の医療・福祉活動も良くやっている。今の格差社会で、困窮してどこにも救いが無い人たち、健康保険も無い外国人労働者、公害や労災・職業病の患者、そんな患者さんたちに寄り添い、支援する運動を続けてきた。自殺や孤独死の危険から救えたと思う人が、僕がかかわっただけでも何人かいる。民医連という組織が、議員や弁護士、行政などと協力し、全国規模でどれだけのことをしているかということを見れば、その実績は大きいと思うよ。共産党や支持者の人たちはその中心になって献身的にがんばっている。

昔の共産党は、分裂した一方が犯した1950年代の極左冒険主義の誤りもあって、狭く暗いイメージがあった。その後、宮本顕治や上田耕一郎、不破哲三兄弟らがソ連や中国の干渉と闘って、自主独立路線を確立して上げ潮に向かった。それでも、まだまだ、身内だけが納得するような議論をしてね…私たちは正しいと言ってるだけで、世間の人があんまり信頼して相手にしてくれずに孤立している面もあった。今も、壁にぶつかって一進一退しているね。ただ、今、活動の中心になっているのが、僕らのような東大闘争、医学部闘争以後の世代の人間だから。あの時代の、学生運動で磨いたセンス、思想信条の異なる幅広い層の人々と連帯協力して多数派を形成していく柔軟なやり方を身につけた人も少なくないからね。

——共産党自体も変わってきているということでしょうか。

変わってきている。最近もテレビなんかでよく見る、僕らの十年くらい後輩の小池晃共産党議員なども、よく聞いていれば、結構説得力あることを言っているよ。共産党は、僕が見る分には結構変わってきていて、民主的な開かれた政党になって、幅広い人々と協力

してやりましょうという方向に動いている気がする。実際に、自公が少数派になったときに、民主党や社民党などと手を組んで政権をとるのか、そこには入らないで外から協力するのか、共産党としても微妙だとは思うけど、結果的に日本の政治が一步前に進むようなことをしたほうがいいと思うけれどね。その辺が共産党の正念場だろうとは思う。

報道の分野でも、値打ちのあることをしていると思うよ。最近ではNHKが批判されて少しは良い方向へ変わってきたようだけどね。日本のマスコミというのは、程度の差はあっても、みんな権力にぶらさがり、そこから情報をもらって伝えているという側面が強い。自立した立場で、独自に調査して報道するっていうのが弱いように思う。本当の自立は、ミニコミやブログのレベルでしか存在しないんで、主要なマスコミはある意味みんな体制側に飼われているような感じだ。それからすると、やっぱり共産党の機関誌「赤旗」の存在は大きいからね。そういう権力から独立した貴重なメディアだから。世界を見渡せば、最近でこそアルジャジーラのような一方通行でないメディアが出てきたけど、アメリカがアラブを攻撃しても、アラブの立場からの情報なんていうものは、本当にごく限られたものでしかないわけだ。マスコミが「国際社会は」と言うときは、実は「アメリカと一部の同盟国は」という中身にすぎないことも多い。そういう、内外の強い権力の側から操作されない報道をやっているということは、やっぱり大きい。

ただし、うんと変わってきたけれども、日本共産党も、そもそもの出発点はスターリンたちが作った国際的な組織の一部であった。そういう体質が、どうしても少し残っている。少数意見や異端の人が言うことを大事にしようというのが、足りないわけだね。懐（ふところ）の深さが足りない。なにかのことで意見が分かれて共産党から出ちゃった場合が問題だ。傷が浅く、それまで勤務した組織に残り、是々非々の協力関係も続けば幸いだ。ところが、党関係やそれに近い企業の勤務員だとか、議員とかが党の決定に刃向かったということになれば、党からも仕事からも外されて生活にも困ってしまうことがあった。今まで仲良くしていた人たちも付き合いなくなってしまうたりね。

1972年の「新日和見主義事件」というのがあって、分派事件として大量の民青や全学連関係の共産党員が処分追放された。僕は関係しなかったが、何人かの友人が処分を受けた。その取り調べのやり方（いわゆる査問）が、古い共産党の体質を感じさせるものだった。また、民青や共産党の専従といった経歴の友人たちは、一般企業への再就職も難しく、生活していくのに大変な苦勞をした。スターリン時代とはちがうけど、そういうゆがんだ形の部分が、体質的にちょっとは残っているんだよね。そういった点が、一般の人が共産党と付き合いっていてどうも違和感を覚える部分、何か匂いを感じる部分があるのだろうし、そのために共産党が大きく広がらないのかもしれない。まあだんだんと良い方向に行っているとは思うけれどね。

僕は、今後の共産党は、過去にあった共産党というものについてもっとキチンと総括したほうがいいと思うのだけれどね。日本で唯一、侵略戦争に反対して、弾圧された政党。「蟹工船」を書いて虐殺された小林多喜二も共産党員だ。天皇制軍国主義の時代に敢然と戦争に反対した政党なんて他にはないわけだから、それは確かに立派で貴重なことだと思う。しかし、逆に言えば、そのときスターリンが命令すればその命令どおりに、日本を引っ掻き回したかもしれないという限界をもった未熟な政党だった。終戦の時、仮に共産党が政権を取っていたら、宮本顕治は消されて、かつての東欧社会主義国のような悲惨なことになる可能性が強いと思う。だから、そのところを、いっぺんもっと徹底して総括しないといけないと思う。もちろん今までにも総括しているんだけど、僕は不十分だと思う。

う。徹底してやってしまうと、今までの蓄積を維持しにくいから、なかなか難しいのだろうけれど。イタリアなんかは左翼民主党といってそういう風に別れちゃった政党と、昔ながらの共産党とがあるけれどね。

僕らの場合、昔の学生運動やっていたころの共産党員の仲間では、三分の一以上はまだ共産党に属してがんばっている。三分の一近くは対立、三分の一は離れて協力している。大雑把に言えば、そんな感じだね。だけど、僕らの世代は、誰か昔の仲間が死んだとか言っていると、今共産党とケンカしている人も、僕みたいに離れて協力している人も、今も共産党の中でやっている人も、みんな集まって来る。一致点での運動にも協力する。まっとうな人間らしい関係ができていて、それはいいことだよ。少なくとも、そういう時代にはなった。

医学部というコミュニティ

——東大で学生たちが最初に声をあげたのも、医学部からでした。東大医学部は100人弱程度の定員で他学部に比べると小規模であり、組織内の関係も密であるように思います。また、インターン制度への反対など、教育制度や社会制度のゆがみがまずはっきりと現れたのも医学部であったように思われるのですが、医学部というコミュニティについてお話しいただけますか。

家族主義的な部分は大きかったんじゃないかな。そういう点で言えば、東大闘争でも、医学部の中でやっている最初の段階では、社学同が主導権握っていて、僕ら民青は医学部の中では少数派だったから、「民青の裏切り者、腕の一本もへし折ってやるぞ」なんて野次られたり脅されたりしたことがあったけど、実際にそんなことされるのは医学部生の中ではなかったね。そこにはやっぱりある程度、お互いによく知り合っていて一緒に運動もしてきた家族意識みたいなものがあるんだよね。とくに、東大闘争の前半、東大医学部の中では、最低限の良識・遠慮はあったのだと思う。秋頃から、過激な暴力的衝突が日常化する中で、一部の学生たちの心にも、すさんだやくざのような気分が生まれていったと思う。

闘争も最終盤になると、暴力がだんだんとおさまり、ぼくら民青・ノンセクト連合が学校側と交渉をまとめ、ストライキも終わって授業再開となった。それまでゲバ棒振り回して襲ってきた医学部の全共闘の連中も、あきらめて授業に出て来るでしょ。すると、それまでの衝突のなかでその全共闘メンバーに殴られた人間がいて、結局民青なんかよりもむしろノンセクトの殴られた人たちの方が怒っているから、出て来た全共闘を素手でボカボカ殴るということはあったけれど、手加減はしていたと思うよ。まあそれも一度殴れば気持ちすがすんで、それでおしまいという形で収拾だよ。その程度のことだね。

僕も、紛争の最後あたりでも大学構内を平気で一人で歩いていたけど、東大の法学部のM君なんてリンチされた人もいたし、安田講堂で、中に他大学の学生がいっぱいいるところでつかまってやられた人もいたよ。逆にこっちも、同じ東大の中で顔を知っている相手どおしだったらやらないけども、全学連の支援部隊、他大学の外人部隊のような連中は、全共闘の迷い込んだのを捕まえて、殴ってほっぽり出したとか、そういう話はあるよね。

——医学部というコミュニティのある種の特徴さというか、東大の中でも際立っているような気がします。学生たちの間の関係は今仰ったようなもののだとして、教授たちとの関係はどのようなものだったのでしょうか。やはり家族主義的な面があったのでしょうか。

うか。

そりゃあやっぱり、あったね。同じ医学部同窓会、鉄門の先輩・後輩という感じ。一学年 100 人足らずの小さな所帯で、ほとんどの卒業生が東大病院と系列病院という共通の職場に就職して長期間仲間として暮らす。他の学部とちがうところだね。戦前戦後、学生運動・政治活動で逮捕され処分された者も、後でみんな許されて復学している。教授たちが、いろいろと不肖の弟子たちの面倒をみているんだ。

先生たちとの関係でいうと、東大闘争の経過の中で、切羽詰まった状況に置かれて、その人間がどういう人間なのかがわかってくる。要するに、信頼できる人間と、そうでない人間がいる。人間的に信頼できるかどうか、これが一番であって、今に至るまで、僕はこれがすごく大事なことだと思う。

思想や考え方が違うということは、自分がその人と付き合うかどうかの基準にはならない。思想は違っていい。ずいぶん違っていい。ただ、信用できるまっとうな人間と付き合う。だから教授とか助教授なんかでもね、学生なんかがワアッと押し寄せて来ると、多少へつらうようなタイプの人間っているわけだよ。そして、なにかあるたびにくるくる意見が変わるような人間。それに比べると、簡単には妥協しないで、自分の考えを頑固に主張するけれど、しかし学生のことには一生懸命に思っている、そういう先生がいるでしょう。まあ要するに古い侍みたいな、直球一本でくるような人。結局、そんな人が学生に一番信頼されるし、愛される。

——たとえば文学部の林健太郎文学部長のような教授でしょうか。彼は 173 時間に渡り革マル派によって軟禁されましたが、学生側も強情で一貫した態度に敬意を示したそうです。

そう、僕は医学部で直接は彼を知らないし何とも言えないけれど、林健太郎もそうかもしれない。医学部の中では、中井準之助医学部長（解剖学教授）や学生委員長の津山直一整形外科教授がそうだった。本当に古い侍みたいな気骨のある人。結局、全共闘でも民青であっても、やっぱり認めるのはそういう人だね。わかったようなことを口で言ってもだめだ、本気で体張って、自分ひとりでも真剣勝負しに来るような、肚のすわった人間じゃないとね。何か、ものをまとめようとしたり解決したりというのは、そういう人じゃなきゃできないからね。

ノンセクトとの共闘

——ノンセクトと民青との連合によって 7 学部、及び医学部代表による大学との交渉が行われ、1969 年 1 月 10 日には秩父宮ラグビー場での 10 項目確認書が取り交わされることとなりますね。

自分なりの信念と考え方を持ち、肚を据えて真剣勝負するやつが物事をまとめられるという点では民青・ノンセクト連合というのもそうだった。医学部の中のノンセクト有志連合は、富坂のセミナーハウスを拠点にしていたので僕らは「富坂派」と呼んでいた。何人か主要なリーダーがいたけど、頭が切れて、情熱とエネルギーのある素晴らしい人たちだった。

柴田洋一君という中心人物がいた。彼は、2・26 事件の将校の所にお墓参りに行くような男。別に頑なな右翼っていうのじゃ無いけれど、変わっていてね。全共闘に言わせれば右翼なんだけれど、それがノンセクト側のリーダーで、僕は民青のリーダーで、お互いに

3人くらいの代表で会って、統一戦線結成の話をしたわけ。骨のある男なんだ、これが。

ついこの数年間もね、文部省を相手に裁判をして、ついに勝った。彼の名前でインターネット検索すれば出てくるけど。これは今の官僚政治っていわれるものの実態だけど、文部省っていうのはとんでもないことをしているわけ。全国医学部長病院長会議を不当に牛耳ったり、国会で、その記録が無いと真っ赤な嘘の証言をしたり…世間の人は知らないだろうけど…ひどい話だ。文部省の一官僚が、大学の事務長とか東大病院の事務長とか、そういうポジションに出向してきて就いている。東大病院長といえば偉くて事務長はその配下なのかと思うと、事務長は自分の出世を左右する文部省上役の方を伺っているわけ。しかも、文部省の課長というのは、大学病院でえらいはずの東大教授に対しても、どういう研究にどんな予算をつけるかという主導権をみんな持っている。だから教授たちはこれが怖いんだよ。文部省がなにか変なことしたときに、正面切ってこれはおかしいと言える教授は少ない。東大教授といえども、「これはちょっとなんとかした方が…」というくらいしか言えない。よっぽどの人間でもそのくらいで、後の仕返しを恐れて何もいえない人も多い。そんな中で、文部省と正面切って喧嘩したのが、学生時代に「富坂派」の幹部で、東大輸血部の教授だった柴田君。僕の政治思想とはちがうところにいる人間だけど、不屈に闘う民主主義者でありたいという点では一致している。まっとうな人間、もっとも信頼している友人だ。

若井晋君は熱心なクリスチャンだ。優秀な脳外科の教授で台湾に2年間移住して指導にもあたった。JOCS（日本キリスト教海外医療協力会）の中心になって活躍し、東大の国際保健学の教授になった。加我君孝君は耳鼻科の教授になったが、一貫して医学教育の改革に取り組んだ。廣川信隆君は、解剖学の教授で、世界のトップレベルの業績を上げ、アジア各国のリーダーになる若手研究者を育てている。素晴らしい人物が一杯いて一々あげきれない。

東大闘争の時期、彼ら「富坂派」が、「フェニックス通信」という小さな機関誌を出していた。レーニンの「社会民主党の二つの戦術」とか、デイトロフの「反ファシズム統一戦線」などを研究して、過激派の「エセ革命論」は、社会変革の理論としてもおかしい、レーニンの理論に照らしてもおかしいと、反論していたんだ。僕らも協力したんだけど…本当に、面白い時代だったし、今日まで続く多くの貴重な友人を得た。

体感した貧しさ

——続いて今の学生についてお伺いしたいと思います。私のような今の学生からみると、今の世界情勢が学生運動の興隆期に似ていると思うようなところもあって、たとえばベトナム戦争によってアメリカによるアジアへの侵略戦争が始まったという40年前の状況と、イラクなど中東の国々に、様々な理由でアメリカが進駐していくという状況が、ある種パラレルで、すごく似ているという気がします。同時に日本国内でもアメリカナイズされた資本主義やネオリベリズムが広まり、格差が広がっているという実感があります。

——それにもかかわらず、学生が主体となって政治的に声を上げるような動きというのはあまり無いように思います。そしてシラけていること自体に、あまり違和感もない。そのことについて三浦さんはどのようにお考えになるのでしょうか。それはやはり40年前の全共闘運動が、運動として総括をなされないまま終結し、さらに一部の過激な組織の登場

によって悪印象を残してしまったことが原因なのでしょうか。

直接的にはそれもあると思うよ。連合赤軍のような過激化した組織の中で内ゲバだとかリンチがあって、学生運動というのは怖いものだと、それが非常に印象づけられたというのはあると思う。もうひとつは、やっぱり、いろんな格差の問題はあるにしても、時代として豊かになってしまって、若者が子供の頃にひもじい、とかそういう思いをあまりしていないんじゃないかと思う。テレビやゲームなんかの、画面を通した感覚で、自分の実感としてではなくてアフリカの人たちはかわいそう、イラクの人はかわいそう、とは思いかもしれないけれど、自分の共感する原体験というのがちょっと少ないのかなあ、というのがありますね。

——実感としての貧しさがないと。

そうそう。いくら理屈だとか、テレビとかゲームとかで知識として知っていても、体の感覚としてそういうものを共感しないとなかなか動きにくいのかなと思う。そういう意味では、自己責任とかで不当な責任追及をされたけど、イラクで捕まった高遠さんや郡山君、ああいう青年たちのような存在が貴重なのだと思うけれどね。インドやアジア、アフリカでもイラクでもいいけど、若者が実際に行って体験するっていうことは非常に大事なんじゃない。

——現場を見るということですね。

そう。例えば、テレビでバングラデシュを見て、ああ貧しい国だなんてただ見ているのと、実際に行って何人かの人たちとしゃべったり、子供としゃべったり、その中に自分の友人もいて、中のことをいろいろ知っていて、それで、何かが起きたときに、「あ、あの子がこういう目にあっている」と思うのとは、全然違うんだよね。

たとえば誰かが線路に飛び込んでね、「人身事故がありまして電車が何分遅れます」というアナウンスがある。みんな「あ、会社に遅れる」とか、「困ったやつだ」とか、そんなに気の毒な人がいるのに、人間が一人死んだっていう重みなんて伝わってこないでしょ。それが、もし、自分の家族・親戚とか友人とかだと、すごい重みを感じて心が動くよね。そういうところが、みんな表面的な受け取りかたをして流している場合が多いんじゃないかと思う。

僕らの世代の場合はどうだったかというと、1950年代、小学校のときに、弁当を持ってこれないとか、持ってきてもサツマイモだけとか、そういう友だちがいたわけ。頭にはシラミが湧いていて、目はトラホームというやつもある。とにかく、みんなが裸足で、いつも腹が減っているわけ。そんな体験があるから、貧しいということが、今の世代の若者がテレビでみて、気の毒だね、というのとは違いがあるのだと思うよ。自分の中に、相手の苦しみに共振・共感する弦の響きが聞こえてくる。

イラクとベトナムが違ったのは、まあベトナムが地理的に身近だということもあるけど、ほら、中国や韓国、ベトナムなんていうのは、みんな黄色人種で顔かたちも自分とそっくりなやつがいるってこともあると思う。そういうところに、爆弾がボカボカ落ちる。そして、それがアメリカによってやられている、ということに反発する意識ね。

僕は、今の若い人たちは、外国や国内の今まで知らないいろんな所に行って友達をつくったほうがいいって思う。自分の足で歩いたという感覚以上のものを人間は考えられない、勉強をいくらしてもね。その感覚の上で、自分の知識もより深いものになるだろうけど、とにかく、体で動いて見て感じるってことが大事だと思う。

あとは、日本は今のままの状況であれば、間違いなく将来大変な落ち込みがあるんじゃない

ないかと思う。どうせ来るなら早く来たほうがいいと思うけど。そうするときっとみんなが必死に動き出す。日本人はなんか、明治維新も黒船だけど、目の前に大きな危機が迫らない限り、このままではいけないとは思っていても、なかなか自分から根本的・本質的な改革をやろう、というふうになれないところがある。まして、今、一部では格差が広がって、ホームレスになったり困ったりしていると思うけれど、なんとか食べられないことはない。一応、大多数は、食うのには困っていない状況だろうから。

最近すこし反省期に入ってきたけれども、アメリカ型の勝ち組負け組のような枠組みで、セレブがいいとか、社会がホリエモンみたいなのをもてはやした時期もあったわけでしょう。これは僕らの責任でもあるけれど、思想や哲学なんかの文化的なリーダーが力を発揮していないからだよ。そういうものも、世の中が本当に困って、みんなが求め始めれば出てくるのかもしれないけれど、みんなを気づかせ動かすようなものが足りない。

それで、若い学生のあなたはどうなんですか？ この時代をどうしようとしているんですか？

——私にも漠然とした違和感みたいなのがあって、日本が末期ヴェネチアみたいに没落していくのじゃないか、みたいな漠とした危機感はあるのですが。東大に入って思ったことは、今の世の中で40年前と同様に学生運動するべきであるとか、そういう風には思わないのですが、それにしても今やっている以上にやるべきことはあるのではないかとはいいます。サークル活動のようにそれぞれの組織がやりたいことに特化して、分派して集まることは多いのですが、異分野の人間どおしが関わることも少ないし、やっていることも多くの場合、自分の好きなスポーツをやるというレベルに留まっている。もちろん、その中でいろいろな葛藤や思想のぶつかり合いはあるのですが。

——取材の中で、全共闘運動に関わった人たちの話を聞いていると、学生時代に本気で色々なことを考えて、友人や敵から色々な話を聞いていく中で自分を醸造した人というのは、40年経って大人になってからも立派だな、と思うことが多いんです。私自身はジャーナリストとして、将来何かを伝える人間になりたいと思っていますが、そういう点から「異邦人」の話を聞くことはまず大切なのだと思います。全共闘運動に、様々な立場から関わった人達にどうしてあの時あのように振舞ったのか、そして今あの頃をどのように振り返るか、そして次世代に何を残そうとお考えなのかというお話を伺うのも、そういう意識から、という部分が大きいです。

東大闘争に関心をもってくれたってだけでもうれしいけれど。そういう人はなかなか少数だから。例えばジャーナリストっていうのも、ジャーナリストになって何をしたいのか。どういうことがしたいんですか？

——僕はやっぱり、人が言わないようなことでも言えるようなジャーナリストになりたいです。必ずしも反体制である必要はないと思うんですけど。お話を伺った、ある警察官僚の方が「体制内改革主義」ということを言っていて、それが今の心情として自分のなかではしっかりくるように感じました。日本の社会政策にしろ、経済政策にしろ、相当ガタは来ているけれども一応は回っているわけじゃないですか。「東大解体」、「日本解体」といったように全てぶち壊して作り直すのは、まだ早いのだと思います。その中で、周りがあまり言わないようなことを言えるジャーナリストになればと思います。

NHKでも民放でも、国際社会はどうだろう、という。それはほとんど8割方はアメリカがこうだというのを、「国際社会はこうだ」と言っているんだよね。だから一方にはアルジャジーラがあるけれど、日本だったら、アジアの民衆の立場から、独自の視点で真

実を報道するということもできる。中国なんかでも、権力に捕まって弾圧されても犠牲を払って自分の報道をする人がいるし、現場を調べて、中国共産党としては隠したいものを告発している人もいない。やるからには、アレくらいの根性をもってやって欲しいと思うね。本当に少ないと思うよ、それくらいの人は。

僕が非常に有利だと思うのは、今の時代にはインターネットがある。確か、韓国かどこかで、市民のための放送局を作りかけて潰れてしまったものがあつた。そういうものを、頭がよくて、ネットワークを持っている人が工夫して作れば成立すると思うよね。インターネットで調べて色んなつながりをつけようと考えれば、韓国で同じことを考えている仲間だとか、中国、インド、タイ、インドネシア、フィリピンなどで、それぞれ同じ意識を持った人間と連絡を取って、アジアにおける放送局を作るとかね。

僕らのころは貧乏で、飛行機で外国に行くってことすら考えにくい時代だったからね。だから、僕も学生時代までずっと、飛行機に乗ったことがなかった。東大闘争が終わって、その報告をするように招待されて、四国にYS11で行った。そのとき初めて飛行機というものに乗った。外国に行くなんてとんでもない。カメラだって持ったことのない貧乏人だから。医学部の中でも、一部の医者の子とかはカメラ持っていたけど、車に乗って学校に来るやつなんてほとんどいない。僕ら民青の活動家の仲間でもバイク乗りが少しとかね。あとはみんな、そういうものないわけで。今はやろうと思えば、手段はいっぱいあって恵まれている。特にインターネットというのはすごい。だから、「赤旗」に負けないようなものを作ってくださいよと、あなたや今の若者に言いたいですね。ジャーナリストになりたいと言うならそれくらいの志をもってほしい。

大体、年を取ってくると、みんな、世の中に妥協しなきゃいけないとか、女房子供を食わせなくちゃいけないとか、もうちょっと広い家がほしいとかさ、いろんなことも考えてしまう。僕自身、二十歳前後に、日本の世直し・民主的変革の運動に、自分の一生を捧げようと決意した頃から比べると、今は大分墮落して隔たってしまったと思う。だけど、若い頃、それだけ高い志を立て命を燃やした、その残り火で後の人生を生き、今もこうして生きている。僕の「東大闘争から地域医療へ」という本に、「志の持続を求めて」というサブタイトルをつけたのもそんな気持ちからだ。

だから、若いうちから、そこそこのジャーナリストになって売れたらいいとか、ほどほどに金ももうけたいとか、そのくらいの志だったら、起業しても、どっかのお偉いさんに「お前なかなか見所あるじゃないか、俺は口は出さない、金を出す」って言われたらね、ほいほいと金をもらって、行く先はホリエモンの二の舞と、見えているようなもんでね。だから、それはやっぱり、いろんな世の中の現実を見て、自分の志を相当高くもたないと。その志は、年をとれば鈍り、すり減ってくるんだから。

今年亡くなった土本典昭っていう監督がいる。ずっと水俣現地に入って、記録映像を撮っていた。「医学としての水俣病」だとかいろんな素晴らしい作品があるけれど、是非、インターネットで調べて、DVDを見たほうがいい。彼は、それこそ自分自身で疑問を抱いたり、反対したりしながらも、武装闘争時代の共産党に入っていた。それで挫折して、迷い迷った上でこの映画の世界に入ったわけだけど。それで水俣にずっと入り込んで、水俣病を撮り続けた。彼が書いている文章に、「自分が多少のことをできたのだとすれば、若いときの高い志の余韻が残っているからだ」というくだりがある。だから、誰でも、いろいろと間違えたり、後から考えるとお粗末なこともしていたりするけど、しかし若いときの志の高さがね、残りの人生を導くんだ。だから若いときに高い志がなかったらもう次

がないよ。

将来の日本が行き詰ったときに、それを切り開く情報を提供するの私だ…くらいの気構えがほしい。でもそう思ったとしたら、結局それは後から考えるとうぬぼれだから、恥ずかしいこともお粗末なこともあるんだけど、それはしょうがないんだよ。

幕末・明治維新の時代には、西郷、勝海舟、高杉晋作も吉田松陰もいるけど、あの連中は文字通りいつでも自分の命をかけてやっている。すごいよね。これをやれば生きるか死ぬかっていう場面で決断するときも、「死んだら、それでよい。もし、時代の神様が俺を必要としているなら、俺を殺しはしないだろう」と言って飛び込んでいくわけだよ。そしてそんなのがいっぱいいたわけだよ。いっぱいいたから、明治維新ができた。逆に言うと、そういう連中は、俺がやらなくて誰がやる、俺は時代を切り開く男なんだっていう、うぬぼれがあるわけ。うぬぼれがないとそんなことできない。俺は平凡で、お粗末な人間で、別にたいした男じゃございませんと思っていたら、そこまでやれない。だからそのくらいのうぬぼれと、志の高さっていうものが若い人には必要だと思う。そしてそれを生むような、それを固めるような原体験が必要なんじゃないか。それは実感としての人間的感動とか、そういったものに違いないだろうと思う。

思想の血肉化

——三浦さんは『東大闘争から地域医療へ志の持続を求めて』の中で「思想の血肉化」ということを仰っていますね。頭で考えたことをしっかりと自分の中に取り込んで、体現するように行動する。今の若者に「足りない」かもしれないもの、そして「思想の血肉化」について、学生へのメッセージと共にお話しいただけますか。

自分が学生時代のときにも思ったけど、都会の人っていうのはしらけているのよ。田舎で育つと違うんだよね。「都会は人間がつくった。田舎は神様がつくった」という言葉がある。自分の子供の教育もそうだけど、人間は、山とか川とか田んぼとか、そういう豊かな自然があるところで育てた方がいいという気がする。やっぱりテレビゲームとか仮想体験の比重が大き過ぎるのはまずい。土に触れたり石に触ったり木や風のざわめきを聞いたり、いろんな生き物に触れたりっていう豊かな実体験、それが人間の根本的な情熱とか、エネルギーを生むんじゃないかって思っているよ。今日の時代によくあるような状況、塾とか受験とかに時間も遊びもすっかり奪われて自由に伸び伸びと生きられない…というのが、子供や若者の感性や心のエネルギーをすり減らしているんじゃないかっていう気がする。だから、自然に触れるキャンプや登山、スポーツ、アジア貧乏旅行とか国内の自転車旅行でもいい、あまり金を使わず、自分の身体を使って思い切って好きなことをやってみるのがいいんじゃないかと思う。多少のリスクや失敗を恐れずにやってみないと。いろんな人や物、国、環境にぶつかってみて、自分がどんな存在なのか、どう生きたらいいのかもわかってくるのだと思う。

イラクで捕まった高遠さんや郡山君、彼らのように、思い切って飛び回るとリスクもあるけど、リスクを恐れていたら何もできない。もちろん、無謀では困る、賢く頭を使わなければいけないが…とにかく、行動しなければ何も始まらない。いろんなところに行って飛び込んでみないと、本当のことはきっとわからないんじゃないかと思う。

学生時代に木元君という仲間の演説をきいて、気に入った文句がある。僕も「過激派の正体がわかった」という演説によく使った。リンカーンの言葉にこんなものがあるんだ。

「一人の人を長い間だまし続けることはできる。大勢の人を短期間だますこともできる。しかし、大勢の人を長いあいだだまし続けることはけっしてできない」。

このリンカーンの言葉と同じようにね、僕らが学生時代にいろいろやっているときにしばしば考えたことは「思想の血肉化」ということなんだよね。口でぺらぺらといろんなことを言っても、ちょっとした態度でその人が本当にそうした人間であるか、それとも理屈を覚えてただ口先で喋っているだけか、本当に自分のものになっているかどうかはわかってしまう。日々の行動ににじみ出て現れるくらいやらないと、それは本当の思想じゃないということをよく話し合っただけだね。茶店や食堂でなんか食べても、どっかの中華料理屋に入って店のおばちゃんから料理をもらっても、「俺は金払ってる客だ」という調子で店員を馬鹿にした尊大な態度をとるやつがいるよね。こういう人間は評価できない。民主主義を説いても、それはニセモノで、最低の人間。人の思想は、日常の行動や言葉にも表れるものだ。

僕は若い世代の動きで、ひとつ希望を持っているのは、参議院議員の川田龍平君^{かわだ}。あれは市民運動家で国会議員にもなったけど、もともと自分も被害者である薬害エイズの運動が原点でしょう。エイズの運動で、ラップをやりながら若者がみんなでデモ行進してた。非常に今らしいね。だからああいうセンスで、何らかの運動に参入していったらいいと僕は思う。

——今日は長い間、ありがとうございました。

9月19日、北千住にて

取材者：関翔平

5

用語集

学生の立場から見て説明しておいた方が良いでしょうと思われる用語を厳選して解説を加えた。バイアスが入っていることは重々に承知しつつ、できるだけオリジナルな説明を心がけた。Wikipedia はあえて見ないようにして、一部は書籍を参照した。あくまで「現代から見た当時」がテーマである。

青

青年の青は若さのイデオロギーである。学生運動における若気の至りを表している。「社青同」や「民青」に青が入っていることが象徴的である。まだ青い青春ということ。赤と対照的だ。

赤

赤は革命のイデオロギーである。社会主義の象徴として使われる。「アカガリ」＝「レッドパージ」が有名。ソ連の旗の色も“アカ”。

浅間山荘事件

過激派革命組織、連合赤軍が 1972 年に引き起こした事件。長野県軽井沢町にある「浅間山荘」に連合赤軍が閉じこもり、警察官と長期間の銃撃戦を繰り広げた。警察庁長官・後藤田正晴の命で、警察庁からは、今回の企画でゼミ生がインタビューした佐々淳行氏も警備実施の責任者として長野に派遣された。浅間山荘事件を扱った映画としては、原田眞人監督『突入せよ!「あさま山荘」事件』や、若松孝二監督の『実録・連合赤軍 あさま山荘への道程』などがある。

アジる

アジテーション（英 agitation）。つまり、扇動すること。当時は、マイクを持って大衆に対して勢いのあるあおり立てをすれば「アジっている」と言われた。

異議ナシ

当時は「その通りだ」の代わりにこのように言う文化であった。

内ゲバ

左派なら左派で本来味方同士であるはずの組織が内部分裂・内部反乱を起こすこと。ゲバとはゲバルト（独 Gewalt）の略で、暴力を意味する。70年代には内ゲバがさかんとなり、殺人に発展するケースも頻繁に起きた。

オルグ

現代のサークルや部活動が行っている「勧誘活動」と基本的には同じようなもの。左派的な政治色が加われば、「オルグ」となる。組織化する（独 *organisieren*・英 *organizing*）の略か。

火炎ビン

学生運動で使われた学生側の武器。1950年代のデモや、60年代、70年代の学園紛争時にも多く用いられた。

革マル派

「日本革命的共産主義者同盟革命的マルクス主義派」の略。学生組織は日本マルクス主義学生同盟革命的マルクス主義派。黒田寛一が組織。東大では新入生歓迎期になると、自治会が「革マル派と原理研究会に関わってはいけません」という内容のビラを配布する。警察庁のホームページによると、「革マル派による違法な調査活動は、民主主義社会に対する挑戦であり、平穏な社会生活を確保していく上で看過することのできない犯罪行為と言えます。」だって。

原理研究会

統一協会（世界基督教統一神霊協会）の学生による下部組織。大学内で政治活動も行った。一般的には左翼系学生との対立が指摘される。こちらも、東大自治会のビラに載っている。

国際反戦デー

1966年に日本労働組合総評議会（総評）がベトナム反戦統一ストを行ったことから始まる。1968年の国際反戦デーでは新宿騒乱に騒擾罪（＝騒乱罪）が適用され、多数の逮捕者が出た。

駒場寮

東大駒場キャンパス内にあった寮。（現在のコミュニケーション・プラザの位置。）当時、学生たちの熱心な議論の場になった。近年、名目上は老朽化のため、取り壊された。

佐世保闘争

1968 年 1 月 19 日、米軍原子力空母「エンタープライズ」の日本への入港拒否を目指して闘われた。背景としては日米協力体制の打破・ベトナム反戦があった。

三派全学連

1966 年、中核派・ブント・社青同解放派の三派によって結成された組織。以後、学生運動はこの組織が大きな指導的役割を果たした。

ジグザグデモ

体制への反発から生み出された、ジグザグに行進するデモ。違法とされている。

自己批判

左翼系学生は「論理」を重視する。革命のためには緻密な論理性が必要であるから。その論理性に忠実に生きようとするため、自分で自分の行動・思想を吟味し、反省する「自己批判」という行動様式が常識になった。真面目な学生ほど矛盾に充ちた自己を批判し、主体性を求めたがるものかもしれない。自分のこれまでの行動や思想を論理化する「総括」とも関連。この「自己批判」を相手に要求するという原理が過激化することにより暴力を産み、内部リンチとなって連合赤軍による事件を生み出した（山岳ベース事件では 12 名が粛清）とも言える。ちなみに、浅間山荘では、クッキーを食べたことに対する「自己批判」が要求された。

シュプレヒコール

デモの際、皆で声を合わせる。「シュプレヒコール，……」とリーダーが叫び、皆が声を出して団結した。合唱せよ（独 sprechchor）の略。

助手共闘

全学助手共闘会議。東大における全共闘運動には、学部生だけでなく大学院生や助手も加わった。ゼミ生もインタビューを行った最首悟氏は助手共闘結成の中心メンバーであった。

新左翼

60 年安保以降、旧来の左翼（特に共産党系）を否定する形で現れた左翼勢力のこと。

スターリン批判

1956 年、絶対に正しいはずであったスターリンが死後、フルシチョフにあっさりと批判されることになった。社会主義の国々は大混乱になり、ハンガリー動乱・ボズナニ動乱などの形として噴出し世界的な衝撃となった。

スチューデント・パワー

1968-69 年は世界で同時多発的に学生運動があった。^{スチューデント・パワー} 学生に力があつた時代であつた。

スト

ストライキのこと。学生運動の文脈で語られるとき、労働者が業務を停止することの他に、学生が団結して授業や試験をボイコットすることもある。大衆団交に大学当局を応じさせることが、学生側の一つの目的となっていた。バリケードを築いてストが行われた。保守派の学生はしばしば「スト破り」を図った。

セクト

組織の派閥（英 sect）のこと。セクト同士が内乱する「内ゲバ」が 70 年代以降目立つ。

全学連

全日本学生自治会総連合。戦後すぐに結成された学生組織。初代委員長は武井昭夫^{たけいてるお}。60 年安保の際にブント指導下の主流派と共産党指導下の反主流派に分裂した。全共闘運動期には、上記の三派全学連が登場した。

全共闘

全学共闘会議。68 年・69 年の運動、70 年安保の学生運動で大きな役割を果たす組織。はじめは日本大学で、20 億円の使途不明金をめぐり学生からの抗議が起き、1968 年 5 月 27 日に秋田明大^{めいだい}を議長に結成されたのを皮切りに、7 月 5 日には山本義隆を議長に東大全共闘が結成、その後も全国の大学で結成の動きが進んだ。60 年安保の際の運動鎮圧の後、学生運動は一度沈静化するが、68 年・69 年に再びピークを迎える。全共闘自体は、セクト・ノンセクトの別を問わず学生が参加し、また組織に属するかどうかは本人の声明次第でどうにでもなったため、組織の幅が非常に不明確な側面を持つ組織でもあった。（全共

闘という組織の性質については議論が分かれる。) ヒエラルキー性を認めず、実質のリーダーであった山本義隆も議長という位置づけであった。大学進学率が今よりも低かった当時、また運動が学生全体によって行われたものではないということから「全共闘世代」は必ずしも「団塊の世代」とイコールにならないことに注意。

総括

自分の行動や思想を反省させること。「総括せよ!」ということと「自己批判せよ!」ということは、意味合いが近い。

造反有理

「反乱することには道理がある」という毛沢東の言葉で、文化大革命(全共闘運動に与えた影響が大きい)のスローガンとなった。共産主義者同盟の一派・ML派の標語でもあった。全共闘運動時には、東大本郷キャンパス正門の壁にある落書きが有名である。

第一次羽田闘争

1967年10月、佐藤栄作の南ベトナム訪問に反対し、首相の羽田空港からの出発を阻止するために起こされた闘争。ゲバ棒が登場し、京大生・やまざきひろあき山崎博昭が機動隊との衝突の中で死亡した。

大衆団交^{だんこう}

「団交」とは労働組合の用語だが、これが学生対大学という構図に使われた。学生側が大学に要求をする際、交渉の手段として用いられた。

立看板、タテカン

学園紛争時には、政治的主張のためにベニア板などを用いて作られ、キャンパス内に設置された。他にも、学生の文化活動の告知にも使われた。今では、駒場キャンパスにはサークル勧誘のタテカンが立つ。(特に新入生入学シーズン。)

中核派

日本マルクス主義学生同盟中核派。上部組織は革命的共産主義者同盟全国委員会。革共同第三次分裂の際に革マル派と分かれ、のちに両者の間で苛烈な内ゲバが起きた。

帝大解体

帝大は帝国大学の略。東大全共闘運動の一スローガン。

デモ

政治的な示威のために行われる大衆運動。今でも渋谷でよく見かける。デモは警察に届け出をすれば合法でできる。似たようなものにパレードがある。

テント村

1968年6月17日の機動隊導入以後、東大本郷キャンパスを監視するために安田講堂前の原っぱにテントがいくつも張られた。夏休みを利用して運動をうやむやにしようとした大学側に対する抗議の意味合いもあった。そう、あそこにズラッと並んでいたのです。

当局

大学、もしくは警察のことを言う。特に、体制を敷いてくる諸悪の根源であるように語られる。

東大新聞

東京大学新聞。1920年創刊。学生運動とも歴史をともにしており、その縁もあってか、この前の五月祭でも全共闘に関連した企画を行った。

登録医制度

インターン制の改革案として厚生省が提案してきた制度。タダ働きに近い「登録医」への反対の声から、68年の闘争は口火を切ったのである。

時計台放送

毎日定時に、安田講堂に立てこもっていた学生たちが放送を行っていた。安田講堂陥落の際にも放送を行った。

今井澄^{きよし}氏によるものとされる最後のメッセージは「我々の闘いは勝利だった。全国の学生、市民、労働者の皆さん、我々の闘いは決して終わったのではなく、我々に代わって闘う同志の諸君が、再び解放講堂から時計台放送を真に再開する日まで、一時この放送を中止します」というものだった。

トロツキスト

レーニンの後継者には世界革命を唱えるトロツキーと一国革命を唱えるスターリンがいたが、後継者争いでスターリンが勝利した。(トロツキーはアイスピックで使用者に暗殺された。)日本の新左翼はスターリン主義を攻撃し、トロツキーの思想に共感した者が多かった。

た。一方この言葉は、代々木系の学生が新左翼の学生を揶揄するときにも用いられた。

ナンセンス！

無意味という意味。相手に「反対！」であるとき、こう言う文化であった。

日大闘争

日本大学では、22 億円の用途不明金があることが明らかになり、学生が会頭・古田重二良^{じゅうじろう}に抗議、1968 年 5 月 27 日に日大全共闘を結成した。また利益追求のため大学施設のキャパシティーをはるかに越えた学生を入学させていたため、授業のために教室に入れないという状態であった。このような大学側のずさんな経営も、運動が興隆する一因であった。右翼学生や体育会、暴力団との激しい抗争も大きな特徴であった。

日米安保条約

独立後の非武装日本の安全保障のため、米との同盟関係を組み、米軍の日本駐留を認めた条約。60 年に日本の権限強化のため、この条約を改正（強行採決）しようとしたところ、国民運動が発生した。「アンポ・フンサイ」って。

日共

日本共産党。戦前からあり、歴史は古い。スターリン批判までは反体制派の主流派であった。その組織のヒエラルキー性を嫌う左翼も多い。

ノンセクト・ラディカル

セクトに属さない過激派。全共闘時代は、政治的な思想のない人も運動へと参加できる流れだった。ノンセクト・ラディカルが存在が運動の拡大を可能にしたのである。

パクられる

逮捕されること。今でも使う？

バリケード

運動の一環で建物を占拠する際、敵の侵入を防ぐ目的で作られた「壁」。机・ロッカーを積み上げて作られた。バリケードの中は学生たちによる（青春の場に相応しい）自治空間が広がっていたが、自給自足の生活空間としては大変なものだっただろう。山下洋輔氏^{ようすけ}（ジャズピアニスト）が早稲田大学構内のバリケードでピアノを演奏した話が有名。

ピケ

スト破りの監視役のこと。学生運動は闘争である。バリケードは要塞であり、敵が来ないように見張ることが必要であった。

ヒッピー

1960年代のアメリカで、既存の価値観に反撥した若者集団。セックス・ドラッグ・ロックンロールという開放的な文化が象徴的。ヒッピーの自由な価値観や文化が日本の若者にも大きく影響を与えた。英米文化の影響力の大きさは、The Beatles の来日やその後の Led Zeppelin の流行を考えれば、よくわかる。

日和る、ヒヨる

日和見主義からの転用で、一般的にはご都合主義的に闘争から逃げることに使う。ただし、根から運動にコミットしていない人に対して「あいつはヒヨっていた」と使うこともある。

ビラ

今でこそ印刷機があって便利だが、当時はガリ版を利用して、製版は手作業でやるすごい作業だった。(それこそ徹夜でやっていた。) こういった文化の下では「職人」はもちろん出てくる。(ニコニコ動画のアスキーアート職人も同じ?)

山本義隆は東大闘争の後に、当時印刷されたビラを集めて国会図書館に寄贈した。

ブント

同盟・連盟という意味(独 Bund, 英 band)。バンドと同じ意味だと思って良い。武装革命方針を放棄した共産党から分裂して結成され、60年安保の際には主流派(反日共系)を指導した。

ベ平連

「ベトナムに平和を! 市民連合」。反戦作家小田実氏の呼びかけで、1965年に始められた市民運動。

ポポロ事件

1952年、東大構内で学生劇団の劇の観客に私服警官が導入され、一悶着あった事件。「大学の自治」のあり方全般が問われた。現在でも、早稲田ビラ撒き逮捕事件であるとか、法政大学のタテカン検閲の反対闘争であるとか、「大学の自治」にまつわる問題は解消さ

れていない。

マルクス主義

マルクスは左派による理論武装の教科書になった。資本主義のメカニズムを分析した『資本論』は世代を超えて読まれている。最近、^{あきひろ}的場昭弘氏が『超訳資本論』（祥伝社、2008年）を出したことが象徴的。マルクスは左派勢力以外にも広く読まれ、その後のアカデミズムのある種の「共通言語」となった側面もあることも見逃せない。

^{みしま ゆ き お}三島由紀夫

69年5月に駒場の900番教室で東大全共闘と対談（三島一人 vs. 全共闘学生大勢）。70年11月25日に市ヶ谷で事件を起こし、自決。この時、一緒に自決した^{まさかつ}森田必勝の死をきっかけに、^{いつすいかい}民族派団体一水会が結成された。

民主化

大学の民主化要求が唱えられた。当時、大学という組織が学生に開かれていることが民主的だとして、大きな価値が置かれた。

民青

日本民主青年同盟。共産党の下部組織で、キャンパスで青年を中心に組織されている。東大紛争時には全学バリエード封鎖には反対し、全共闘とは対立した。

連帯を求めて孤立を恐れず

「力及ばずして倒れることを辞さないが、力を尽くさずして挫けることを拒否する」。有名なスローガン。

よど号ハイジャック

1970年3月、赤軍派が旅客機「よど号」をハイジャックし、北朝鮮に向かった事件。たったの9名でハイジャックが可能なのかという衝撃は世界中に広まった。その頃のメンツは北朝鮮でまだ生きている人もいる。

6

いま、東大生にきく

〔学生向けアンケートの集計結果〕

対象 東京大学教養学部 の 1, 2 年生

有効回答数 43 件

凡例

① 選択肢	回答数 [件]	割合 [%]
の順に表示している。		

- ・ 欄外に、「その他」の詳細および回答者の自由なコメントを付記した。

問 1

40 年前に、学生運動が大きな高まりを見せました。学生運動、全共闘運動に対してあなたが持っているイメージ、評価はどういったものですか。

① 学生運動を行った当時の学生の姿勢は、大変評価できる	6	14%
② 学生運動を行った当時の学生の姿勢は、やや評価できる	20	47%
③ 学生運動を行った当時の学生の姿勢は、あまり評価できない	13	30%
④ 学生運動を行った当時の学生の姿勢は、全く評価できない	3	7%

問 2

問 1 で①あるいは②と回答した方に聞きます。どういった点で、学生運動に肯定的なイメージを持っているのでしょうか。(複数回答可)

① 学生の側から、当時の社会や学生制度の矛盾に意見を発したから	17	40%
② 学生が団結し、大きなエネルギーを持っていたと思うから	11	26%
③ ベトナム戦争反対や、平和を求めているから	3	7%
④ お祭り騒ぎのような一種の楽しさを感じるから	5	12%
⑤ 学生たちが自分自身のあり方、生き方をまじめに考えていたから	6	14%
⑥ その他	2	5%

- ・ 何はともあれ行動した。
- ・ 今の学生はあの形で爆発しないだろうから。

問 3

問 1 で③あるいは④と回答した方に聞きます。どういった点で、学生運動に否定的なイメージを持っているのでしょうか。(複数回答可)

① 活動そのものが暴力的であったから	10	23%
② 大学の授業を妨げたから	4	9%
③ 一部の学生のことであり、全体の総意ではなかったから	8	19%
④ 東大生という特権意識に根ざしたものだったから	0	0%
⑤ 大学の施設、文化財を破壊したから	1	2%
⑥ 連合赤軍などの過激派が出現するきっかけとなったから	2	5%
⑦ その他	3	7%

- ・ お祭り騒ぎみたいだから
- ・ お祭り騒ぎにすぎないのに、「大義」をはりつけ、自我を欺いたという印象があるから。
- ・ 笑い要素がない。

問 4

今一番打ち込んでいることは何ですか。(複数回答可)

① 部活動・サークル活動	18	42%
② アルバイト	7	16%
③ 趣味	11	26%
④ 資格のための勉強	4	9%
⑤ 大学における学業	21	49%
⑥ 恋愛	4	9%
⑦ その他	8	19%

- ・ ゼミと夢
- ・ 自分における勉強
- ・ 普通の人として生きること
- ・ 駒場祭
- ・ いろいろなイベント・講演会に参加する

問 5

現在、東京大学に通っていて日々の生活の中で感じる不満や矛盾はありますか。

① 全くない	14	33%
② ある	26	60%

- ・授業をもう少しおもしろくしてほしい
- ・授業のあり方がよくわからない
- ・カリキュラム的な（教養学部の是非について）
- ・教養が足りない
- ・大学のシステムが、様々な学び方に対応した柔軟さに欠けている。学生も linear なものの見方しか持てなくなっている。
- ・情報が、黙っていても自分が処理できる以上の量が入ってきており、自分が行動の基準にする情報が不安定なために、自分も信念のようなものが持ちにくい。（したがって、強い主張をしにくい）
- ・1日が24時間しかないこと。
- ・勉強しなきゃと思うができない。
- ・履修とか。
- ・学費が高い。
- ・時間がない。
- ・進学振り分け制度によって、学生の学ぶモチベーションが低い。
- ・4学期が専門的すぎる。もはや教養学部じゃない。
- ・日々 Hard.
- ・あまり満足感がない
- ・学生が授業を「必要」としていない
- ・現実の政治問題に興味を持ってる人が少ない。（平和問題とか労働問題とか）
- ・いずれ自分に寿命が来ること。
- ・朝早すぎる。
- ・女子トイレ・更衣室が少ない。
- ・東大の環境を（自分も他の人も）活かさきれていないと感じます。

問 6

問 5 で②と回答した方に聞きます。その不満や矛盾について、あなたならどのように対処しますか。（複数回答可）

① 不満は感じるが、我慢できる程度なので我慢する	10	23%
② 不満を感じているので、自治会などへの参加を通して改革を目指している	0	0%
③ 40 年前のような大きな学生運動の波があれば、そこで主張する	2	2%
④ そもそも解決できるような不満、矛盾ではない	11	26%
⑤ その他	3	7%

- ・まったり生きる。
- ・そういう問題があるんだってことを少しずつでも語っていくしかないと思う。しかし、東大にはまじめに話のできる場が少ない。ゼミとか、ともすればコンパとか…。
- ・できる限り自分から動いて、環境を享受できるようにしたい。（人との交流の輪を広げる etc.）

叫びと反響の記録

↓朝日新聞：1969年1月18日

ガス弾か催涙液 死者出さぬ攻略に苦心

警視庁

「実力排除」を決定した警視庁は、十六日夜以来、機動隊長らを集めて、何回も「安田トリデ」攻略の図上作戦をくり返した。講堂内に二トログリセリンはないことがわかり、ホツとしたものの、講堂内にはダイナマイトや危険な薬品、六時間は投擲けられる石と、古タイヤのチェーンでつくった石弓などがあることが確認され、これまでにはない強力な抵抗が予想されると、攻め方に苦慮している。

治安当局がいちばん警戒しているのは、衝突で死者を出す事態だ。警察側は死者を出さないことはもちろん、学生側に死者が出てもいかに影響が大きいとみ、「死者を出さぬ排除」を目標に、二段構え、三段構えでさまざまな「秘策」をねらっている。

まず「催涙ガス弾」。これまでもデモ規制や、学生運動のバリケードを排除するさいに使われ、威力を見せた。

だが安田講堂では、九日の機動隊入りでガスの「洗礼」にこりた共闘会派は、安田講堂のほとんどの窓にベニヤ板を張りつけた。遠くからガス弾を発射しても窓を破れず、近づけば屋上から投石の雨が降る。それにガス弾が火

を呼んでベニヤ板に燃え移り、火事になるおそれもある。かりにガス弾がベニヤ板の窓を突破したとしても、なかのガソリンなどに引火すれば大変なことになる。

それだけに警視庁もガス弾使用に慎重にならざるを得ないようだ。

ガス弾が使えない場合、警視庁が考えているのは「催涙液」。放水車による催涙液の放水は、これまでも羽田や佐世保、成田で使われているが、時計合に向けてどれだけ効力を発揮するか。威力の強い消防ポンプ車の放水で窓のベニヤ板を吹き飛ばしておいてから、催涙液を灑しこむという戦術も検討されているようだ。

「カケヤ部隊」というプランもある。安田講堂は、正面の防備は堅固で、ミソもあって攻めにくい。が、裏側は弱い。一階の窓も低く、機動隊が近づくと出て来れば、カケヤでいっせいに窓をぶち破って突入—というところもありそう。ただ、その場合、屋上から石や危険物が投下され、警察側に被害が出るおそれがある。

機動隊は上空からヘリコプターで屋上にガス弾を撃ちこんだり、空陸一体の作戦で講堂に突入をは

↓東京大学新聞：1968年11月11日

ストの中の駒場祭か

予算面では困難な状況

駒場祭は二十二日（金）から三日間開催される予定であるが駒場祭委員会を中心に着々その準備が進んでいる。

十月三十日（水）駒場祭委員会は第六委員会との団交を行なった。大学からは寺田透教授のほか五名が参加したが駒場祭委は①学部当局は駒場祭委を駒場祭をになう唯一の交渉団体と認めよ②駒場祭委

に届け出た団体はすべて駒場祭の参加を認めよ③本年度の第十九回駒場祭は二十二日から二十四日までの三日間とする（二十一日午後は準備期間として保障）④教養学部は以上のことを大衆団交の場で認めよの四項目をつきつけた。しかし学部側は現在スト中で駒場祭認めないが「勝手にやらせよ」という意向らしい」と駒場祭委

は語っている。今後は学部の代表との団交を追求して行く。
スローガンとしては①学部当局は四項目要求を団交の場で認めよ②共通規則遵守を駒場祭実現の許可条件とする学部の申し合せ方式拒否③学部当局は駒場祭規制による破し完全な学生の管理運営による駒場祭をかちとろう④国大協路線打破⑤学部共通規則撤廃をかち

とらうの五項目を十月中旬にきめた。
プログラムは十二日にできる予定であるがクラスに來ている人が少ないので販売ルートなどかなり困難でまた例年同窓会から十万円出ているが今年はスト中なので出してくれなく、大学側が例年出す三十万円も期待できないことなどから、財政的には厳しい状態。

企画は委員会企画とクラス企画五十八、サークル企画八十余りが出ているが委員会企画はサークルクラスの集約の上で①反戦、反安保闘争にむけて②大学の教育の改革③現代の文化運動を三本柱にシンポジウムを予定している。

クラス企画は質的には例年より向上しているが東大闘争と出席数が少ないため大衆性が欠けており①東大闘争②大学教育問題③マスコミ④安保沖縄の四つのブロック活動を通じてクラスに働きかけて行く。

また、サークル企画には趣味的なものに流れがちだから、サークルシンポジウムによりこれを克服して行くことが計画されている。

入試問題

首相、構内を視察

「授業再開の可能性も」



荒れた東大を見る佐藤首相

(左へ返国文相、加藤孝典代行)

[illegible]

た。一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、百。

「これからは学校制度の刷新、
全学改革と緊要視せ、中教審の
結成等と出る」と決議した。
「安岡課長の被擯は、いへん
左派側には直接関係ない上、あ
た、今後大衆運動と大衆結集を推
す、我々大衆右翼運動の動きをた
つて感謝し、」

[illegible]

あるが、作樂院の東京本部は、
はなはだ「能い」音楽家も出っ
て、活動的である。

櫻井宮内卿は二十年前の初
著「詩と文」の序に記した。

一、大衆音楽は人びとに喜ば
れるものである。その性質上、
いかに流行すると思ふ、思ふ
やうに、なんどか「二重」に、
「三重」に流行する。流行する
やうな作ればいけない。流行
するだけではない。思想を伝える

「こんな姿に……」首相絶句

佐藤首相は二日昼間、東京の状況を視察し、二、三に回参した。

伊田博次郎が車から降り立、た佐藤首相は国議で後代に伝えられしはばいほう然としてよろしうて被^レつて議院の承し方を見よと上げた。桂^ノうで議院を問ふと、上がらぬとこで、ボク、トか、わらうといふ方を取り出さ、わらずに内閣がのやける理にむかふといふ、と云へり。此口頭、に調査を、狭い情報に於かし、た、り、真^ニ問答中、佐藤首相は

[illegible]

「……それは、おなまの娘さんか？」
「はい。藤原をわがしに」
このふたりの門下者の王宮御用品
頭、清和に聞かれた後藤朝臣は、
里津代村で半部郎中、六条通は
それほどのありませぬ。彼等は
の段屋町に居るだけで、あつて
はないです。學生へのみせめめ
のために、わざと汗ばすに、あ
つてもありません。理髪師も
機を回して出来るといいます。

と聞ても解り易くて万端にいい
た。しかし河原はその説明によらな
「ふん」とか「あゝ」とかと答ばかりい
求めて居るだけだ。法師のうづやうを
口で、半信半疑な第四卷の巻末まで
見ても、あまりのひそかに通つてしま
はぬといふ。これこそ、物語上のこ
分の現象を結んで、彼大空に出た如
佛の現れ、神国かいわいの平土へ
の夢を導くことになりしてゐるが
部には附いた。

東大封鎖すべて解除



並列しての講堂内から両手をあげて警官隊に連行される学生たち—19日午後3時40分、東大新館講堂大ホールで

入試決定へなお曲折

大学側、強い実施論

政府・与党見送りに傾く

安田講堂も制圧

三七四人の
学生を逮捕

22日まで駐留 機動隊

世論見て政治判断

政府

↓ビラ：1968年5月2日

68.5.2-

58.5.2-
50
周
祭
禮
堂
富
導
入
も
阻止
す

在研究C等及C等1、

は、阻害の嫌疑あり。
昨日、一連日の五月革命党ハートロール実行組上斗等が、一方の警察
署で押入れに入れまいと争ひとして所前門に斗い掛かりしことを報告した
とい。と同時に、乙名の被害を不当にも逮捕されたことに行き、時勢激
変に、その責任を追求しうけかねない。大河内校長、さびに増生
委員等の数人まで、学生と一切の接し合ひを拒み、23日、24日の
本邦と朝鮮の斗争事柄の調査会も共に同じ態度がある結果を示さな
れた大増進局に行き、5月同義日、若々は朝鮮社会を訪問し抗議すること
にした。警備門に近づき、増進デモを行い、管内警察を多数の学生
暴行と共に西向きさせた。朝鮮石の上にはるかなる意味、1度警察署
近辺日は朝日、五月革命党ハートロール阻止上の運動家、1度大増進
局呼ぶたれまうに斗う五同義の實踐として多くの学生市民の参加
集めた。本邦において、政治的運動や一切禁止され、また、学
校でも、立て食、この配布にいたるまで許可制であり、警官は本邦
内部を一般の市民を進行していきの口實に日本橋にハートロールと
いふ。そのような本邦の不都合な条件を見限り、ヤクザにのりたる大
増進とあるが同義党ハートロール阻止斗争を開始したこと、本邦
警察にとあるが同義党ハートロール阻止斗争を開始したこと、同時に、
おける学生運動の更なる前進を図り闘いをくぐらわす。と同時に、
場においても本邦の警察と連携しつつ政府、警察当局一体となつて
不愉快感の改善を期せようといふことを確信している必要がある。
今回本邦警察が学生運動の弾圧として、反動斗争と内部から攻撃
していくものとしてあるより、若々は管内斗争を反動斗争と捉へ
てはいかぬ。相対して、管内斗争とも勝利するといふことを確
信しなければならぬ。

(以下略)

人ら30日回遊してボートをばりの坊切者運送と運送し、校に二つ

[illegible]

松枝義會戰反

(PR 25)
(11月25日)

530 学生 也木ト 起ち上ろう

1423

69.2.0+7

加藤乙未出此！

全教官弹劾！
授业再决阻止！
加藤体制打倒！

人は無不これ 此等の災厄はゆる所ありとあらうが、
 開土の難料にひきずり出されるにやう。空田藤屋を著し、
 野矢の、この意圖の計事の如きとして、我々は現存する。我々は不才の、
 人を驚くまでも、と教會に食うてゐたり。彼等の批判しつくして見たらうと、
 とりかかれ一番よく知つてゐるはず。

卷之八

[illegible]

২০১৯ চন্দ্রাব্দ

[illegible]

1. 凡在本行开立存款账户的客户均可申请。

[illegible]

INDEPENDENT

[illegible]

斗爭者連合

↓ビラ：1969年2月22日

429

69.2.22

勝利のためのシンポジウム

一再び闘いの原点を向う一 (その2)

2月22日 201 番教室

P.m. 1:00 ~ 5:00

出席；助手共闘 (最首悟氏)

「科学者運動について」

全斗連 (文系の人の予定)

「院生にと、この東大斗争」

主催；SⅡⅢ斗争委員会

後援；駒場共闘会議

現在、東大斗争圧殺にキャウホンを打つ日共＝民青諸君が当局と一

体となって、学園正常化策動を押し進めんとしている。

東大共闘が真に向願としてきた「学内研究の現代社会に於ける矛盾」をネジマゲて、彼等のミューチワリンナ科学論を媒介としてつ、自主記産運動という形において彼等の学園民主化運動なる路線を貫徹せんとしている。

我々は、東大斗争が暴露した東大存在そのものの矛盾、その矛盾の解決のために我々は何ぞいかならねばならぬか。その原理論とでも言うべきものをさぐり確立するため、我々はこのシンポジウムを設

定した。

東大斗争を長期にわたって主体的に相うために、そして内実のね

架を勝ちとるために、全ての学友の結集を期待する。

原点を見つめることにより、この斗争を更に深化させよう。

8

山本義隆のアクチュアリティ

近藤 伸郎

山本義隆は東大全共闘のリーダーであった。我々の企画は「全共闘と今」と銘打っているので、「彼の今」についてまず語りたい。

彼は現在、駿台予備校で物理講師をしている。人気講師で、夏期講習の「東大物理」は満員になる。彼の著書、『新・物理入門〈物理IB・II〉』（駿台文庫、1987年）は、難しいという意見がある一方で、物理が根っこから理解できた、学ぶことの面白さを知ることができたという声もある。駿台含め、各予備校は学生運動経験者が多く流れ着いている。そういった講師の内の一人は「山本義隆という存在は天然記念物ものだから、一回授業に潜っておけ」と生徒に言ったそう。彼の授業は物理をアリストテレスから始めることで有名なのである。

素粒子の研究をしていた彼は、研究室には戻らず、駿台予備校という在野で科学史の研究を続けた。そうして生まれた『磁力と重力の発見』（全三巻、みすず書房、2003年）は第1回パピルス賞、第57回毎日出版文化賞、第30回大佛次郎賞^{おさらぎ}を獲得した。大佛次郎賞の際には、選評者に学生運動当時「体制派」であった養老孟司氏がいた。授賞式で、養老氏のコメントはしぶしぶな態度をとったらしい。このことは面白い。

彼は、雑誌やテレビ等含め、インタビューは一切断っているそうだ。立花ゼミでもインタビューを試みたが「色々あって、取材は断ることにしているのです」と言われてしまった。けれども、彼の著書である『一六世紀文化革命』（上下巻、みすず書房、2007年）には、喜んでサインをして下さった。嬉しい。

現在、大学生のネットワークで、『磁力と重力の発見』（全三巻、みすず書房、2003年）の読書会を行っている。第二巻「ルネサンス」まで進んだ。その中で、山本義隆自身に関する話のやり取りがあった。「現代の若者から見た学生運動」を考える際、非常に示唆に富んだものだったと思ったので、その部分をまず掲載しておきたい。

参加者

学生K：東京大学教養学部文科I類1年（この記事の筆者）

学生W：慶応義塾大学文学部人文社会学科4年

学生O：慶応義塾大学経済学部経済学科2年

K 『磁力と重力』の科学史を追うことでどういう現代性、アクチュアリティを得られるのかという問題と、僕がもう一つ聞きたいのはやはり政治の方の問題ですね。山本義隆先生がこの著書を書くことのメタ的な意味が非常に大きいです。

W 政治の問題はあまり語られていないよね。

K 語られないことに意味がある。ただ、当時の学生運動の用語が本書にも散りばめられています（笑）。「シンパ」とかそういうものです。あと明確に書かれているのが、スコラ学が「体制」だということ。職人が行ったのは体制側を打破する階級闘争だったのだというようなことが書かれてある。

W スコラ学者に厳しいのは、学生運動の名残で、アカデミズムの学者を倒せというベクトルが反映されているのかもしれないよね。

K 学生運動をしたモチベーションや誠実さは、学問や人生全体に反映されていますよね。彼が当時、一番悩んだのは自己矛盾であったはず。現実と隔離された研究室で研究をする自己矛盾。それを原動力にして学生運動をした側面があるはずです。そういう部分が著書の内容にも反映されているということになりますよね。16世紀の職人たち対スコラ学者という構図は、60年代の学生たち対丸山真男を代表とする研究者というのとパラレルだったのかもしれませんが。そこを本人が語らないし、おそらく語ってしまっただけなのでしょう。けれども、僕たちが若者としてそういう見方をすることが、ある種のアクチュアリティになると思います。

W そこ面白いね。

K そうなんです。それで、『一六世紀文化革命』も「革命」なのです。職人たちがアカデミズムにとらわれることなく自分たちの経験と手による技によって、真理を見出し、時代のエートスを変えていった。それに、当時の16世紀の独特の時代背景があるのですよね。印刷革命とか。それが、17世紀になると、職人の技が知識人層に吸収されていく。その辺りから、僕が思うのは、やはり最後は＜知＞に回収されていくのかということ。「知は力なり（ペーコン）」ではないけれど、＜知＞というのが中心的な価値であって、もちろん、そこに革命を見出すには外部の周縁的なエネルギーが必要なわけだけれども、結局、中心に回収されることで、体系化され、広がっていくのです。16世紀も現代もパラレルなのかな、というふうに思います。研究者が象牙の塔に籠っているだけではダメ、現実世界に出ないというのは、中心から周辺にベクトルが向く行為ですけども、やはり最終的には象牙の塔、中心に回収されていく、と個人的には思いますね。知や学問に対する形而上学を、山本義隆先生をケースワークとして、様々に学ぶことができるのです。

W ＜知＞は何のためにあるのか、＜知＞の営みって何を目的とて行うのか。象牙の塔の中で自己目的化していいのか、現実社会の中で一定の役割を果たすことが必要なのか。

K あと、誠実さとは何なのかということですね。当時の学生運動は、誠実にやればやるほど惨めな思いをすることになります。山本義隆先生ってものすごく誠実な方ですよね。だから、本書の後ろの方でもそうですけれども、孫引きに非常に厳しいですし（孫引きした部分はそう書いてある！）、あと科学史の学者にも「デッサ・ポルクを読んでいるにも関わらず、発見できていない」と攻めていますね。

W 自分が分かっていないことに関して、はっきり分かっていないと言うよね。クザーヌスのところの議論でも、最初の部分でカッシーラの部分を引用して（彼、カッシーラも訳していますよね）、「思想的な意義を中世に置くのか近世に置くのかは私の知見を超えているので、そこは保留しておく」と。非常に良心的ではあるなというふうに思います。傍か

ら見たら十分な知見を持っているのに、とても抑制的に語っている。それでいて、しっかり思想的な側面もまとめつつ、科学史について述べている。こういった文理横断型の仕事をしているのはすごいなと思います。特に科学という自然科学の問題と政治や歴史、思想という人文社会的な問題はつながりがあるにも関わらず、なかなか両者が越境できない。科学というのはなんだか文系にとっては別世界のような近寄りがたさがある。しかし、近代になると科学を促進したり、保護したりしているのって国家でしょ。科学の政治性ってものがあまり意識されないことにすごく大きな問題があると思うのだけれど。原爆といった兵器やら原子力の問題も、科学の社会的側面が（深いレベルで）あまり顧られないからこそ解決の糸口が見えないわけだし、技術倫理学等の応用倫理学にもつながる根っこを持っているのではないかな。やはり、科学の政治性というのは、すごく大きな問題だよ。ね。そういえばハーバーマスの『イデオロギーとしての技術と科学』なんて本を書いていませんでしたっけ、平凡社ライブラリーで出ているような。日本でも物理学という学問的バックグラウンドを持って、思想や歴史に言及できる人が「在野」にいるというのは意味がありますね。普通に進学していれば、普通に物理学をテーマにしていたのだから、16世紀科学革命や、磁力と重力の歴史を研究対象として見出したのは、面白いですね。いずれにせよ近代において科学は人間のあり方を大きく規定した面があるから、科学的存在としての人間というものを考察することは重要であるとまとめておきましょうか。話がながくなってしまいましたが（笑）。

K なるほど。何と言うか、研究者の研究対象はその人の人生と切り離せない。運命的なものがありますね。

O 僕も「愛と対話」を専攻にしたいのは、そうですね。人生とつながっている。

K 関心がどういうところから湧くかという問題なのでしょうね。Wさんが将来何を専攻にするのかが非常に楽しみです。

一同 （笑）

（中略）

K 山本義隆先生がなぜ科学史に行ったかという話があります。これは、人から聞いた話なので本当かは分からないのですが、先ほどWさんが話に出したような「科学的存在である人間」。それについて彼は獄中で悩んだらしいです。それで、ルカーチを読んでいた。ルカーチから、「科学的存在である人間の起源」という問いを得た、と。それで、素粒子の研究をしていた彼が科学史にいった。理系から文系への大転換。そここのところがすごいと思いますね。

W 日本物理学にとっては、ものすごい損失だったと思うけれど、哲学系の人から見たらものすごい財産だと思いますよ。だって、こんなの文系じゃなかなか書けないでしょ。理系じゃないと理解できない問題・評価がしにくい知見というのは多いでしょうし。

K 現代で流行の、文理を超えたアプローチですね。

W 在野でやっていることにすごく意味があると思う。クザーヌスのように、本職の教授じゃなくて仕事をしながら研究をやっていた人を褒めているよね。そういう部分は自分と重ねているところがあるのかなという気がするけれどね。実務を持ちながら研究する人たちに対してものすごく好意的でしょ。日中は社会の中で自らの仕事をこなして（クザーヌスなら教皇の使節だけど）、夜やその合間に思索にふける。学者というものが専門職化している中で、こういったスタンスで学問に携わる人がもっといてもいいのではないかなと

思うのですが。

K 『山本義隆潜行記』に書いていたのですけれど、獄中の山本義隆先生に、どこかの教授が「君ほど自然科学ができて、マルクスはじめ社会科学にも精通している人はいない、それを活かして何かすればどうか」と言ったそうです。

W 獄中に？

K ええ。獄中に会いに行って、面会ですね。こういう話って「なぜ今科学史なのか」ということに関して、大きなヒントとなりそうですね。

W 今だと、生命倫理とか環境倫理というコンテキストでも問題になってくるよね。さっきも言ったけど。科学というものが価値や主観性を必然的に破棄してしまったから、いかに生きるかとか、いかに政策を作っていくかという問題が、科学の側から語られなくなっちゃったというところがあるよね。方法論としてはそれでよかったんだろうけど、科学をとりまく問題というのは価値判断や主観性を含み持ってしまうから難しい。

K 科学万能主義の行き詰まりは『一六世紀文化革命』の最後に載っていますね。科学をもう一度見直さねばならない、と。

W 科学万能主義の反対で科学相対論というのもよく聞くけど、極端な科学相対論を言っても仕方がないのだけだね。科学が認識論の一つのパラダイムじゃないって風に言っただけで、自分たちは科学の中で生きていくしかないし、それが一つの力だから。何ができて何ができないのか。できないとしたら、どのように補っていくべきなのか、そもそも補えるのかって。アクチュアルな科学理解をしなければならないのだと思うけれどね。話は飛ぶけど駒場には科学史・科学哲学専攻もあって、文理両面から科学という営みが考えられておもしろそうだね。宣伝みたいになっているけど、私は他大の部外者だから（笑）。そういう幅広さを持っている駒場って、外部から見ていると結構魅力的だよ。

最後には駒場の教養学部の話になっている。

こうして見てみると、科学史に関する彼の著書にあたるだけでも、そこには彼の人生が投影されていることが分かる。学生運動と現代的な問題ということの結節を考える際にも有効かもしれない。

予備校にお世話になった筆者としては、その存在に言及せざるを得ない。予備校というのは、様々な意味で不条理な空間である。落第という敗北を経験した浪人生が、華々しい大学生を尻目に、またどこか浪人チックな予備校講師たちとともに、一つの授業という場を形成している。生徒も講師も安定した社会的立場を持たない存在である。「在野」で果たした彼の研究は大学アカデミズムにある種のアンチテーゼを掲げているだろう。周辺のエネルギーというのはものすごい。そして、予備校講師とは「職人」なのだろうか。

最後に、今となっては暗い(?)学生運動家としての彼の顔も、当然ながら語る必要がある。とくに「自己矛盾」という側面から語ってみたい。彼は当時、院生であり、京大の湯川秀樹の研究室に国内留学しており、湯川氏からは「将来のノーベル賞候補」と目されるほど優秀であった。しかし、東大で全共闘が結成されたのを機に東京に戻り、以後、研究室に帰らないことになる。組織としてのヒエラルキー性を認めない全共闘にトップはいないものの、彼は「議長」という名で次第にリーダー的存在となってゆく。

真摯な彼は多くの「自己矛盾」に悩んだだろう。彼の抱えた矛盾はまずもって研究室の壁であった。世の中の真理を発見するための学問は、外の状況から隔離された研究室で行

われる。大学アカデミズムのあり方は全共闘運動で真っ先に問われ、今でも問われ続けている問題の一つである。彼の「自己矛盾」は、他にも、暴力に対するスタンス、全共闘という組織原理、東大というもの、世界情況の中での日本など多岐にわたったことだろう。

ふたつに引き裂かれた論理は、闘うわたしたち主体をも引き裂かずにはおかない。しかし、自己分裂の危機を、わたしたちは逃避することなく正面から受けとめたことを、いくらかの自負をもって今、いえるのだ。いくつかの矛盾した問いと答え——それはともすれば闘いから後退しようとするための口実ともなる危険性を孕んでいた。しかし、分裂のあとで弱々しい自己を乗り越えることによって、自分を新しいものとして創出しようし、自己変革も可能になる。困難な状況がわたしたちを鍛えるのだ。「ひとりで考えこんじゃあかん。スクラム組んで闘いながら考えるんや。闘いながらのり越えていくんやで」（筆者注：山本義隆の言葉）

（最首悟『山本義隆潜行記』、講談社、1969年、130頁）

ここでは、自己矛盾ということに関して、一貫性を保つ（保守する）と同時に変える（革新する）ということが説かれている。「自己矛盾」である。しかし、矛盾は「止揚」される。そうして、生まれたものを新しいものとし（成長物語）、しかもその手段として、スクラム、つまり闘うために連帯することがここでは説かれている。これは全共闘の原理を大きく示唆しているだろう。

彼の「自己矛盾」は潜伏活動中にピークを迎えるように思える。彼が逮捕される直前の時期である。逮捕状が出てからは、気軽に外を出歩くわけにはいなくなるのだ。彼はデモに参加して「共闘」することはできなくなり、潜伏活動を始める。表向きはトップを認めていないとはいえ、彼は東大全共闘のリーダーであった。リーダーだけれども外に出られない、責任感の強い彼はその重圧に押しつぶされそうになったに違いない。それでも、彼は官憲の網を突破して集会に参加し、その後、危機一髪で脱出するという曲芸を行う。「日比谷、二・二一集会」をはじめとし、このようなことは何度も続いた。私服警官も多数いたが、それでも全共闘に共感する市民は多く、彼を逃す手伝いをしたのである。集会での人ごみは官憲に対して文字通り壁となったのだ。だが、とうとう、1969年の9月5日、「日比谷、全国全共闘連合結成大会」で彼は逮捕される。こうして、全共闘のリーダーであった彼は、その結成宣言をすることはなくなってしまった。

彼は出所したあと、「68・69を記録する会」を作り、当時のビラを集めて作った『東大闘争資料集』（全23巻、1992年）を国会図書館に寄附した。彼の意図はどうやら、歴史学にとって必須である一次資料を作り出すことらしい。学生運動史はまぎれもない歴史なのである。このような姿勢から、彼の持つ闘争に対する普遍性が感じられるだろう。

彼は取材を拒否し、約40年間、学生運動用語で言えば「総括」せずに沈黙を守り続けた。だが、2007年の10月に渡辺^{ひとみ}眸さん（全共闘の一員として、バリケード内を撮影した。現在、写真家。）が出した『東大全共闘——1968-1969』（新潮社、2007年）に、彼は寄稿している。こうして、沈黙は破られたことになる。彼がどのように当時を想い、今を想っているか、その本当のところはなかなか分からない。筆者はあくまで自分の思うところを記事にしているに過ぎない。だが、彼の中で学生運動の経験がアクチュアルなものとして今でも生き続けているということは確かなはずである。（彼は沈黙の裏側で、裁判の証人として出向いたりなど、様々な「活動」をなさっているらしい。）そして、彼という存在が現代において大きなヒントとなるということも確かだろう。彼はずっと闘ってきた。真摯な自分と。そして、これからも闘い続けるのだろう。闘いはこれから。

9

今、表現することとは

近藤 伸郎

2008年9月15日、池尻大橋で学生がシェアしている「ハウス」と呼ばれる場所では対談を行った。内海信彦（美学校・河合塾等講師）や表三郎（駿台予備校講師）という学生運動経験者に予備校で教わったもしくは教わっている人たちによる対談となった。そもそもの対談のきっかけは、近藤伸郎が中島晴矢のパフォーマンスを見て、その秘密を知りたくなったことであった。内海信彦氏の主催するイベントで、中島晴矢は全裸にビニール一枚の格好でサイレンを鳴らしながら突入し、メガホンをもって「演説」を行い、自らの身体に根ざした安田講堂を爆竹で爆破する“全裸連陰核派”という独特なパフォーマンスを行う。

現代だからこそ成立するある種の前衛芸術（ダダイズム？）と言えるのかもしれない。なぜ彼は表現することにこだわるのか。学生である僕たちが「今」と「昔」をどう考えるか、運動や表現とは何なのかということについて、じっくり語り合う1時間になったと思う。

参加者

司会: 近藤伸郎（こんどうのぶろう 東京大学教養学部文科I類1年、駿台大阪校卒、立花隆ゼミナール。表三郎の教え子。）

学生N: 中島晴矢（なかじまはるや 法政大学文学部1年、美学校・絵画表現研究室所属、麻布高校～駿台御茶ノ水校卒、「世界陰核戦争宣言」「男根崇拜のポルカ」「偽装建築バカハウス」などのパフォーマンスを行う。内海信彦の教え子。）

学生S: 榮 龍 太郎（さかえりゅう たろう 駿台御茶ノ水校在籍。内海信彦の教え子。）

学生O: 岡田祐哉（おかだ ゆうや 慶応義塾大学経済学部1年、駿台大阪南校卒。表三郎の教え子。）

内海信彦について

——とりあえず、二人は内海さんの教え子ということで、内海さんの話を聞いてみたいかな。

N まず、出会ったのが駿台。予備校の講師だったんだけど（芸術文化系論文ね）、いわゆる予備校的な授業をしない人で、色んな知識とかをアジってくるわけね。左翼のアジリ

に近い講義というか。そういうところでやはり違うな、と。

——彼が学生運動経験者ということを意識し始めたのはいつぐらいから？

N それはけっこう遅いけどね。まあ、実際はそういう話はあまりしなかったのよ。僕が“三島ネタ”やったんですよ。秋くらいに。それで気がついた感じ。

——“三島ネタ”というのは。

N 三島由紀夫の格好して、自慰する「男根崇拜のポルカ」ってネタ。それで1960年代、70年代の話になって、それから学生運動を意識し始めたかな。それで、“全裸連陰核派”につながるし。

——パフォーマンスをするということを内海さんから教わったのか？

N 内海さんに何かしろって言われて、自分でした感じ。そうするようになった。

——60年代の空気を考える上で、口だけではなく行動を伴えというのはあるよね。

N ある。

——内海さんはそういうタイプの人間なのかな。

N やはり批評家ぶっているやつとか、口だけってのは違うって言ってるね。

S 俺は内海さんと絡んでまだ半年も経ってないし、すごく信奉してるとかではないですけど、評価している部分はあると思う。

——学生運動経験者というのは？

S それは全然関係ないです。

N それは俺も関係ないかな。

S 優先の順番でいうと、学生運動に対しての興味ってそんなにないし、関係ないですね。

——じゃあ、どういう部分で。

S やっぱり実践しているっていうことが大きいかな。

N 先週もドイツにバウハウスのワークショップに行ってきたっていうし、アウシュビッツにも何度も行って、現地で「ライブペインティング」っていう芸術活動も行ってる。経験値が違うね。

S 自分の思想みたいなものを持っていて、かつそれを実行しているってのはエネルギーがいることだし、それが魅力的に俺には見えますね。学生運動、闘争っていうよりは、それが前提になって学生運動が出てくるって感じですね。

“三島ネタ”と“陰核派”

——中島君はなんで“三島ネタ”や“陰核派”をやろうと思ったの。

N “三島ネタ”は完全に内発的なもので、内海さんに関係なくやったかな。三島由紀夫をたくさん読んでたっていうだけなのだけれども、共感する部分、反論する部分は色々あってね。

Q どういう部分？

N 最初、野次馬的に入ったのね。顔が面白いと思った。この顔は今の世の中にはいないと思った。その後、本とか読み出して。野次馬的に入っちゃうと、自決の話とかが出てきた。顔も物まねできるし、やりたいな、と。

——パフォーマンスをして、刺激を得たのはどういう部分？

N 批評性をこめていて、当時の「大きな物語」があった時に切腹できたっていうのは、非常に憧れがある。それと、あんなこと今考えたらバカで滑稽だなんて思う部分と両方あって。大文字の国家とか歴史への真摯で率直な対峙は、たしかにあらゆる時代に必要な政治的態度なんだろうけど、社会が成熟して価値観が細分化した現代においては、大袈裟で馬鹿馬鹿しい噴き上がりになっちゃうんじゃないかと。前者は近代的で、後者は脱近代的って言えるとも思うけど。つまりマスターベーション的なナルシズムに満ちてる近代主義者の三島に対するアンビバレントな愛憎を、メタ的に可視化しようとしたらあのネタになったんだよね。

——要するに、バカなことを本気でやれる熱さっていうことなのかな？

N そう、その熱さ。

——三島の自決って色々なところに影響を及ぼしているよね。よど号とか。外国とかにも。

N みたいだね。まあ、でも個人的な、私的な部分でのパフォーマンスだよ。

——俺が最初に“陰核派”を見たときのことなんだけど、最初のセリフが気になる。

N 「東大生であることにに対してははっきりと拒否の宣言をしたい。なぜなら私は、東大生ではないからである。」

——そこに惚れたよ（笑）

N そこが語義矛盾というか、ナンセンスだからさ、たぶん一番面白いんだよね。

S ある意味で押しっぱい部分があるよね。それ言われちゃうともう何言っても勝ちっていうところはある。「知ってるよ！」みたいな。みんなが問題にもしない前提にも触れる。芸術の世界ではよく言われることだけど、いまお笑いの人でもそこまであからさまにやる人ってなかなかいないから面白いと思った。

O やる前とやった後での変化っていうのは？

——射精感があるってやつ？

N 気持ちいいのは気持ちいいよ。僕には陰核（クリトリス）ついてないけど（笑）。

——法政大学は学生運動やってるの？

N やってるやってる。

O 法政の人知っているよ。

——他のところはほとんどないよね。早稲田がちょっとくらい。慶應は皆無。

N “陰核”はギミックなんだよな。使っているだけで、そこまで内発的な動機でやっているんじゃない。内海さんの言っていることを取り入れてやっただけ。面白いじゃんって。DJ的にリミックスしてるだけ。かなり浅いよ。

——なるほど。パフォーマンスすること自体にアートの意味がある。

N そうだね。“三島”とか“陰核”とかのパフォーマンスは年上がけっこう引かかるんだよ。その人たちの記憶の引き出しを開けるわけ。で、そこをフックにして最終的にはよくわかんない所に着地させられればいい、と思うんだ。

運動と「今」

——法政の学生運動とは違うんだね。

N 違う。法政のやつらはベタにガチでやっている。

——例えばどういうところが？

N 労働者革命とか、党派組んで資本家倒そうとか、そういう話。

O 結局、新しい縄張り作ろうとかそれだけでは？

N それはあると思うよ。だから、僕は興味ない。全然リアリティーを感じないわけなんですよ。むしろ、関わりたくない。

——大学はどんどん締め付ける方向には行っているよね？

N それは僕も感じるよ。息苦しいし、つまんないし、出席とかめっちゃ取るしき。だから嫌なんだけど、でも今そういう運動してもリアリティーがあるのかっていうと、ないからさ。だから、グサイよね。

O やっぱ、上の人の話が響いてこないんだよね。

——リアリティーが違う。

O 昔の映像を見ていると、前に立っている人から震え立つようなものが聞こえてくる。けど、今やっている人たちの心は響いてこないよね。逆に白けさせられる。この人たちの理論のために動かされているだけやんっていう。

——昔は医学部の事件に象徴されるように、不条理な社会だった。しかも、一緒に闘った仲間が死んでいく。そんな中、自分がどう行動するかが問われてくるリアリティーがあったんだよね。

N 時代はかなりあったと思う。そもそもソ連があつてさ、共産主義革命がまだ信じられた。今ないでしょ。失敗したでしょ。また繰り返してどうすんのって。

O だから響いてこないの一言につきるよね。

S 運動自体、今は学生がやらない流れって言われているけど、僕は、逆に今ほど学生が運動している時代ってないと思う。学生運動の意味が変わっちゃって、「大学当局」とか言っても意味ないってことが分かったのだから、権力を相手にしないで勝手に「俺らでやるよ」ってフラフラしてる状態になっていだけで。どういう形で現れているかっていうと、サークル活動もそうなんじゃないの。

N スーフリ的な（笑）。違うか（笑）。

O 消化しきれないエネルギーを処理してる。

N 60-70年代っていう固有名詞ってのはないけど、広い意味での学生運動っていうことなら今の方がむしろしているんじゃないか。

——運動っていうからには何かと闘っているイメージがあるんだけど、そういうのはある？

N それはないよね。

——やっぱりない。それよりも、自分たちのアクティビティを楽しんでいるというイメージ？

S いいんじゃないですかね、それで。ただ、社会の規範に反発しているというところはあるよね。

O 逆に、心に響くことが言えるような人が出てきたときの楽しみはある。

表現と「今」

——当時の空気っていうのは無理かな。

Q それは無理。

S 全体的な流れは無理でしょうね。けれど、個人の好みに最適化されたものはあるから、皆そこで満足しちゃうし。

N 「島宇宙」的なね。

——「島宇宙」で満足しきれんのかという問題がある。

——表現者として何が問われている？ 用意されたもので根源的に満足できない者が芸術家になるって内海さんが言っていたような気が？ そういう人になる気はない？

S うーん、一億総表現社会に行くんじゃないかな。表現するためのコストも減ってるし。「個性を大事に」っていう圧力も前より高まってるわけだし。

——じゃあ、その考え方は古いのかな？

N 分からない。けど、行き着くと、萌え要素の方に行くんじゃないかな。ブロッコリーのな。

——運動は？

N 運動はしてるよね。

——けど、反体制派ではない？

N 体制ってもうないんじゃないの？

——（笑）

Q 俺はまだ体制を感じる。

S 体制が嫌なら、そこに干渉されないで生きる方法があるのだから、そうしなよってことじゃないの？

Q そうすると自分の可能性を縮めることになる？

N 体制はあったとしても、より見えにくくなっているってところはあるよね。システムが全部。

——システムに対して疑問を抱かない方が生きやすくなっているよね。それは昔でも一緒なんだよね。

N それは俺も抱いた。だから、“陰核”のセリフっていうのは、あれはお笑いじゃなくて、システムに対する反発を伝えたんだよ。

——けど、運動でそれを変えようっていう気はないんだよね。

N それはないね。

——変わらないけども、表現してアピールすることに意味があるの？

N 運動では変わらないと思うけど。

——じゃあ、何のために表現する？

N うーん。

——ラディカルな話になってきた（笑）。

運動による表現＝パフォーマンス？

——当時でもそうなんだけど、当時の論理、例えば「自己批判」の論理はある種自分をごまかす論理だと思うわけ。共産主義革命のためには我々は自己批判をして戦士として生まれ変わらなければならないんだってね。人間が疎外されているよね。

N 自意識が出ているっていうのは感じる。普段の自分の自意識、つまりコンプレックスが全部運動で「自分はすごいんだ」って思い込んじゃえる装置があったからね。それで自分をごまかしていた。

——当時の共産主義運動は、自分を保つ装置だった。それはそうだろうね。

N 自意識回収装置だったんじゃないっていうことは、最後バレたじゃん。内ゲバになって。

——そこまで分かっている、なお表現したいこと。俺はそこに非常に興味があるね。

N うーん。政治的なことで表現しているんじゃないく……。いや、政治的だけどね（笑）。

——政治を道具にしているけれど、主張は政治的ではない。

N 今の息苦しさみたいなのは感じるわけなんですよ。表現やパフォーマンスをしないで生きていたら、どれだけつまらないのかっていうのは感じる。

——パフォーマンスは楽しい？

N 純粋に楽しいと思える。

——いいよね。

N それで、その息苦しさを自分でどうにかしなきゃいけないって時に、ああなるわけ（笑）。

——パフォーマンスが退かれることはないの？

N いやいや、退かれることを前提にやるわけですよ（笑）。

——他人が認めてくれない辛さは？

N これでも色々と考えてやっているんだよね。自分の本当にやりたいことだけやっても、多分誰も見てくれない。皆にフックを散りばめておくわけなんですよ、皆が食いつくような。そこから、最終的に自分の言いたいことを言うっていうふうに持っていくんだよね。フックだけなら、表現、アート、笑いではなく、商品・コンテンツになっていくんだらうけどさ。それがやりたいわけじゃなくてさ。やっぱり、笑いのアートをやりたいわけね。

——当時の運動が失敗した要因の一つがユーモアがなかったって話が。

N ベタなんだよね。

——表現したものを認めてくれないと辛いよね、やっぱり。

N そうそうそう。

予備校ってどう？

——榮君、予備校生として大学生に感じる不条理はある？

S 全然ない。

——予備校楽しい？

S まあ、楽しいって言うていいんじゃないですかね？ でもあんまりそういうのは考えたことないっていうか。予備校だからっていうのは特別意識してなくて、ただ中学高校のときからそういうテンションだったのでその延長っていうか。ただの日常？ でもいわゆる「学校」ってそういうものじゃないですかね。自分にとってはそうです。

——僕は表三郎の教え子で、彼も二浪しているんだけど、彼の話でも、やっぱり予備校生も高校生も大学に行くと熱くなくなるわけね。だから、予備校生は大学生に対してルサ

ンチマンがあるのかな。そういう考えが予備校で養われた。予備校の一年はあるのとなないので、今は全然違う気がする。

Q 批判的にものを見るというか。当たり前のように押し付けてくるのが大学だから、それをしっかりと自分で考えて見極めろっていうね。自分のことを含めて批判的に見ること。

——その辺を含めて、予備校生としてはどう思うか。

S 僕はベーシックな予備校生じゃないので、参考にならないと思う（笑）。僕は中学の頃、自分の好きなものがマジョリティの好きなものと違うということを認識していた。その時点で、周りは関係ないというか同じコミュニティに属していても自分と他人は違うということに気づいた。というか、そのときまではきっと無意識下では自分と他人が違う人間だと思ってなかった。だから、予備校生がとか、大学生がとか、どの集団に属しているとかはあんまり関係なくて完全に個人の問題だと思っている。

——それは、なかなかすばらしい考え方だな。

S 高校の時、なんで自分の好きなものが認められないのだというのはあった。けど、それって触れる機会がないだけで、いくつかの経験を通して、触れる機会さえあれば皆好きになるかもしれないって思うようになった。

N そういう機会を作っていくということをやりたいわけ？

S うん、機会を作っていくということで、自分の欲望を満たせるだろうなって。他は現時点でそいつがどうかは興味ない。

——予備校時代があろうとなかろうと変わらないみたいだね。

S うん。

——周りの予備校生はどう？

S 知らない。一同：（笑）

N 僕はベーシックな例だったと思うので話すと、高校の頃から麻布といういいところの高校で、東大に行ってやろうかなっていう気持ちはあったんだけど、現に自分の成績が足りなくて、現役で全落ちした。それで、駿台行って、鬱々とはしてたよ、やっぱり。

——漫画（注：中島の書いたオリジナルの漫画）にも出てたよね。リアリティがあった。すごく現代的だと思う。今って、受験で価値の序列が決められる時代にどんどんなっている気がする。学歴社会。

N 前からだよ。70年代の共通一次かららしいけど。

S それって、本人が頑張ればどうにかなるからいいじゃんって思っちゃうんだけど。受験って今のところいわゆる「才能」を問うているわけじゃなくて、誰でもやれば出来るレベルのものを聞いているんだから。

Q それをやりますと、個人主義になって、どうなのかな。

どのような社会が理想？

S ソーシャルデザインで、個人が勝手に生きてても社会が維持できる仕組みにすればいいじゃん。本人たちが自覚的に社会を維持していくっていうのじゃなくて、社会の枠組みを作っちゃって、その中で自由度の高い社会にして欲しい。

N 近代ってのは、教育とかで自分の倫理とか社会的責任感のある人を作ることによって社会を回していたけれど、それがなくなってきて、ポストモダンになって、システムで、環境管理で社会を回せるようになってきたと。その中で皆がグダグダ生きていると。それは完全にいいじゃんとは言えないんだけど。

O 枠組み決めてやっていくというのは、枠組みに入れたらいいけど、入れなかったらどうするの？

N 今、その問題があるよね。

S どこに設定するかという問題。

N 秋葉原の加藤さんだと思う。

S 「攻殻機動隊」ってあるよね。あれのテレビのやつで何度も出てくるのが「社会がダメなら、自分が変われ」っていうセリフがある。そうじゃんと思えない。というか、そっちの方が早いし楽だと思う。それは、社会に迎合していくっていうことでは必ずしもなくて。

——それは、強い生き方だね。

N キツイ人が出てきたら救わないとっていうのはあるけどね。

——それが、いわゆるネオリベ的社会ってやつだね。お金の序列が価値の序列。競争で排除されるのは仕方がないっていう。

予備校界のこれから

——俺が問題だと思っているのは、受験戦争に勝った者は幸せになれるっていう神話が蔓延っていること。

N それはあるよね。

O うんうん。

S けど、それはそういったイデオロギーがないと頑張れないじゃん。

——そうなんだけど、勝ち残ったやつが目標を失うような気がして。

S それは予備校・受験業界的には「自己責任」って切り捨てられる。

——もちろん、そうなんだけど、それはどうなのかっていう。

N 教育当事者からすると既得権益だからね。

——良い悪いという問題ではなくて。

O 自己責任で仕方がないというのは、俺からしてみれば、対話責任を拒否している気がする。

——対話責任？

O 予備校というところは何のために存在しているとかそういう部分。

S 予備校はいいんじゃないの。

——予備校も変わってきているよね。内海さんも言ってた。

S 変えてくれって感じ。受験で「～の大学に入りたい」っていうニーズを満たすために予備校というのがあるのだったら、駿台とかのやり方っていうのはもう最適じゃない。より最適化された機関が他に出てきたから、駿台とか旧来の予備校はシステムとして勝てなくなる。だったら、もしかしたらもう予備校とは言えない形になるかもしれないけど、今までの予備校とは違う方向性を模索した方が、駿台のためにもなるんじゃないかなと思っ

ちゃう。

—— どういう方向性が理想かということだね。

Q それは色々ある。

N 一つの理想を呈示するのは無理かな。

その後、取り留めもない話を延々とした。

最後に一つだけ気になったところを載せておくと、

N つながりっていま mixi なんじゃないの。

Q 対話のレベルが浅いかなっていう。

人は生きていくためには、人とのつながりが必要である。60年代はもしかしたら、マルクス主義がその役割を果たしたのかもしれない。それに対して、ネット上のツールが発達している現代は mixi である。これは良い／悪いという話ではなく、ただ、現代は一昔前（60年代）とは明確に社会形態が異なっているのだということ。

今回集まった若者たちの視点は「革命は古い」の一言につきる。現代の社会形態を肯定しつつ、いかに「自分がより良く生きる」ということを目指すか。そのための一つの手段が表現すること、芸術であった。今回のこの対談は、時代は変わったのだということの一つのメルクマールを象徴的に表すものなのかもしれない。

ゼミ生から

せき しょうへい
関 翔平

東京大学文科 III 類 2 年

「全共闘」班，始動。あれはきっと，2008 年の 5 月頃のことだった。

僕は東大の駒場キャンパスを歩いていて，道端に色々と面白いものがあることに気づいていた。101 号館前には「一高」の字が記されたマンホールがあり，正門を入れて左手にいくと，「一高ここにありき」の碑が建っている。農業学校時代の記念碑も建っていれば，真新しい食堂や図書館の新築建造物群の奥には，かつてそこにあった駒場寮のアーチが残されていた。学生たちによるサークル活動や文化活動の拠点となっている学生会館には，無数の落書きが残されていた。大昔に書かれたであろう政治的なアジテーションや，退屈な毎日を恨めしげにマジックペンで書き綴るへたくそな文章。落書きは，しかし「学生」をずっとそこに残していた。

僕は教室に閉じこもっているより，ぶらぶらするのが好きだ。ぶらぶらしていると，色々なものが目に飛び込んでくる。東京大学はひとつの歴史であり，学生たちの歴史でもあるのだと感じられた。

あるとき，大学の書籍部で全共闘に関する写真集を手にしたことがあった。ぼくが毎日のんびりと歩いている駒場や本郷は，1968 年を写したそれらの写真の中では，ゲバ棒とヘルメットに埋め尽くされ，机は引っくり返され，殺気立った学生たちが対峙する戦場だった。今の学生がテニスラケット片手に闊歩している銀杏並木を，彼らはゲバ棒片手に走り回り，僕らが新築された食堂の中で定食を食べる代わりに，彼らはバリケード封鎖された教室の中でおにぎりをほおぼっていた。同じ空間に存在した，あまりにも異なる時間の流れ。僕はそのとき強烈に「知りたい」と思った。

義務ではなく。そして現在を，過去を，否定するのではなく。身の上に流れた時間は違えど，同じ空間を，あるいは同じ「学生」という期間を過ごした僕ら，そして彼らの間には，あまりにも異質な，しかしあまりにも興味深い対話が生まれるのではないか。そう思った。そんな時，僕ら「全共闘」班は，集まった。現在を，過去を，否定するのではなく。散歩するように，しかし当時を生きていない僕らはあるいは「門外漢」と罵られるかもしれない。だけれど，彼らはあの時学生であって，そして我々とともに「今」という時間をなお共有している。それだけで十分だし，それが一番大切だった。取材では，本当に色々な人達にお話を伺った。全共闘の一員として闘った人，運動の激化に反対して真っ向

から立ち向かった人、あるいは運動から降りた人、警察の側から運動に対処した人、腹の中にもやのようなものを抱えながらしかし、傍観していた人。そこに僕らが見出そうとしたものは政治的なメッセージや各党派の主張ではなかった。あの頃学生だった、そして真剣だった「個」としての彼らが、何を思い、そして今何を思っているのかということだった。学生として何を思い、そして今の学生について何を思うのか。彼らがお互いにぶつけ合った激論、主張。論争のその先にある可能性としての対話が、何を今に残したのか。そして今なお、残しうるのか。1960年代末の学生運動は終息したが、まだ1960年代末を生きた人々の「個」は続く。あの頃の学生運動は負の遺産も多く残したかもしれない。だけれど同時に、もし未だに語られていない「正」の遺産があるのなら、はた迷惑かもしれないがそれを探り出し、未来に投影したい。しばらくの間僕らと彼らが未来を共有するのなら、その間に。そして僕が今こうして学生である、この瞬間に。取材は進んでいった。

一緒にゼミで活動してきた近藤、山本の二人とは何度もぶつかった。激論して、これでもう解散か、と思うことも多々あった。だが、こうして11月23日の企画の準備も佳境に入っている今、僕たちは論争の先にある対話を少しながら見出した気がしている。誰がトップでもなく、しかし誰もが個人として。企画をやってきたことの一番の収穫は、もしかしたらこのことだったのかもしれない。

取材を快諾してくださった干場革治氏、高橋公氏、三浦聡雄氏、若松孝二氏、佐々淳行氏、柴田洋一氏、鈴木邦男氏、そして当日講演者としてパネルディスカッションに参加してくださる最首悟氏、米田隆介氏、様々な場面でアドバイスを下さった前田和男氏、お忙しい打ち合わせの中お邪魔させて頂き、これまで知らなかった全共闘の側面をお教えくださった日大全共闘の諸氏にまず心からの感謝を申し上げたい。そして立花先生、事務所の菊入さん、緑さんにもここまで企画を進める手助けを様々な場面でして頂いたことに心から感謝している。ゼミ生のみんな、学期終わりまで残り少ない時間だけど、これからがんばりましょう。それでは拙文失礼。

やまもと りょう
山本 遼

東京大学理科I類1年

ゼミの時間に東大の駒場寮についての話が出たことがきっかけで、かつて東大を覆った“熱い”時代のことを知りたくなった。それだけの、素朴な動機。知識など、何も持ち合わせていない。

運動の引き金となったのは、大学運営者たちの権威主義的な振る舞い、あるいはその中でなされる「教育」に対する激しい憤りだったことを知る。調べれば調べるほど、数多の声が堰を切ったかのように出てくる。臆することなく、「団結」「闘争」「粉碎」「革命」「勝利」…いま学生の身分にある自分を包む、この気怠い日常とはおよそ縁遠い言葉を高らかに叫ぶ彼らは、いったい何者なのか。原動力は何なのか。

今や、当時の面影の多くは消え去っている。いや、消し去られているという方がより正確だろうか。それでも、あの時代を直に体験した方々や、運動の様子を記録した資料・写真などに接すると、状況がどちらに転ぶとも分からない緊張を感じることができた。“Care”という視点において、人の考えを汲むすべも知った。だが彼らにとって、運動は「論理」を推進する過程でもあった。言葉を駆使し、己の主張を貫徹する。たとえ警察側の目論みが多少働いていたとしても、結果として彼らは互いを噛みあい、傷つけあった。あまり積極的でないながらも、僕はそうした状況に、温もりとは異質な「人間らしさ」を見いだしている。戦争のような（少なくとも日本人にとって）極端な例を持ち出すまでもなく、日常的に「論理」「理性」の無力さを感じることは多々ある。

あの運動が、雰囲気掴みだけでは足りない要素を併せ持っているということを忘れてはならないと思う。そして僕は、図らずもこのことに苦しめられている。いつまで経っても、対象に深くまで潜っていくことができない。伝え、受け止め、共感し、反論し…「世の中に眼を向け、何かを変えようとする意味も、『自分』の文脈でしか語り得ないのだろう」などと、ある種の虚無的な感覚からいつまでも抜け出せずにいるのだった。

気が付くと、言葉をほとんど持たずにここまで来てしまっている。近藤さんや関さんが強い目的意識を持って行動しているのとは対照的だ。二人が始終“熱さ”を放ちながら論を交わしていた姿は、非常に印象深かった。語り、そして語らせる能力を持たない者は、社会というコミュニケーションの網^{ウェブ}の中で、他者の足手纏いとなり、いつしか置き去りにされる。めまぐるしい現代を、どう生きるか…依然、何らかの光明がああ運動の中に見いだせるような気がして已まない。あるいは、既に知っているものの表現できていない、というだけなのだろうか。

悔しさとは違うけれども、どこかもどかしい。とりあえず「そんなものだ」と割り切っておくことにしたい。

おわりに——この企画に携わる中で非常に多くの刺激を与えてくれた関さんと近藤さんの二人、そして企画の運営に協力してくださったすべての方に、この場を借りて深くお礼申し上げます。

こんどう のぶろう
近藤 伸郎

東京大学文科I類1年

まず、最初に僕はゼミ長の関さんにもものすごく感謝しているということを言っておきたい。時間割をこれでもかというほどギュウギュウに詰めていた僕が無理をして立花ゼミに來た動機の一つは、もちろん立花隆師自体にもあったが、それと同じくらい大きかったのは、学生運動にある。立花ゼミに参加していた友人（別の企画に参加）から「全共闘の企画もやっていたよ」と聞いて、それならば行ってみようかと思ったのである。僕はもともと学生運動を勉強したいというモチベーションがあつて、そのために企画を利用した、とも言えるのである。この全共闘企画がなければ、これほど各界の人に取材に行き、「学生運動とは何だったのか」というテーマにコミットすることはなかったに違いない。今の僕がいるのも、関さんのおかげなのである。

僕が学生運動に興味をもった理由は明確に大学受験期にある。現役受験生の時は東進ハイスクールの須藤公博先生、浪人生の時は駿台予備校の表三郎先生、その友人でもある河合塾の牧野剛先生から学生運動経験者のエートスを感じ取ったのである。僕は小さな頃から周りの環境に漠然とした疑問を抱くことはあったが、これほどまでに社会的にタブーとされた問題に堂々と斬り込む先生方はどこにも見なかったのである。純粹にすごいと思った。しかも、とてつもないエネルギーだった。感動したのだ。社会の中の何か隠された宝物を発見した気がしたのだ。

その宝物は僕の長い受験時代に増幅された。僕は駿台予備校で一年やっても、東大に受からなかったから、慶應義塾大学に行き、再受験（つまり僕の大嫌いな表現を使えば「仮面浪人」である）をすることになるのだ。受験生を3年していたことになる。慶應時代、受験勉強をした記憶はないが、「東大生バカヤロー」と言って本を読んで、論文を書いていた記憶はある。これが「周辺」の「中心」へ向かうベクトルのエネルギーなのだ。そのエネルギーの中で、僕の「世界へのアンチテーゼ」は増幅したのだと思う。そして、僕は今、その大嫌いな東大にいる。自己矛盾である。けれども、僕はこのことに関して自己批判をするつもりはない。今の僕は誠実に生きてきた結果であるから。自分が精一杯歩んできた道ではないか。それに誇りをもたずして何に誇りを持つのだろう。むしろ、僕は自己肯定してもいいのではないかと考えている。歪んだ体験が原動力となり、新たな世界を生み出したのだから。ズレたエネルギーは様々な原動力になりうる。世界に対してアンチテーゼを掲げ、世界を変えたのは、いつの時代も周りとズレた変態たちであった。今の時代も必要とされているのは変態たちなのではないか。

学生運動経験者のメンタリティーには、何か普遍的な形而上学が潜んでいると思っている。もちろん、運動の話は一筋縄にいかない問題ではある。簡単には語れやしないし、語れば語るほど遠ざかってゆくような側面もある。けれども、沈黙すれば良いという問題ではないと思うのだ。たしかに、暗い過去である。特に逮捕された（パクられた）者はそうであろう。その質感は体験者にしか分からないだろう。けれども、ある種の普遍性を考えること、語ること、伝える努力は必要だと思うのである。自己肯定して欲しい。それは、

人間が根源的に類的存在であるから。

語ることを「accountability＝対応能力＝責任」として相手に押し付けることはしたくない。「総括要求」はしたくないのである。ここから先は倫理の問題であり、強制力は伴わないだろう。各人の哲学の問題である。だけれども、人間とは誤謬的なのだ。間違いだってある。弱さを認める勇気があっても良いだろうと思う。この考えは、取材を進めて行き、様々な人に話を聞いて育まれたものである。彼らの体験は、若者にとってのアクチュアリティとなるはずだ、と思っている。

現代がどこか生きづらい時代だと言われる原因と、60年代のあの頃の空気の諸原因というのは、どこかで根っこが繋がっているのではないか。このように考えるとき、学生運動が“ほぼ”皆無となった日本において、当時の彼らの体験は、「今をどう生きるか」という問題を考える際に大きな示唆を与えると思うのである。彼らが「革命」のために生きたと仮にすれば、会場にきたあなたは何のために生きるのだろうか。人間なんてそう変わりはない。答えの根っこはどこか一つにまとまっているはずだ。

このような問題意識で、僕は立花ゼミの全共闘企画を進めている。やはりズレている僕としては、全共闘班との「ズレ」も気になっている。けれども、思うのである。良くやっているよなあ、と。5人の全共闘班（中心で動いているのはたったの3人！）でよくここまで企画がやれたよなあ、と。皆、連日徹夜で仕事をやった。まるで当時の人たちのようである。それに、僕がもう一つとても感動したのは、ゼミ長の関さんが、全共闘班のトップになりたいと言ったことである。全共闘班としては、あくまで全共闘“的”に、組織のヒエラルキーを認めずやっていきたい、と。だから、彼は山本義隆のポジションだよ。僕のような変態がいるなかで、果たして組織としてのまとまりが出るのだろうか。それがずっと疑問だった。何度も内ゲバが起ころうになった。こうして今、原稿を書いている時でさえ、そうである。けれども、何はともあれ、こうして一つの企画ができたではないか。そのことを「自己肯定」（組織は＜自己＞である）しておきたい。

最後に、人が何のために生きているかということに関する今の時点での僕なりの答えを示しておきたい。それは、人間がコミットする二つの大きな対象……ズバリ「恋と革命」である。なぜかこの言葉が頭に残っている。それは、エロスとタナトスとも言えるかもしれない。生と死は渾然一体。僕らは死ぬようにして生き、生きるようにして死ぬ。そういった時、最後まで残るものは何だろうか。命を持っていること？ そのスピリチュアリティ？ 人と人が繋がっているということ？ 企画発起人の関さんだけではなく、一言も文句を言わずに僕らを支えてくれた山本君（彼の協力がなければ、冊子もホームページもできあがらなかった）、講演を快諾して下さった立花先生、センシティブな部分があるにも関わらず今回の企画に参加してくれた学生運動経験者の方々、もしくは現役で学生運動をしているの方々、我々のインタビューに快諾して下さったの方々、企画の垣根にとらわれず協力してくれたゼミ生の皆、見に来てくれた皆、そうした「人とのつながり」があって、初めて今回の企画は成り立った。心から感謝したい。

文献一覧

単行本

荒岱^{たいすけ}介・鈴木正文・藤本敏夫・神津^{こうづ あきら}陽 ほか

『全共闘三〇年——時代に反逆した者たちの証言』, 実践社, 1998 年

北野隆一『プレイバック「東大紛争」』, 講談社, 1990 年

小阪修平『思想としての全共闘世代』, 筑摩書房, 2006 年

佐々淳行『東大落城——安田講堂攻防七十二時間』, 文芸春秋 (新書), 1996 年

島泰三『安田講堂 1968-1969』, 中央公論新社, 2005 年

すが^{すが}秀実『1968 年』, ちくま新書, 2006 年

立花隆『中核 VS 革マル』(上下巻), 講談社, 1983 年

三島由紀夫『三島由紀夫 vs 東大全共闘——1969-2000』, 藤原書店, 2000 年

山本義隆『知性の叛乱——東大解体まで』, 前衛社 神無書房, 1969 年

渡辺^{ひとみ} 眸『東大全共闘——1968-1969』, 新潮社, 2007 年

資料集

68・69 を記録する会編『東大闘争資料集』, 全 23 巻, 1992 年

全共闘白書編集委員会編『全共闘白書』, 新潮社, 1994 年

『新版・叛逆のバリケード』編集委員会編『新版・叛逆のバリケード 日大闘争の記録』,
三一書房, 2008 年

雑誌

『悍【HAN】』, 白順社

『情況』, 情況出版